ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第52号

平成6年度発掘調査事業予定----------水谷　壽克-----1

平成5年度京都府内埋蔵文化財の調査----------平良　泰久-----5

長岡京跡東京極大路の発掘調査
ー長岡京跡左京第286・313・317次調査ー ----------鍋田　勇----11

竹製経筒の復元について一漆を塗布した竹製経筒の新例ー-------小池　寛----21

ー平成5年度発掘調査略報ー----------27

19. 黒部製鉄遺跡　　23. 池尻遺跡第2次

20. ニゴレ遺跡　　24. 伏見城跡

21. 上野古墳群　　25. 内里八丁遺跡

22. 七百石遺跡

研究ノート　正L字文を持つ規矩鏡について----------原田　三壽----41

資料紹介　大山崎町下植野南遺跡出土の遺物----------中川　和哉----47

府内遺跡紹介　62. 法住寺殿跡----------53

長岡京跡調査だより・49----------56

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧----------60

センターの動向----------61

受贈図書一覧----------63

1994年6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版第1　　青龍三年銘鏡

弥栄町教育委員会・峰山町教育委員会提供
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター撮影

図版解説

大田南５号墳出土方格規矩四神鏡

大田南５号墳は、峰山町字矢田と弥栄町字和田野の境、竹野川を見下ろす標高82.2m、比高差60mの丘陵上に位置する４世紀後半の古墳である。土砂採取計画により、昨年11月から峰山町教育委員会と弥栄町教育委員会の合同調査が行われ、丁寧に加工された凝灰岩製の組み合わせ式石棺から日本最古の紀年銘鏡が出土した。青龍三年の魏の年号とともに作者と考えられる「顔氏」も初見のものであり、邪馬台国論争や「丹後王国論」に関係する資料として脚光をあびた。

副葬品は、棺内から銅鏡１面、鉄刀１口、歯十数本、墓壙上から破砕された高杯、器台、壺などの土師器片が出土した。銅鏡は棺内の北西隅に鏡面を上に向け置かれ、布片が付着しており、鏡の下の底石には黒色腐食土が残存していたため、布に包まれ、木箱に入れ被葬者の頭部右側に置かれていたと考えられる。棺内の南西部分には何重もの布に包まれ刃を外側に向けた鉄刀１口が置かれていた。

銅鏡は、直径17.4cm、重さ570ｇの紀年銘のあるものとしては初出土の方格規矩四神鏡である。鈕は、直径３cm、高さ9.5cmの偏平なもので、８mm×3.5mmの長方形の鈕孔を持ち鋳張りが残る。また、鈕孔は方格文に対し、左上がりの対角線の方向に穿たれている。

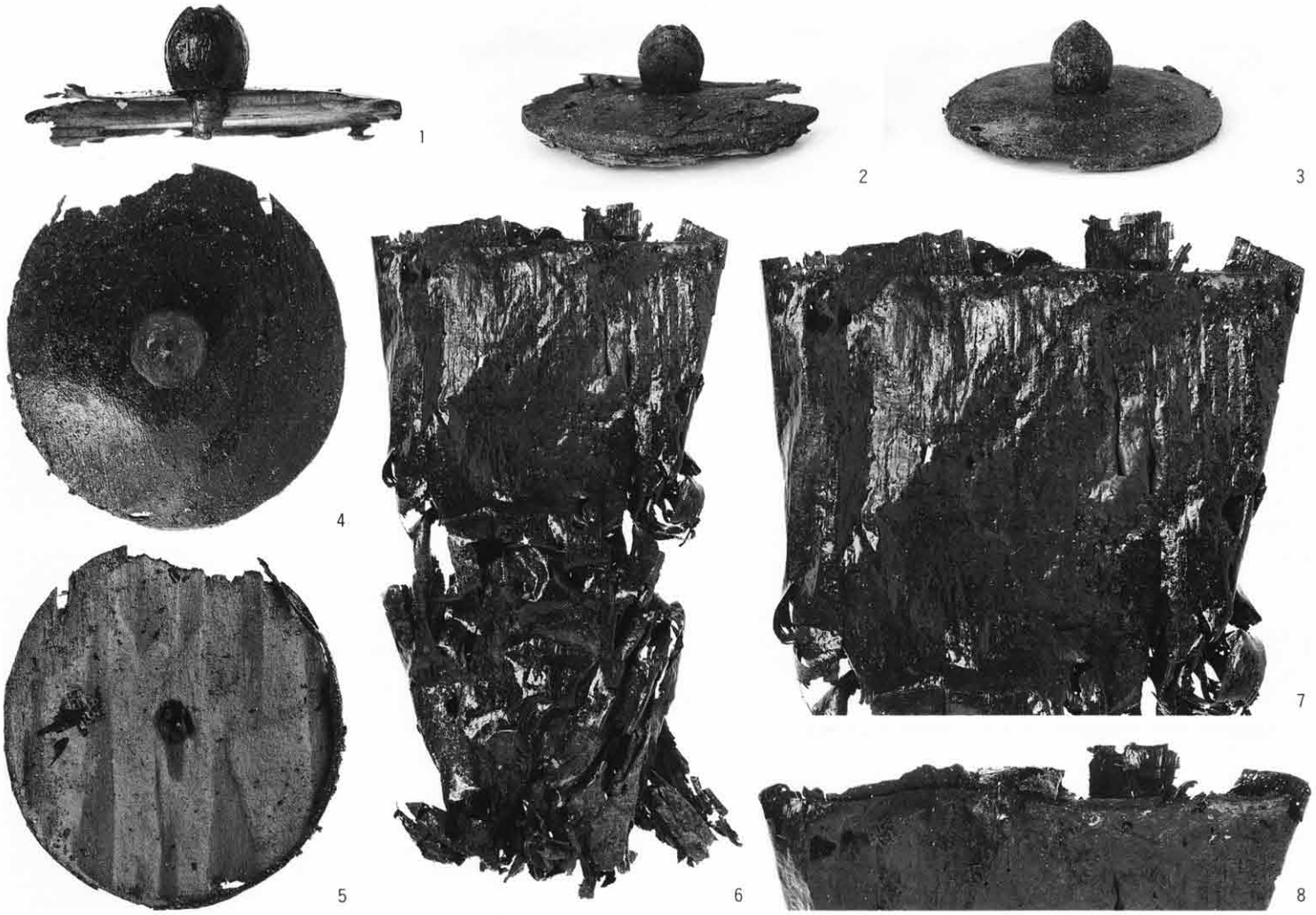
一般的な漢代の方格規矩四神鏡との違いは、内区の四神の位置が左右逆であることと、Ｌ字形の方向も逆になっている点である。四神のペアとなる文様は、玄武と動物に乗る仙人、青龍と動物、朱雀と左手を拡げる仙人、白虎と鳥である。２人の仙人は、ポーズの違いはあるが頭の形が同一である。方格の線は、完全な直線にならず全て外側へ膨らむ。また、Ｖ字形の一部も鋭角となるなど、割り付けに乱れがある。方格文とＴ・Ｌ・Ｖ字の凹部分には、線状に削られた跡が明瞭に残る。

銘帯には右回りに、『青龍三年顔氏作竟成文章左龍右虎辟不詳朱爵玄武順陰陽八子九孫治中央壽如金石宜侯王』の39字の文字を持つ。文字間は1.5～５mmまであり、一般に最初と最後の部分が狭くなっている。

外区は、鋸歯文＋珠点を持つ複波文＋鋸歯文であり、外周突線を持たない。また、斜めの端部の半分はシャープさを欠く。

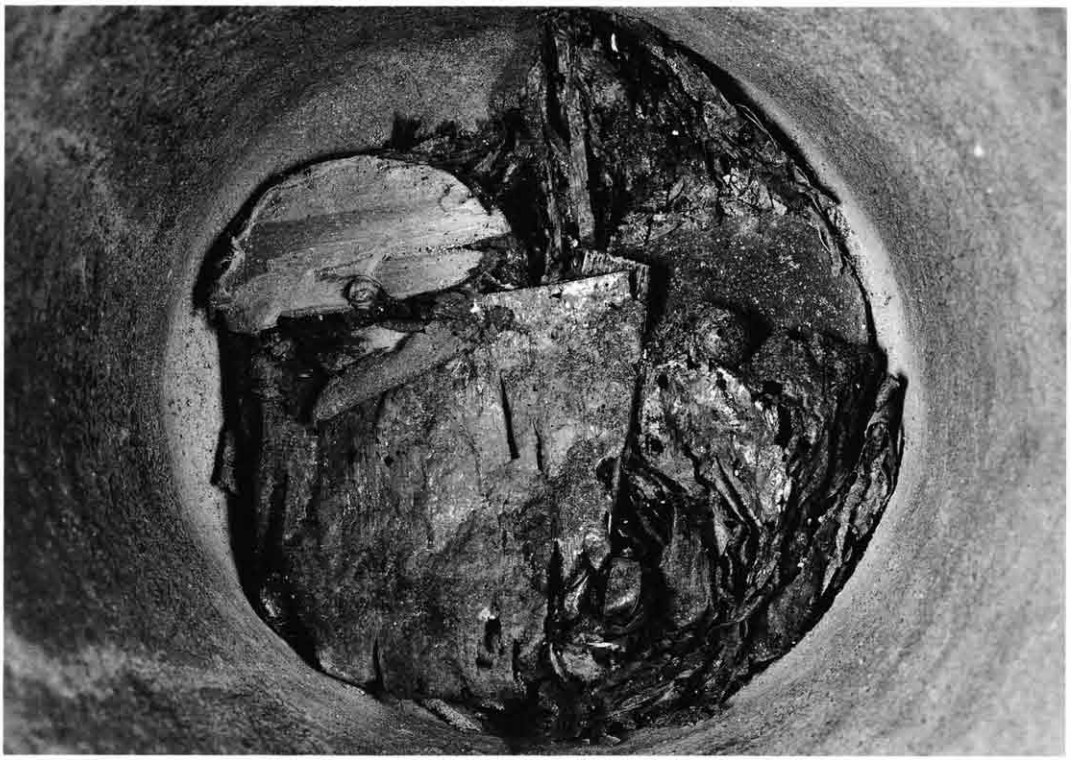
銅鏡は、全体に緑色錆で覆われているが鏡背及び鏡面の一部に黒灰色の地金色が見られる。また、鏡面には隆起状の錆も出ている。Ｘ線写真によると、銅鏡を破砕する悪性の錆の巣は極僅かであり、全体に安定した状態にあるといえる。ただ鏡面をよく観察すると細いクラック（ひび割れ）が数本見られる。Ｘ線によると、これらクラックは最大幅１mm、長さ１～８cmのもの十数本が全体に入っている。

（安田　章＝峰山町教育委員会主査、横島勝則＝弥栄町教育委員会主事）



経筒蓋・経筒外面塗布漆被膜
1：つまみ接合〔経筒外容器4出土〕　2：1と同一個体　3：経筒蓋〔経筒外容器4出土〕4・5：経筒蓋内外面俯瞰〔3と同一個体〕
6：経筒漆被膜俯瞰〔経筒外容器4出土〕7：口縁部ディテール〔6と同一個体〕　8：口唇部ディテール〔6と同一個体〕

巻頭図版３　　竹製経筒の復元について



経筒外容器内　経筒蓋・経筒外面塗布漆被膜出土状況
（上：経塚ノ経筒外容器２、下：同４）

平成６年度発掘調査事業予定

水谷壽克

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、国、公社、公団及び府の開発事業等に伴い、どうしても避けられない遺跡について事前に調査を実施している。年間受託事業は、京都府教育委員会が開発事業者と文化財保護法による事前協議を行ったうえ、当調査研究センターと調整を図って決定される。事務局の体制は、後掲する組織及び職員一覧のとおり、事務局長以下３課７係の体制をとり業務の円滑化を図っている。

平成６年度に予定している受託事業件数は29件、遺跡調査箇所数は45遺跡を数える。原因別にみると、道路新設・改良に伴う調査が15件、庁舎・学校・住宅建設等に伴うものが８件、施設整備・河川改修・農地ほ場整備関係に伴うものがそれぞれ２件、団地造成に伴うものが１件である。

今年度特にその成果が期待されるものを挙げると以下のとおりである。

黒部製鉄関連遺跡・左坂古墳群・裾谷横穴群ほかは、丹後国営農地開発事業に伴う調査である。黒部製鉄関連遺跡は、竹野川下流域において古代丹後の一大製鉄遺跡として話題を呼んだ遠所遺跡やその隣接する谷部のニゴレ遺跡と同様、竹野川右岸に位置する製鉄遺跡である。今年度は昨年度検出した製鉄炉・炭窯の発掘及び谷部の試掘調査を実施し、遺跡の範囲及び遠所遺跡群との関わり等その性格について明らかにする。

大宮町周枳集落背後の丘陵及び谷部には、総数110基以上から成る左坂古墳群、弥生時代中期から後期にかけて築かれた左坂墳墓群、古墳時代から奈良時代にかけての里ヶ谷・左坂横穴群が点在している。これらの遺跡群は、平成２年度から京都府教育委員会・大宮町教育委員会・当調査研究センターが調査を実施し、丘陵一帯が弥生時代から奈良時代にかけての墓域であることが判明している。今年度は古墳14基の調査を実施し、他地域との文化交流について調べる。

竹野遺跡は、国道178号道路改良事業に伴う調査である。竹野川河口右岸の砂丘上に営まれた弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡で、弥生時代前期の箆描流水文土器や陶塤の出土等により周知の遺跡である。今回は、道路拡幅に伴う帯状の調査を実施し遺跡の広がりを明らかにする。

平成６年度　発掘調査事業予定遺跡一覧表

番号	遺跡名	種　別	所在地	調査原因
1	黒部製鉄関連遺跡	製鉄炉	弥栄町	農地開発
2	糖谷城跡	城跡	弥栄町	
3	奈具古墳群	古墳	弥栄町	
4	奈具岡遺跡	集落跡	弥栄町	
5	左坂古墳群	古墳	大宮町	
6	裾谷横穴群	横穴	大宮町	
7	北谷古墳群	古墳	久美浜町	
8	上野古墳群ほか	古墳	丹後町	道路建設
9	竹野遺跡	集落跡	丹後町	道路建設
10	ニゴレ遺跡ほか	製鉄炉・窯跡	弥栄町	施設整備
11	奈具岡遺跡（府道）	集落跡	弥栄町	道路建設
12	金谷古墳群	古墳	峰山町	道路建設
13	定山遺跡	集落跡	岩滝町	住宅建設
14	青路古墳群	古墳	舞鶴市	道路建設
15	銭塚古墓	古墓	舞鶴市	
16	山尾古墳	古墳	綾部市	道路建設
17	大俣城跡	城跡	舞鶴市	
18	西飼神社遺跡	散布地	舞鶴市	
19	洞中古墳	古墳	舞鶴市	
20	龍尾寺跡	散布地	舞鶴市	
21	今林古墳群	古墳	園部町	道路建設
22	塔遺跡	集落跡	京北町	ほ場整備
23	篠窯跡群	窯跡	亀岡市	道路建設
24	亀山城跡	城跡	亀岡市	校舎建設
25	長岡京跡ほか	都城跡	向日市	住宅建設
26	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市	道路建設
27	上津屋遺跡	散布地	八幡市	道路建設
28	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	
29	若林遺跡	集落跡	宇治市	住宅建設
30	井尻遺跡	散布地	宇治市	住宅建設
31	宇治市街遺跡	集落跡	宇治市	道路建設
32	北稲遺跡ほか	散布地	精華町	道路建設
33	椋ノ木遺跡	散布地	精華町	施設建設
34	弓田遺跡	散布地	木津町	道路建設
35	梅谷瓦窯跡	窯跡	木津町	団地造成
36	市坂３号墳	古墳	木津町	
37	市坂瓦窯跡	窯跡	木津町	
38	釜ヶ谷遺跡	散布地	木津町	
39	赤ヶ平遺跡	散布地	木津町	
40	燈籠寺遺跡	集落跡	木津町	河川改修
41	法華寺野遺跡	寺院跡	加茂町	道路建設
42	恭仁京跡	都城跡	加茂町	河川改修
43	長岡京跡（ＰＡ工区）	都城跡	京都市	道路建設
44	長岡京跡（下植野工区）	都城跡	大山崎町	
45	長岡京跡ほか	都城跡	長岡京市他	道路建設
整	平安京跡　西別館	都城跡	京都市	

上野古墳群は、10数基から成る古墳群で、平成５年度丹後広域農道建設に伴い２基の石室墳の調査を実施している。その１基は全国的にも類例の少ない方形の石垣状列石を有する古墳であることが明らかとなり、古墳時代後期の墓制を考えるうえで貴重な資料となった。今年度は、丘陵腹部の古墳状隆起５基について調査を行う。

定山遺跡は、過去４次にわたり調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての集落跡であることが判明している。特に古墳時代後期には、墓域及び集落域が明確に分かれることが判明している。今年度は、集落域東南隅の調査を行い、その範囲を明確にする。

大俣城跡は、京都縦貫自動車道(綾部・宮津道路)建設に伴う調査である。小規模な円郭式山城で城主等は明らかでない。今回の調査は山城のほぼ７割近くを調査するもので、中丹地域の山城解明に期待される。

内里八町遺跡・上津屋遺跡は、第二京阪道路(国道１号バイパス京都南道路)建設に伴う調査で、弥生時代の稲株痕の残る水田面を検出し注目された内里八丁遺跡の広がりを解明するほか、隣接する上津屋遺跡の広がりや性格を明らかにするため試掘調査を実施する。

椋ノ木遺跡は、土師器等が出土する遺物散布地である。下水道施設建設に先立ち95,000㎡を対象として試掘調査を実施し、遺跡の広がりや性格等を明らかにする。

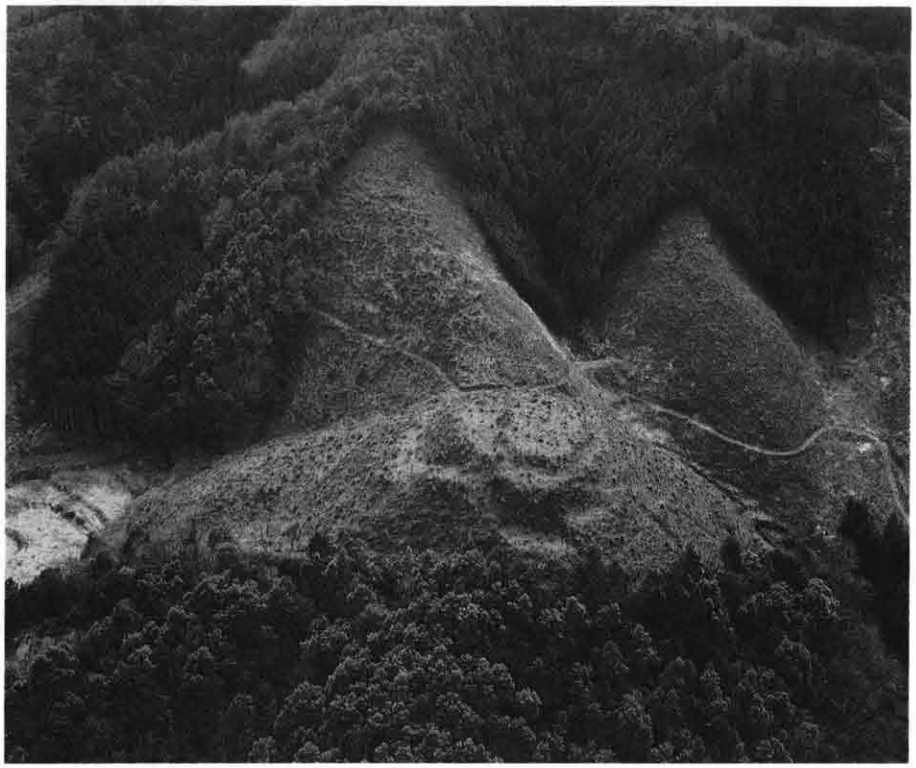
梅谷瓦窯跡・市坂瓦窯跡ほかは、関西文化学術研究都市建設に伴う継続調査である。昨年度、興福寺創建時の瓦が出土し話題を呼んだ梅谷瓦窯跡では、試掘調査により平窯２基・登り窯６基の窯跡を確認した。今年度は調査継続中の平窯・登り窯各１基及びどうしても避けられない登り窯１基について詳細に調査を実施する。市坂瓦窯跡は、表採資料より平城宮大膳職に瓦を供給した瓦窯跡として周知の遺跡であり、隣接する上人ヶ平遺跡(工房跡)と関連し官営生産遺跡として重要な遺跡である。昨年度、試掘調査により平窯８基の窯跡を確認したところであるが、今年度は２基の調査を実施し、窯体構造の解明等その成果が期待される。他に、釜ヶ谷遺跡・赤ヶ平遺跡等の試掘調査を実施する予定である。

弓田遺跡は、市坂瓦窯跡・上人ヶ平遺跡(工房跡)等の遺跡が位置する丘陵裾部の台地上にあり、奈良時代の遺物が採集される散布地である。今年度は、約30,000㎡を対象として試掘調査を実施し、遺跡の範囲・性格等について明らかにする。

長岡京跡関係では、４件の調査を予定している。名神高速道路拡幅事業に伴う調査では、桂川パーキングエリア建設に伴い、長岡京南一条大路と東三坊大路の交差点付近を中心として、長岡京左京の六坊域(約55,000㎡)を対象として調査を実施する。条坊・宅地割り等広範囲における調査成果が期待される。また府道拡幅工事に伴い昨年度に継続して長岡京右京六条三坊の調査を行う予定である。

普及啓発事業では、昨年度からより親しみやすく解りやすい研修会にと名称変更した「埋蔵文化財セミナー」を、平成６年６月下旬と平成７年２月下旬の２回開催する予定であり、「文化財講座」として、教育局と共催で文化財遺跡巡り等も予定している。また、平成５年度に京都府管内において実施された発掘調査の成果を一同に展示する「第12回小さな展覧会」を、平成６年８月13日(土)から８月28日(日)まで向日市文化資料館で開催する予定である。今年度は、平安建都1200年記念に鑑み、昨年度邪馬台国・卑弥呼問題に一石を投じた大田南５号墳出土の「青龍三年銘鏡」を題材に、「卑弥呼の時代と鏡」(仮称)のコーナー展示を併設する予定である。

(みずたに・としかつ＝当センター調査第１課企画係長)



大俣城跡調査前の全景

平成５年度京都府内埋蔵文化財の調査

平　良　泰　久

平成５年度に京都府内で行われた発掘調査は228件、ここ数年と同じく、いわゆる大発見のない静かな年であったが、年度も終わりの３月になって「青龍三年銘鏡発見」のニュースが全国をかけめぐり、最後を締めくくった。

旧石器・縄文時代　この時期の発掘は、相変わらず低調だが、縄文時代については二、三の成果がある。網野町十王堂遺跡では晩期の土器が、京都市東土川遺跡・木津町燈籠寺遺跡では後期の精製土器と粗製土器の良好な資料がみつかった。加悦町嗎岡遺跡の早期の落とし穴は、近年府内各地でみつかりはじめたものの中で最古の例である。

弥生時代　加悦町白米山北古墳は、台状墓の裾に特殊な礫敷があった。中に破砕した庄内期の土器片が散らばっており、墓に伴う祭壇とみられる。

綾部市新庄遺跡では竪穴住居と円形周溝墓がみつかり、円形住居→円形周溝墓→方形住居の変遷が確かめられた。円形周溝墓群は京都府初見である。

八木町沢の谷遺跡では中期の円形住居が一棟だけみつかった。京都市東土川遺跡では最古型式の磨製石剣の断片が、向日市森本遺跡では竪穴住居が、長岡京市雲宮遺跡では前期の壺棺や土器・石剣がみつかった。

田辺町興戸１号墳では、墳丘の下層から後期の竪穴住居がみつかった。同古墳群で、かつて後期の台状墓（５号墳）が発掘されており、同丘陵上に弥生後期の村と墓がセットで存在することが判明した。

古墳時代　網野町大将軍遺跡では土坑の中から礫とともに蓋を主体とする多数の埴輪がみつかった。祭りの跡かとみられているが、近くにある丹後最大の網野銚子山古墳の埴輪と同タイプである。この古墳の墳形が奈良県佐紀陵山（日葉酢媛陵）古墳と同タイプであることはすでに指摘されていたが、今回の蓋形埴輪も陵山古墳例とよく似ており、網野銚子山古墳の被葬者と大和北部との結び付きの深さのほどを示している。

丹後町上野古墳群は後期の横穴式石室墳２基である。２号墳の墳丘をめぐる方形の石垣状列石は京都府では初めての例であり、大阪府墓尾３号墳など全国的にも希少なものである。

平成５年度センター関係発掘調査一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	黒部製鉄遺跡	製鉄炉	弥栄町	増田孝彦 河野一隆	11/24～2/9	炭窯２基、製鉄炉
2	溝谷城跡・溝谷古墳群	城跡他	弥栄町	田代　弘	4/16～7/23	円墳、木棺直葬
3	遠所古墳群	古墳	網野町	田代　弘	8/20～12/10	円墳２基、木棺直葬、壺棺１基
4	左坂横穴Ｂ支群	横穴	大宮町	石崎善久 筒井崇史	5/11～9/14	横穴７基、小横穴２基
5	左坂古墳群Ｂ支群 左坂横穴群Ｇ支群	古墳	大宮町	石崎善久	5/27～2/15	古墳12基、経塚、小石室
6	薬師古墳	古墳	久美浜町	岡崎研一	5/11～6/4	円墳、木棺直葬
7	女布北遺跡	集落跡	久美浜町	筒井崇史	8/19～12/22	鶏塚古墳、竪穴住居
8	ニゴレ遺跡他	製鉄炉 窯跡	弥栄町	岡崎研一 黒坪一樹	4/20～2/10	製鉄炉２基、竪穴住居
9	堀坂神社古墳	古墳	久美浜町	岡崎研一	7/13～9/8	円墳、横穴式石室
10	上野古墳群	古墳	丹後町	増田孝彦	7/20～2/10	円墳２基、横穴式石室
11	奈具岡遺跡	集落跡	弥栄町	田代　弘	12/1～2/9	弥生土器、木器
12	嗎岡遺跡	集落跡	加悦町	河野一隆	5/18～7/29	落とし穴、円墳
13	白米山遺跡	古墳	加悦町	河野一隆	7/20～9/10	墳丘墓、木棺直葬、円礫帯
14	神宮谷４号墳	古墳	綾部市	尾崎昌之 野島　永	4/19～5/21	横穴式石室
15	七百石遺跡	集落跡	綾部市	引原茂治 尾崎昌之	8/2～2/25	竪穴住居、流路
16	木坂古墓	古墓	綾部市	尾崎昌之	1/17～1/21	近世～近代の祠
17	池ノ谷遺跡	集落跡	綾部市	尾崎昌之	12/21～1/21	顕著な遺構・遺物なし
18	ジンド古墳	古墓	綾部市	野島　永	5/12～10/14	円墳、横穴式石室
19	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市	三好博喜	6/16～6/28	顕著な遺構・遺物なし
20	山根古墳	古墓	舞鶴市	三好博喜	7/9～10/22	円墳、横穴式石室
21	大島東遺跡	集落跡	綾部市	三好博喜 八木政明	10/18～2/25	竪穴住居、溝
22	八木城跡(堂山窯跡)	城跡	八木町	引原茂治 八木政明	4/7～9/24	曲輪、石垣、下層から須恵器窯
23	沢ノ谷古墳	古墳	八木町	柴　暁彦	7/19～9/10	竪穴住居、木炭墓
24	今林古墳	古墳	園部町	柴　暁彦	4/26～7/15	方墳、木棺直葬
25	池尻遺跡	集落跡	亀岡市	柴　暁彦	10/7～1/28	溝、掘立柱建物、瓦溜まり
26	穴川遺跡	集落跡	亀岡市	柴　暁彦	12/9～1/28	顕著な遺構・遺物なし
27	桜遺跡	集落跡	綾部市	野島　永	6/7～7/15	掘立柱建物
28	平安京跡(西別館)	都城跡	京都市	小池　寛	4/19～12/22	平安時代井戸、中世～近世遺構
29	伏見城跡	城跡	京都市	岩松　保	10/4～2/3	礎石建物、瓦溜まり
30	燈籠寺遺跡	集落跡	木津町	伊賀高弘 森正哲次	4/9～6/25	方形周溝墓、方墳２基、埴輪棺 掘立柱建物
31	平安京跡(府警察本部)	都城跡	京都市	森島康雄	4/7～6/25	土坑、井戸、南北堀
32	植物園北遺跡	集落跡	京都市	岸岡貴英	7/6～10/8	竪穴住居、溝、古式土師器
33	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	竹原一彦	5/20～2/10	掘立柱建物、弥生時代水田
34	荒坂横穴(南)	横穴	田辺町	竹原一彦	7/19～11/2	横穴５基
35	松井古墳状隆起	古墳	田辺町	森島康雄	8/9～9/14	顕著な遺構・遺物なし
36	若林遺跡	集落跡	宇治市	岸岡貴英	5/6～6/25	竪穴住居、掘立柱建物
37	北尻遺跡	集落跡	精華町	伊賀高弘	7/7～11/10	流路、祭祀遺構、布留式土器

38	梅谷瓦窯跡	窯跡	木津町	石井清司 有井広幸	4/12～12/3	瓦窯８基、興福寺創建瓦
39	中ノ島遺跡	集落跡	木津町	石井清司 森正哲次	4/12～7/7	梅谷瓦窯の灰原
40	瓦谷遺跡	集落跡	木津町	森正哲次	8/5～3/4	埴輪窯３基、埴輪棺１基
41	市坂瓦窯跡	窯跡	木津町	森島康雄	11/10～3/4	瓦窯８基
42	上人ヶ平埴輪窯跡	窯跡	木津町	石井清司	9/2～3/4	埴輪窯２基、形象埴輪等
43	燈籠寺遺跡(河川)	集落跡	木津町	伊賀高弘	12/2～3/4	南北溝、縄文土器、瓦、土器、銭貨
44	長岡京跡(名神・京都)	都城跡	京都市	戸原和人 竹井治雄 石尾政信 鍋田　勇 岸岡貴英	4/7～2/17	縄文時代～中世
45	長岡京跡(名神・ＰＡ)	都城跡	京都市	戸原和人 竹井治雄 中川和哉	5/6～3/4	縄文時代～中世
46	長岡京跡(名神・下植野)	都城跡	大山崎町	戸原和人 岩松　保	4/7～3/4	古墳時代～中世
47	長岡京跡	都城跡	長岡京市	戸原和人 石尾政信	7/26～2/1	溝、土坑、墓
48	山城国府跡	官衙跡	大山崎町	石尾政信	10/20～12/3	土坑

弥栄町溝谷古墳群、弥栄・峰山町境の大田南５号墳、大宮町左坂古墳群は、丘陵を削って形造っただけの台状墓系の前・中期古墳である。溝谷古墳群では底に礫を敷いた長大な箱形木棺に小形の鏡・管玉・刀子を副葬していた。

大田南５号墳からは「青龍三年」銘の方格規矩四神鏡が出土し、マスメディアを通して一躍全国の話題をさらった。「卑弥呼の鏡」をめぐって論争が再燃したが、古墳自体は丹後にごく普通にある台状墓系の方墳であり、埋葬施設もまた在地の箱形石棺であることなど、青龍三年銘鏡を保有する古墳が、三角縁神獣鏡をはじめ多数の副葬品をもつ畿内の前期古墳とはかなり疎遠な位置にあることは、この問題を解く一つの鍵ではないか。

左坂古墳群・左坂横穴群は数年来行われている群集墳の継続調査であり、丘陵上の前・中期古墳から丘腹を穿った終末期の横穴までの変遷の様子が具体的に明らかにされつつある。古墳の埋葬施設には、底に礫を敷く箱形木棺やその他の木棺・石棺などバラエティに富み、捩文鏡や銅鏃・鉄器・土器などを伴う。横穴では、遺体を伸展葬できないほど小さなものから火葬骨がみつかり、前庭部に火葬骨を納めた蔵骨器を伴う横穴もあった。遺体を伸展葬できない小横穴は、これまでに幾例か知られていたが、これの利用法の実態の一つが判明したことになる。

大宮町砥石場西古墳・舞鶴市山根古墳・綾部市ジンド古墳は、いずれも単独で存在する後期の横穴式石室墳である。ジンド古墳はどこにも抜けられない袋谷の奥にあり、古墳後

期の開拓の進行をうかがうことができる。

綾部市七百石遺跡は弥生後期から続く集落であるが、古墳後期の竪穴住居が多数みつかった。住居を半円形に囲む排水溝を住居ごとに伴うのが特徴的であり、青野型のカマドをもつものもある。

亀岡市南条古墳群では、中期の小方墳の存在が判明した。木棺直葬で葺石を伴う。方墳は亀岡の中期古墳を特徴づける墳形であり、後期の南条古墳群のさきがけとみられる。

京都市植物園北遺跡の前期を中心とする竪穴住居群には、ベッド状遺構をもつものがある。ベッド状遺構は類例の少ないものであり、特殊な用途に供されたものとみられる。

京都市水垂遺跡はここ数年継続している大規模発掘であり、これまでの広大な水田域に加え、本年度は多数の竪穴住居や墓がみつかり、住居地区と生産地区とがセットで把握できることとなった。

向日市山畑古墳群では中期後半の小方墳２基が、向日市鴨田遺跡では古墳初頭の溝から籾米１万粒が、長岡京市開田城ノ内遺跡では竪穴住居５棟と水鳥形土製品がみつかった。

宇治市平等院旧境内では、下層に弥生中期～奈良時代の集落が存在することが判明、古墳前期を主体とする竪穴住居が数棟みつかった(塔の川遺跡)。名だたる急流宇治川沿いとはいえ、古来住環境のすぐれたところであることが確かめられた。

城陽市室木遺跡では、中・後期の竪穴住居とともに多数の臼玉やその未完成品・剝片・原石がみつかり、滑石の玉作りを行っていることが判明した。南山城最大の久津川古墳群のまっただ中であり、久津川古墳群の王の支配に属した技能集団の村とみられる。

精華町北尻遺跡では、自然の小河川の中から前期の布留式土器が多数みつかった。水辺の祭りのあととみられる。

木津町上人ヶ平埴輪窯では、先年発掘された１号窯に隣接して２基の窯が並んでいた。２号窯には床面の外周をめぐる埴輪をふせた排水溝がある。全国的にも例の少ない整った施設である。瓦谷埴輪窯３基は、上人ヶ平埴輪窯と小さな谷を挟んだ丘陵斜面にあり、短甲その他の多彩な形象埴輪が出土した。両者の埴輪はいずれも隣接する上人ヶ平古墳群に供給されたものとみられる。

飛鳥・奈良・平安時代　弥栄町ニゴレ遺跡では、古墳後期～奈良時代の竪穴住居10棟以上と奈良～平安時代の製鉄炉(竪形炉１・箱形炉１)とがみつかった。製鉄遺跡として有名になった遠所遺跡の続きであり、製鉄遺跡の範囲がさらに広がることが判明した。

大宮町左坂古墳群の発掘で、２号墳の墳頂部を再利用していた平安後期の経塚は、鉄製の経筒に和鏡を伴う。

舞鶴市蒲入遺跡は、京都府で本格的な発掘調査がはじめて行われた製塩遺跡である。奈

良～平安時代の石で囲った製塩炉がみつかった。

園部町上木崎遺跡では、奈良時代の大規模な掘立柱建物がみつかり、整然とした配置から船井郡衙の可能性も考えられている。

亀岡市池尻廃寺は、発掘で新たにみつかった飛鳥～奈良時代の寺院である。寺域の東限・西限の溝と中央部で礎石建物の一部が確認された。礎石建物は、規模・構造が今一つはっきりしないが、付近の水田畦畔や道路の状況から、講堂にあたる可能性が考えられる。

京都市平安京跡では、例年どおり多数の発掘が行われた。朱雀院の隣接地で「朱雀院」と記した木簡が出土した。巻物につけた題籤で、朱雀院の実態を知る上で貴重な資料である。西市の近くでは、西靱負小路沿いで平安京の町割りの最小単位である一戸主(南北15m・東西30m)の宅地がはじめてみつかった。家は小さな掘立柱建物１棟、庶民の生活の実態を知る興味深い資料である。左京八条三坊九町では、平安後期の鋳造工房がみつかった。和鏡・仏具等の鋳型や炭・るつぼ等が出土、中でも方形和鏡の鋳型は、和鏡研究の基準となる一級資料だという。

京都市右京区化野念仏寺の近くで出土した平安時代末期の蔵骨器には、梵字を描いた金銅製の蓋を伴う。この種の蓋の出土は全国ではじめてであり、当時の信仰や金工技術の変遷を知る上で貴重な資料という。

京都市・向日市・長岡京市・大山崎町にまたがる長岡京跡については、本誌連載の「長岡京跡調査だより」に譲るが、『長岡京木簡二』が出版されたことは特筆される。1984年の『長岡京木簡一』以後に出土した木簡1082点が収録されており、日々発掘に携わりながらまとめられた関係者の努力に敬意を表したい。

宇治市平等院旧境内では、多宝塔に至る白砂敷の道、南泉坊庭園の遣り水、小御所の造成など、境内の実態が次々明らかにされている。宇治市白川金色院では平等院と同笵の瓦がみつかり、藤原頼通の娘であり後冷泉天皇の皇后となった四条宮寛子創建とする伝承を実証した。

八幡市上奈良遺跡では、奈良～平安時代の掘立柱建物や墨書土器・緑釉陶器・瓦などがみつかった。『延喜式』に「久世郡奈良園」とあることから、皇室に果菜類を供給した御園の可能性が指摘された。

山城町蟹満寺では、金堂の北約250mのところで柱穴や溝がみつかり、これを寺域の北限とみれば、南北３町に及ぶ大規模なものと推定された。これは平城京の官立の大寺院に匹敵する大きさであり、今回みつかった遺構が蟹満寺のものかどうか、今後の発掘で検証する必要があろう。

木津町燈籠寺廃寺では恭仁宮同笵瓦がみつかり、山背国分尼寺説が再浮上しそうである。

木津町梅谷瓦窯では興福寺創建時の瓦窯７基を確認、登り窯５基・平窯２基いずれも構造に違いがある。試行錯誤の様子がうかがえて興味深い。木津町市坂瓦窯は平窯８基がみつかり、これで上人ヶ平遺跡の工房とセットになる瓦工場の大要が判明した。

加茂町恭仁宮跡では、宮の東面大垣がみつかり、宮の規模が平城宮の約1/2と判明した。恭仁宮の造営は、はたして首都の移転だったのかどうか、謎はますます深くなる。

中・近世　京都市中京区烏丸通錦小路上ルで、鎌倉時代後期の水だめ施設からタイの骨・植物種子などとともに、漆器や折敷・箸などの食膳具が一括してみつかった。漆器は黒漆地に朱漆でツルや草花を描いた華麗なもので、京都でこれほど状態のよいものがまとまって出土したのは初めてであり、当時の食生活を知る上で貴重な資料である。

京都市東山区銀閣寺では、花崗岩切石を使った上水道施設がみつかった。石の継目の目地を漆で接合した精巧なものである。茶の湯用の導水管とみられ、東山文化の粋の一端をよく示すものといえる。

京都市上京区の府警本部では、安土桃山時代の堀や多数の金箔瓦がみつかった。金箔瓦には浅野氏の家紋である「違い鷹羽」があり、豊臣秀吉の京都の居城である聚楽第に伴う大名屋敷とみられる。また、織田信長の旧二条城の石垣に使ったとみられる石仏も多数出土した。

京都市伏見区の伏見城跡(府立桃山高校)でみつかった建物は、柱掘形の底に大きな礎石を置いた、掘立柱と礎石立柱の折衷式であり、慶長大地震のあとの耐震構造の建物として興味深い。

京都市中京区の市立高倉小学校では、大量の陶磁器が出土、中に江戸中期を代表する陶工、尾形乾山作とみられる角皿が含まれていた。場所は松山藩松平家の屋敷であり、当時の武家の生活をうかがえる好資料といえる。

京都市中京区の市立御所南小学校では、江戸時代中期の鏡の鋳型やるつぼ・ふいごの羽口などがみつかった。同時代の鏡の鋳型は、京都では２例目であり、鏡生産の実態を知る貴重な資料となる。

大山崎町離宮八幡宮では、築地塀や門・鐘楼などの基壇がみつかった。花崗岩切石などを使った基壇や階段・敷石は見事なほどによく残っており、江戸時代の指図との比較検討が期待される。

宇治市旦椋遺跡では、鎌倉時代末期～室町時代初頭の鍋・釜・磬などの鋳型やるつぼ・ふいごの羽口・鉄滓・炉の破片などが出土した。大久保環濠集落に付属する鋳物工房とみられ、中世村落の手工業の実態を理解する貴重な成果である。

（たいら・やすひさ＝当センター調査第２課課長補佐兼調査第４係長）

長岡京跡東京極大路の発掘調査

—長岡京跡左京第286・313・317次調査—

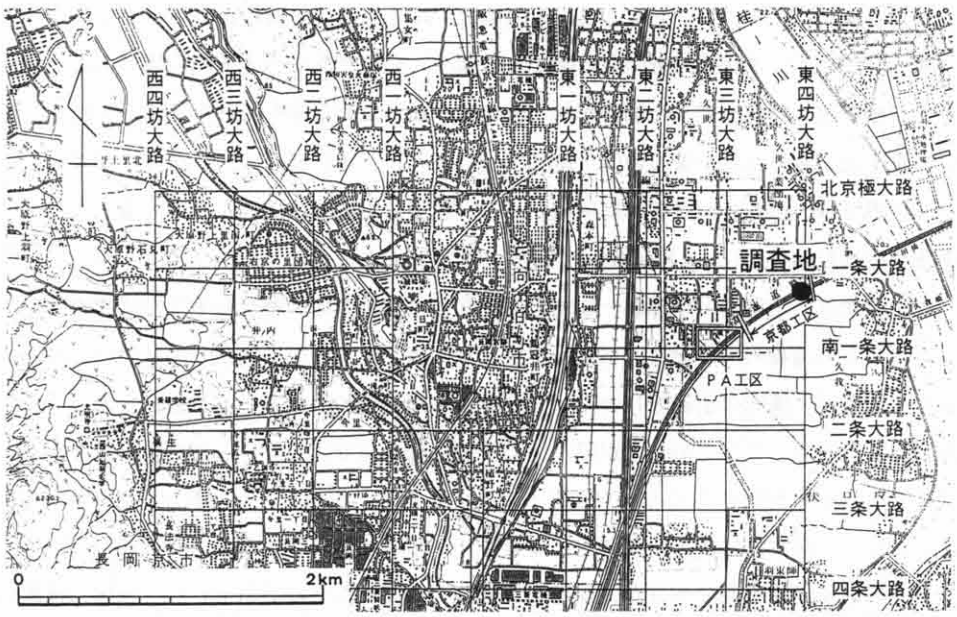
鍋田　勇

1．はじめに

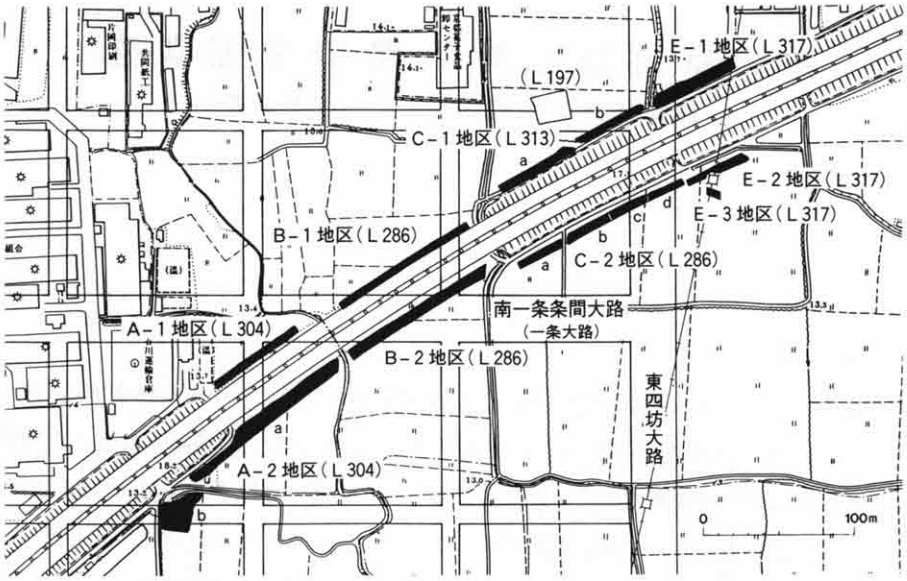
当センターでは、日本道路公団の依頼を受け、平成元年度より中央自動車道西宮線(通称＝名神高速道路)の拡幅工事に伴う発掘調査を実施している。名神高速道路は、長岡京跡内をおおむね北東⇔南西方向に斜めに通過しており、京の縁辺では京都市伏見区で東京極大路と、乙訓郡大山崎町で九条大路と斜行する。平成５年度の調査では、東京極大路の施工推定地に調査区を設定し、東京極大路側溝の可能性をもつ溝を検出した。ここでは、この溝を中心に調査結果の一部を速報する。

2．調査の概要

(1)調査地区の設定(第１・２図参照)　パーキングエリア予定地から東側の車線拡幅部分を京都工区と呼称し、名神高速道路に沿った調査地区を設定した。東京極大路は、道路



第１図　調査地位置図



第２図　名神京都工区トレンチ配置図

を挟んだ北と南のそれぞれの調査地区（C-1・E-1地区及びC-2地区）で検出が予想された。以下では、これらの地区で検出した長岡京期の遺構について記す。

(2)検出遺構（第３図参照）　C-2地区ｃトレンチで南北溝（ＳＤ286311）を、ｂトレンチで掘立柱建物と「┐」状に屈曲する溝を検出した。C-1地区ではｂトレンチで掘立柱建物と柵列を検出したが、ａトレンチ及びE-1地区では当該期の遺構は検出できなかった。

溝ＳＤ286311　幅約3.5m、検出面からの深さ0.35mを測る南北方向の溝である。トレンチの幅が狭く、検出できた部分が約５ｍにすぎないため正確な振れ角は算定しにくいが、ほぼ正南北とみられる。溝心の国土座標値は、x=-117,194.0の所でy=-24,721.5である。

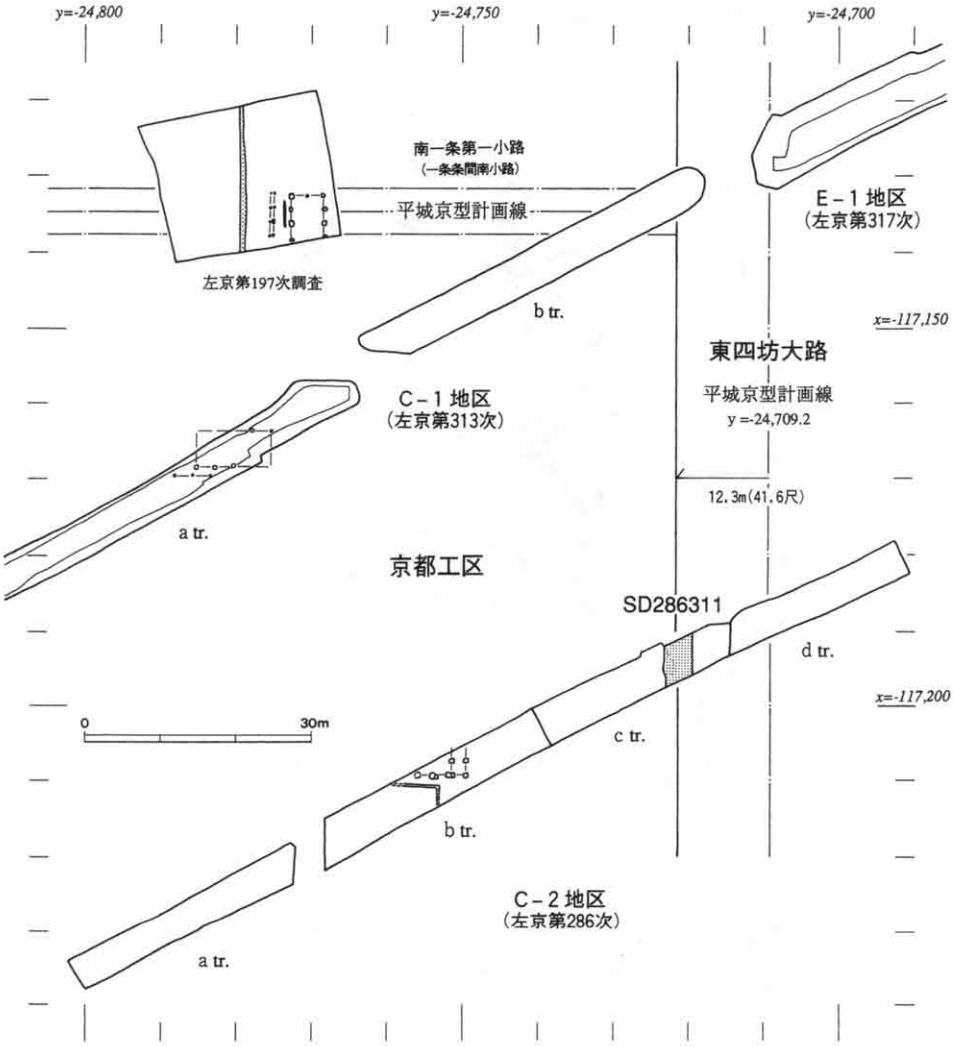
溝の埋土は、おおむね下層では灰色シルト～粘土、上層では灰色シルトと溝のベースである明橙褐色粘質土（シルト～細砂）が混在した状況であった。

出土遺物は、土師器・須恵器・製塩土器・瓦・木製品の他、多数の木片や植物遺体がある。これらの遺物の大部分は、下層に堆積した灰色シルト内から混在した状況で出土している。遺物は、溝内の広範囲にわたって分布するが、特に溝の中心部に沿って集中する傾向にある。なお、すべての遺物が同一面で検出されたのではなく、一部にはシルトをはさんで上下の位置関係にあるものも認められた。ただし、全域で上･下層の区別が明瞭な状況にはなく、時間的には短期間の内に廃棄されたものと判断される。

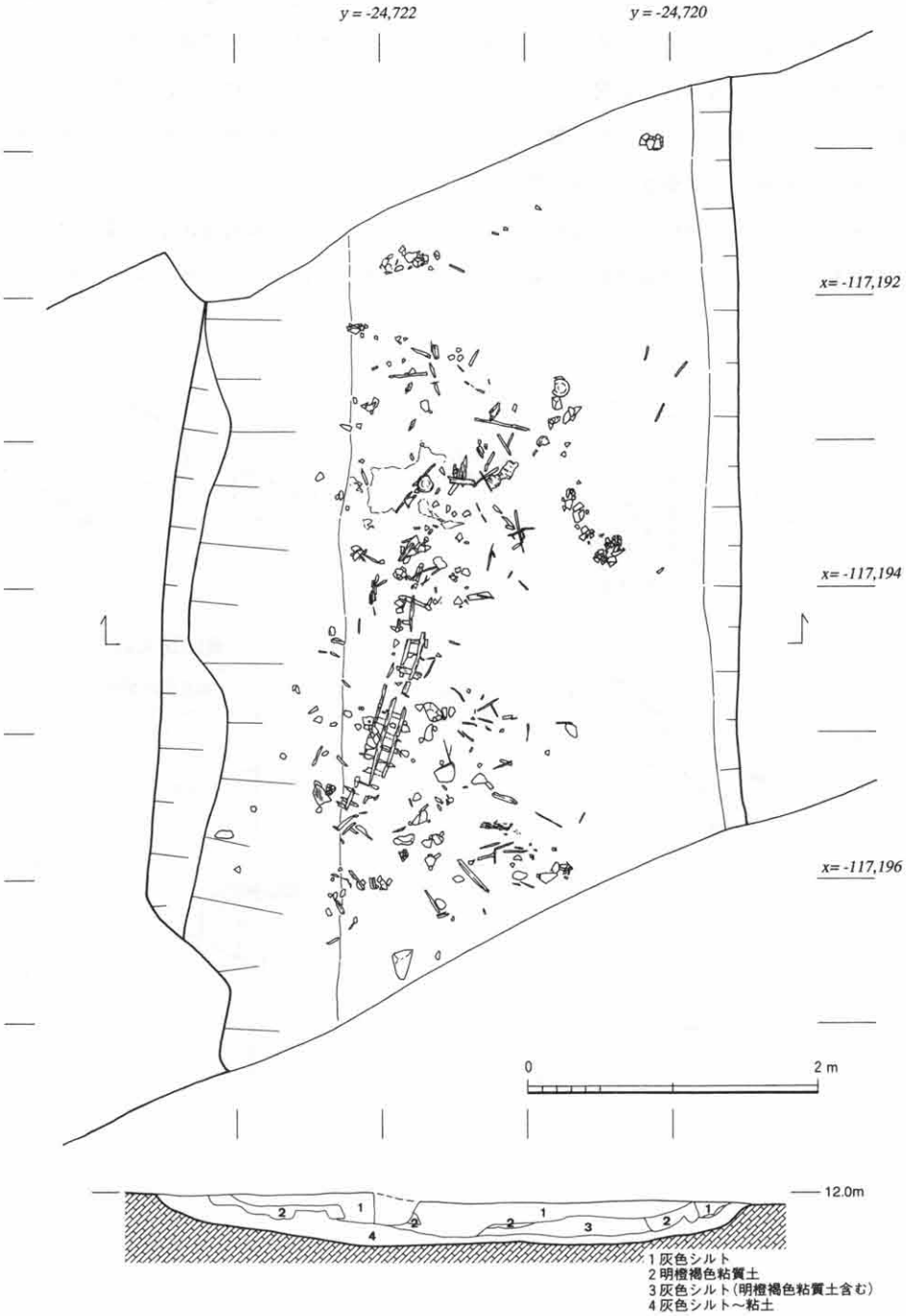
［木製品］用途不明であるが、使用時の構造をとどめたものが出土した。長短二種類の板状の木材から構成され、格子状に組み合わせた構造をもつ。完存していないため、全体

の構造は不明である。ここでは、長い方を横木、短い方を縦木と呼称しておく。横木は、長さ126cm以上・幅３～４cm・厚さ約５mmを測り、５～７cmの間隔をあけて三本が平行に並んでいる。縦木は、長さ25cm以上で、幅・厚さは横木と同じである。６cm前後の間隔をあけて並んでおり、痕跡を含めて15本が確認できた。縦木は、すべて横木の下に位置するため、木材のみで組み合う状況にはなく、何らかの方法で固定されていたと考えられるが、接続の方法は不明である。この木製品には、後述する木片と異なり、炭化した部分が認められず、やや遅れて廃棄された可能性がある。

［木片］ほとんどが棒もしくは幅の狭い板状を呈する。いずれも加工痕を残す木片であるが、製品ではなく、建築部材等の加工時に伴う廃材、いわゆる木っ端と考えられる。こ



第３図　京都工区Ｃ－１・Ｃ－２・Ｅ－１地区長岡京期遺構配置図



第４図　ＳＤ286311実測図

の木片は部分的に炭化したものが多く、一部にはすべて炭化したものもみられる。溝の中心付近から出土した木片には特にこの傾向が強い。これらの木片は、他の場所で焼却された後に廃棄されたのではないかと考えられる。

［植物遺体］最下層のシルト～粘土に密封された状態で、広葉樹の葉が数枚確認できた。近辺の樹木から自然に入り込んだものと考えられる。

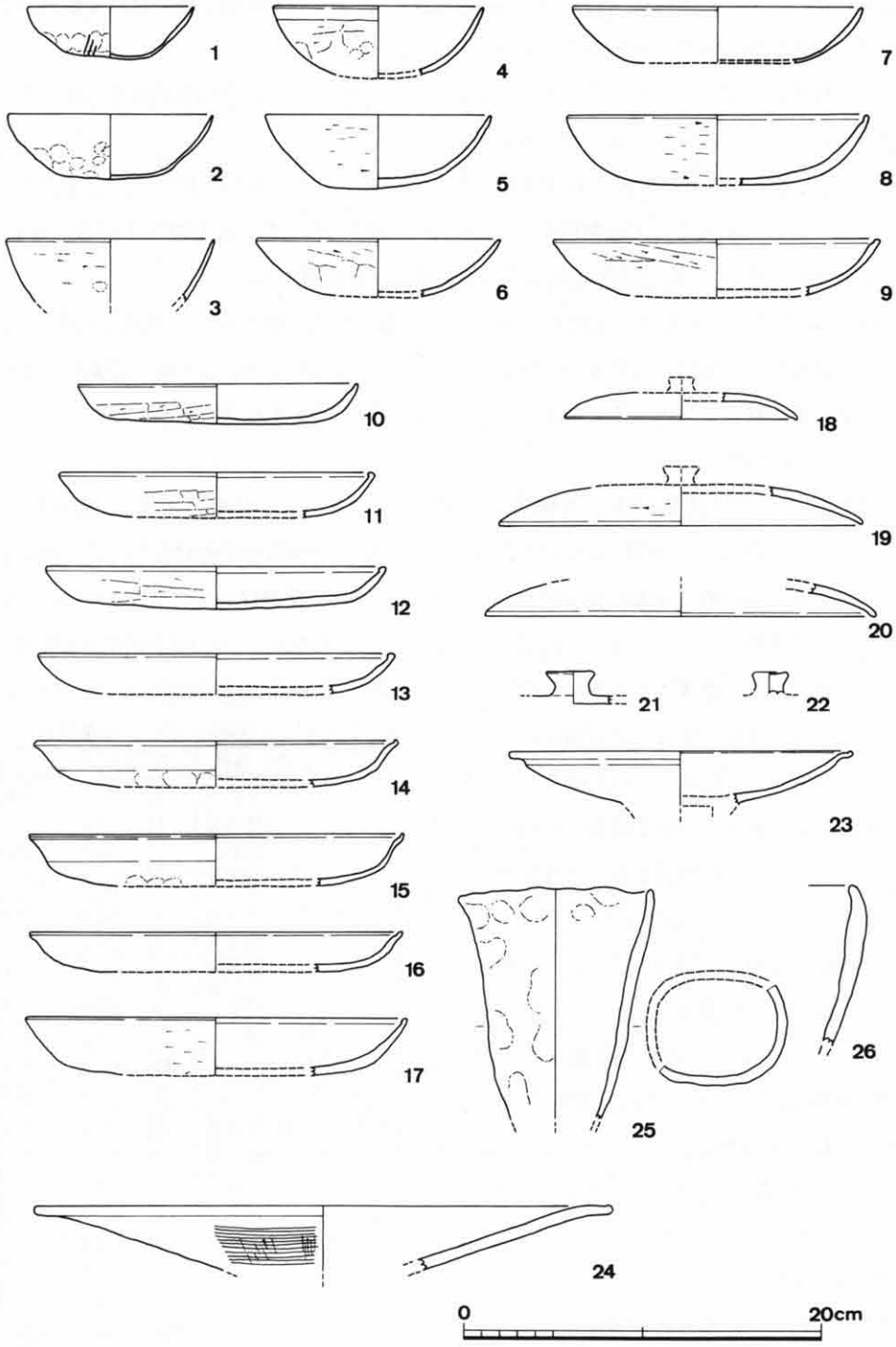
(3)出土遺物　各調査地区とも長岡京期の遺物が出土しているが、総じて出土量は少ない。以下では、まとまって遺物の出土した溝ＳＤ286311の土器・瓦を取り上げる。なお、土器の記載に際しては、長岡京跡左京第196次の基準を援用する(注1)。

溝ＳＤ286311　土器は、土師器・須恵器・製塩土器に分類される。実測可能なもの、及び一個体として識別可能なものは55個体であり、その内訳は表に示す通りである。土師器と須恵器の割合は、約６：４であるが、破片の総量を勘案すれば土師器の割合がさらに多くなると思われる。

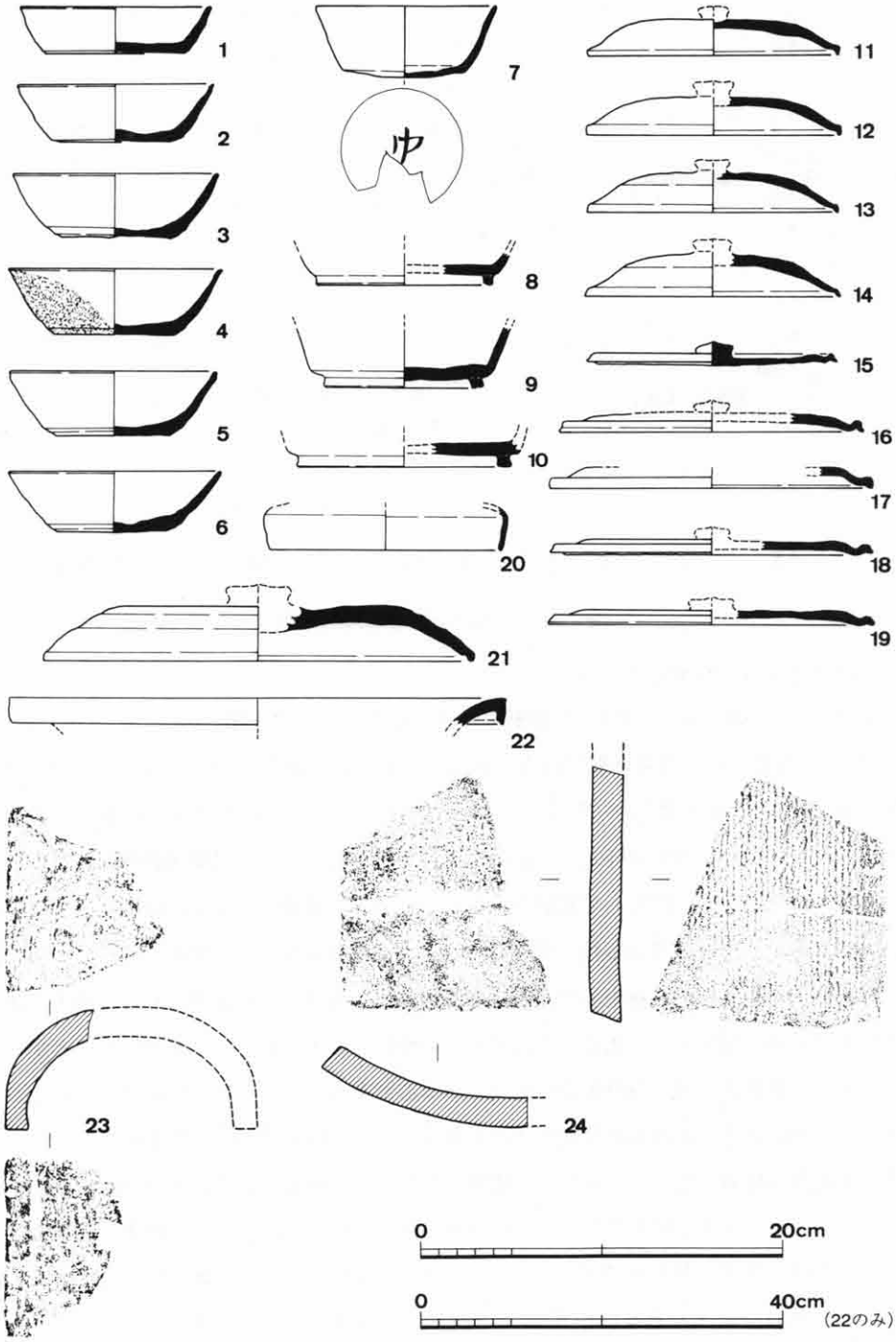
〔土師器〕(第５図１～24)　供膳形態では、杯Ａ(７～９)・椀Ａ(１～６)・杯Ｂ蓋(18～22)・皿Ａ(10～17)・高杯(23･24)がある。土師器は、供膳形態が約97％を占め、煮沸形態の出土量がきわめて少ない点が特徴的である。杯Ａは、法量区分で杯ＡⅠ(８・９)、杯ＡⅡ(７)に区分される。９は、口縁部の立ち上がりがゆるやかで、復原口径18.5cmを測る。外面調整は、７は磨滅により不明だが、８・９はｃ手法(口縁部･底部全面ヘラケズリ)である。椀Ａはいずれも椀ＡⅠに分類されるが、１の口径は9.3cmでⅡ類に近い法量である。外面調整は、１がｅ3手法(ｅ手法後、外面ヘラケズリ)、２がｅ手法(口縁部上端だけヨコナデ、以下は不調整)、３・５・６がｃ手法、４がｃ′手法(口縁端部付近を一定幅ケズリ残す)である。皿Ａは、法量区分で皿ＡⅠ(13～17)、皿ＡⅡ(10～12)に区分される。前者の外面調整には、ａ手法(口縁部ヨコナデ、底部不調整)及びｃ手法がみられる。後者は、ｃもしくはｃ′手法である。高杯は、杯部のみ出土している。24を含めた３点は通有にみられる形態を有する。23は外面の中心付近にわずかに脚部と思われる突出部が認められるため高杯と判断したものである。端部付近の外面を強くナデてほぼ水平な面を作

付表１　ＳＤ286311出土土器集計表

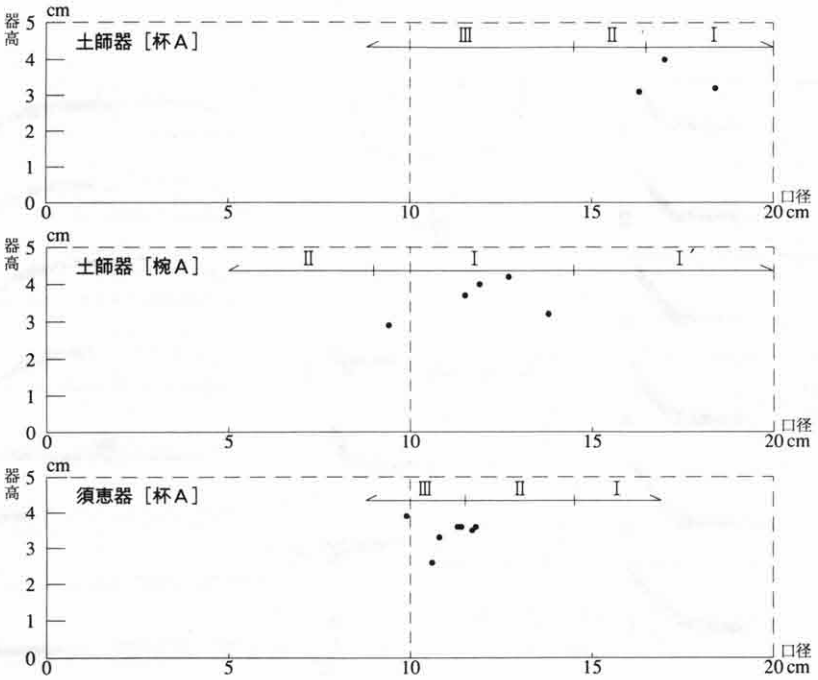
種類	機能	器種	個数	割合(%)	割合(%)
土師器	供膳	杯ＡⅠ	2	6.5	3.6
		杯ＡⅡ	1	3.2	1.8
		杯Ｂ	2	6.5	3.6
		皿ＡⅠ	7	22.6	12.7
		皿ＡⅡ	4	12.9	7.3
		椀ＡⅠ	6	19.4	10.9
		杯Ｂ蓋	4	12.9	7.3
		高杯	4	12.9	7.3
	煮沸	甕	1	3.2	1.8
	小計		31	100.0	56.4
製塩土器			2		3.6
須恵器	供膳	杯ＡⅡ	2	9.1	3.6
		杯ＡⅢ	5	22.7	9.1
		杯Ｂ	3	13.6	5.5
		杯Ｂ蓋	9	40.9	16.4
		皿Ｂ蓋	1	4.5	1.8
	貯蔵	壺Ａ蓋	1	4.5	1.8
		甕	1	4.5	1.8
	小計		22	100.0	40.0
集計個体数			55		100.0



第５図　ＳＤ286311出土遺物実測図(1)



第6図　ＳＤ286311出土遺物実測図(2)



第７図　ＳＤ286311土器法量分布図

り、端部を上方へ巻き上げている。

〔須恵器〕（第６図１～22）　供膳形態では、杯Ａ（１～７）・杯Ｂ（８～10）・杯Ｂ蓋(11～19)・皿Ｂ蓋(21)、貯蔵形態では壺Ａ蓋(20)・甕(22)が出土した。杯Ａは、法量区分で杯ＡⅡ（４・６）、杯ＡⅢ（１～３・５・７）に区分される。３～６は形態的には椀とするべきかもしれないが、ここでは杯として記載する。杯Ａの内、１～６は従来長岡京跡ではほとんど出土例をみない一群として認識されるものである。特徴としては、底部から一部体部にかけて回転ヘラケズリする技法がみられる点、体部の立ち上がりが緩やかで、口径に比して底径が小さい形態を有する点、口縁外面端部に重ね焼きの痕跡が残り、全体的に淡い灰色系の色調を呈する点、比較的砂粒の少ない精良な胎土を有する点をあげることができる。また、杯Ｂ蓋の内、器高が高く深みのある器形をもつ一群(11～14)及び皿Ｂ蓋(21)には胎土･焼成･色調に共通した特徴が認められる。４は、漆と思われる黒色膜が内外面の対応する位置に付着しており、勺として使用されたと思われる。７は、底部外面のほぼ中央部に「巾」と一文字が墨書されている。器壁は薄いが硬質焼成で、暗青灰色の色調を呈する。杯Ｂは、９が底部のみほぼ完存するが、８･10は細片である。９は灰白色の色調を呈し、やや軟質の焼成である。杯Ｂ蓋は形態から前述の11～14と、器高が低く扁平なもの(15～19)に分類される。14･15を除いていずれも内面に墨痕が残り、硯に転用されている。

皿B蓋(21)は、口径24cmを測る大型の蓋である。壺A蓋(20)は口縁部から肩部にかけての細片である。肩部の屈曲はゆるやかである。灰色系の色調で、肩部には自然釉がかかっている。甕(22)は、口径55cmを測る大型品である。

〔製塩土器〕(第5図25・26)　ともに砲弾形の器形を呈する。25は、全体に器形がいびつであり、口縁端部の形状も外反ぎみに立ち上がる部分と内湾ぎみに立ち上がる部分とがある。外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。胎土は粗く、5mm前後の混和材の砂粒が多く含まれる。26は厚手の器壁をもち、端部は内湾ぎみに立ち上がる。胎土は25と同様である。色調はともに明橙褐色を呈する。

〔瓦〕(第6図23・24)　平・丸瓦を合わせて13点が出土しているが、大部分が細片であり、器壁の磨滅しているものが多い。軒瓦は出土していない。23は、凹面にわずかに布目の痕跡が残る。凸面は縄目タタキで、灰色系の硬質焼成である。24は、凸面縄目タタキ、凹面不調整(布目痕)で、淡黄褐色系の軟質焼成である。

3．まとめ

今回の調査は、これまでに検出例のない東京極大路の施工推定地を対象としたものであった。その結果、C-2地区で検出した溝SD286311について、その位置や出土遺物から大路の西側溝の可能性が高いと判断するに至った。しかし、いくつかの点で不確定な要素があったり、新たな問題が派生するなど、なお今後に検討が必要である。最後にこうした問題点を整理し、まとめとしたい。

東京極大路の西側溝と判断するのに肯定的な点をあげると、①溝がほぼ正南北であること、②溝心の位置が、従来の平城京型復原案による東京極大路計画線(道路心)から西へ12.3m(約41.6尺)の距離にあり、ほぼ通常の大路幅の1/2となること、③出土した遺物がほぼ長岡京期と考えられること、の3点となる。①については、今回の調査では、C-2地区の北側に設定したC-1地区において、SD286311の延長部分が中世まで流路となっていたために、検出できなかった(第3図参照)。したがって、トレンチ内の狭い範囲内でしか溝の方向を判断できないことにやや問題が残る。②については、条坊制の復原に関わる問題であり、特に慎重な検討が必要であるが、筆者は長岡京の南北の大路については平城京型の計画線を使用したとの立場をとるので[注2]、肯定的な点として扱う。山中説[注3]では、東京極大路西側溝心は、朱雀大路心から東へ7170尺に位置する。SD286311は同様に東へ7158.4尺(2118.9m)の位置にあり、山中氏の推定位置より西へ11.6尺(3.4m)ずれている。

なお、仮にSD286311を西側溝とした場合、今回の調査では対となる東側溝が検出されなかったことが新たな問題点となる。調査時の段階では、E-1地区で検出した南北溝に東

側溝の可能性を考えていたが、その後の検討によりこの溝については時期が異なると判断したため、C-2地区dトレンチと合わせ、2カ所ともいずれの推定位置からも検出されないという結果になった。すなわち、東京極大路では東側溝が設置されていない可能性があり、京の外周がどのように整備されていたかは今後の課題といえよう。いずれにせよ、これらの点は今後の調査例の増加によってしか解決できない問題であり、現状では問題提起にとどめる。

③については、上記2点とはやや論点を異にするが、出土した遺物の年代及びこれまで長岡京でほとんど出土していない須恵器の一群の産地の問題がある。今回出土した遺物は、従来の土器の年代観では、長岡京期のものを含むものの、土師器杯Aや須恵器壺A蓋などに後出する要素がみられることから、全体として平安京Ⅰ期中段階[注4]に相当する時間幅を考えておきたい。したがって溝の埋没時期は、平安京への遷都後やや時間を経てからと考えられる。また、特徴的な形態を有する須恵器杯Aは少なくとも上記の年代幅の中で時期を押さえることができる。今後、産地を確定できれば消費地との対応が可能となるが、この点についてはさらに検討を続けたい。

出土遺物については、山中　章・國下多美樹・木村泰彦・小森俊寛・平尾政幸・中川和哉各氏からご教示を受けた。特に國下・木村両氏からは多岐にわたりご指導を受けた。記して厚く感謝したい。

（なべた・いさむ＝当センター調査第2課調査第4係調査員）

注1　「長岡京跡左京第196・214次(7ANEGZ-1・2地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第34集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会)　1992

注2　鍋田　勇「長岡京条坊制地割計画の再検討(上・下)」(『京都府埋蔵文化財情報』第48・49号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

注3　山中　章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号)　1992

注4　『古代の土器2　都城の土器集成Ⅱ』　古代の土器研究会編　1993

竹製経筒の復元について

－漆を塗布した竹製経筒の新例－

小池　寛

1．はじめに

経塚の主体をなす経巻は、時代や地域によってさまざまな経筒に納められ、地中に埋納された。一般的に知られている経筒は、銅製・土製であるが、『如法経現修作法』[注1]などの文献では知られてはいたものの、ほとんど出土例がなかった竹製の経筒が、京都府福知山市に所在する大道寺経塚で1981年に確認された[注2]。この発掘調査は、竹製の経筒が実在したことを確認した例として、広く知られるところとなったばかりでなく、中世須恵器・甕の中の溜水によって、経筒内に納められた「妙法蓮華経」八巻と「阿弥陀経」一巻の残存が確認されたことでも注目された[注3]。

それ以後、経塚の発掘調査において、中世須恵器・甕の内部が空洞の状態で検出されるたびに、すでに腐食した経巻や竹製経筒の存在を想定させる有力な根拠として、引用されるに至っている。

しかし、大道寺経塚で竹製経筒が出土して以後、類似する資料の出土例はなかったが、1991年、京都府福知山市庵我字中に所在する高田山中世墓・経塚群[注4]において、竹製経筒の外面に塗布された漆の被膜が、経筒外容器の中に折れ重なるような状態で出土し、大道寺経塚例とは趣の異なった竹製経筒の存在が確認された。

本文では、高田山中世墓・経塚群を概観し、経筒の出土状況について記述するとともに、残存する経筒の蓋と漆の被膜の形状から、竹製経筒の復元を行なうものである。なお、中世墓と経塚の関連については、別の機会に論述することとし

第１図　高田山古墳群位置図

47. 西谷古墳群　48. 泉谷古墳群
56. 池の奥古墳群　59. 稲葉山古墳群
112.高田山古墳群　111. 庵我遺跡

本稿では、事実関係を中心に記述する。

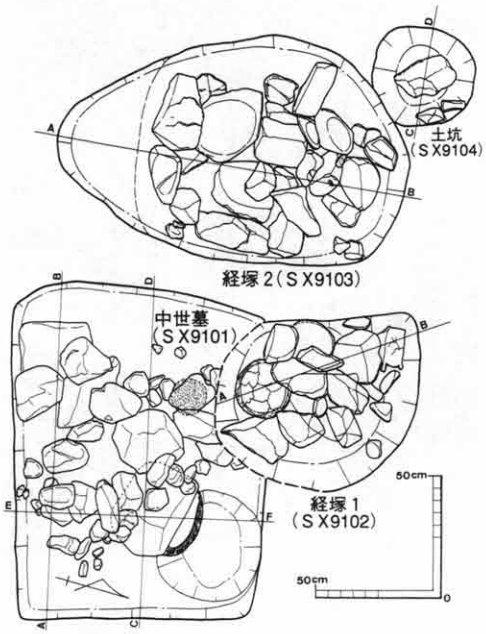
2．福知山市高田山中世墓・経塚群の歴史的環境(第１図)

高田山中世墓・経塚群は、５世紀前半(ＴＫ216前後)に築造された「高田山２号墳」の墳頂部中央で、古墳の埋葬主体部を調査中に偶然検出した遺構群である。

当該遺跡は、由良川によって形成された平野部に突出する丘陵上に位置する。周辺には、西谷古墳群・泉谷古墳群・池の奥古墳群・稲葉山古墳群が所在しており、古墳時代中期から後期に至る墳墓が集中する地域でもある。一方、経塚が成立した同時代の遺跡としては、当該遺跡が所在する丘陵の南東方に庵我遺跡が確認されている。ここでは、掘立柱建物跡などが検出されており、中世墓・経塚群と何らかの関連が想定される遺跡でもある。また、当該遺跡から東へ3.5kmの丘陵上には、鎌倉時代の居館が確認された上ヶ市遺跡がある。直接的な関連については不明であるが、成立した歴史的環境を考える上で重要である。今後、周辺地域における集落などの動態が明らかになれば、中世墓などが成立した状況を正確に把握することができよう。

3．高田山中世墓・経塚群の概要

検出した遺構群は、中世墓１基、経塚２基、土坑１基である。以下、各遺構について、遺物の出土状況を中心に概観しておきたい(第２図)。



第２図　中世墓・経塚群平面実測図(1/30)

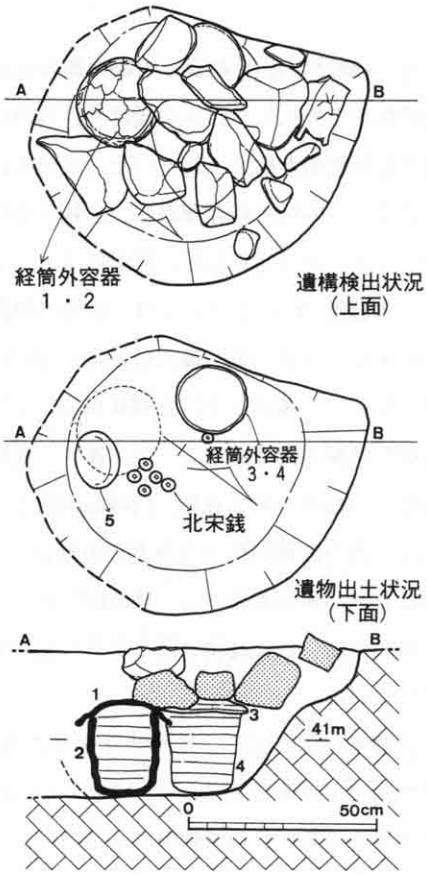
中世墓(ＳＸ9101)　南北1m×東西1.37mの方形プランを有し、遺構検出面から墓壙底面まで0.3mを測る。また、墓壙内に充填された礫群の最上位から土壙底部までは0.54mを測る。充填された礫群は、土壙中央に高く集積されていたことが土層断面から確認できた。墓壙内は、人頭大から拳大の礫で充填されており、墓壙中央に納骨用の中世須恵器・甕を据え、その傍らに瓦器・椀を埋置している。納骨用の甕には、複数回の納骨が可能なように、人頭大の比較的偏平な礫で蓋をしてい

る。甕内の人骨遺存状況から少なくとも二人以上の火葬人骨が納骨されていたと考えられる。一方、それらの西側には、口縁部を板石で覆い、内部が空洞の中世須恵器・甕と底部に北宋銭を納入した蔵骨器2個体を検出した。空洞の中世須恵器・甕は、甕内底部に1cm程度の暗茶褐色土が堆積しているのみであり、木製か竹製の経筒が、大道寺経塚例のように納入されていた可能性が指摘できる。なお、出土した2点の蔵骨器内の火葬人骨は、いずれも微細片であり、中央の納骨用甕内の火葬人骨とは、遺存状況が異なっている。

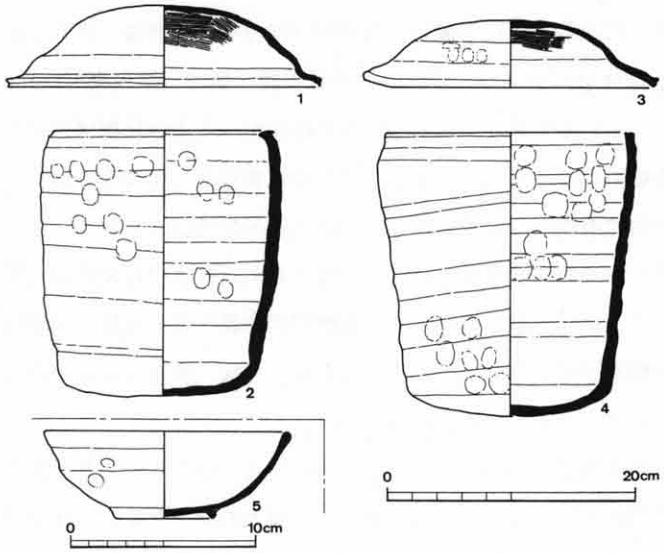
この中世墓は、同一墓壙内で納骨器・蔵骨器と経筒外容器と考えられる中世須恵器・甕が共伴した遺構として重要である。経塚が本来有している歴史的意義を考えれば、墓壙内に埋経する行為は、基本的な概念が異なり、矛盾する点もある。今後、多方面から十分な検討を行なうべき課題を有していることを指摘しておきたい。

経塚1（SX9102）　先述した中世墓（SX9101）の一部を切り込んで穿たれており、南北0.9m×東西0.7mの不整形な円形を呈している。土坑中央は人頭大の礫で充填し、経筒外容器周辺は拳大の礫を配している。2点の経筒外容器の蓋は、充填された礫の重量によって一部破砕しているが、その多くは、原位置を保っており、各々の経筒外容器内から本文の主題である漆被膜が出土した。なお、外容器2を取り上げた段階で、瓦器・椀5を検出し土坑底部では、景祐元宝・政和通宝・祥符元宝・皇宋通宝・淳化元宝・至和通宝・聖宋元宝などの北宋銭が9枚出土した（第3・4図）。

経塚2（SX9103）　中世墓（SX9101）・経塚1（SX9102）の西方で検出した長軸1.4m×短軸0.92mの不整形な楕円形を呈している。土坑南半は、経筒外容器を埋納するためにオーバーハングするように掘り込まれており、0.45mの深さを測る。一方、土坑の北半部は、0.25mの深さまで平坦に掘り込まれている。中世墓と同じように、土坑内は、拳大から人頭大の礫で充填されており、中央部にやや高く集積されていた可能性が土層断面から想定される。土坑内からは、横転した状態で中国製青白磁・小壺と小皿[注5]が出土してお



第3図　経塚（SX9102）実測図（1/20）



第４図　経塚（ＳＸ9102）出土遺物実測図

り、南方から、瓦質の経筒外容器が出土している。経筒外容器は、偏平な礫で取り囲まれており、外容器内部は空洞であった。なお、充填された礫の最上位で銭貨を１枚検出しており、埋納行為が終了した後、混入したか投げ込まれた可能性がある。

４．漆被膜の出土状況と竹製経筒の復元について

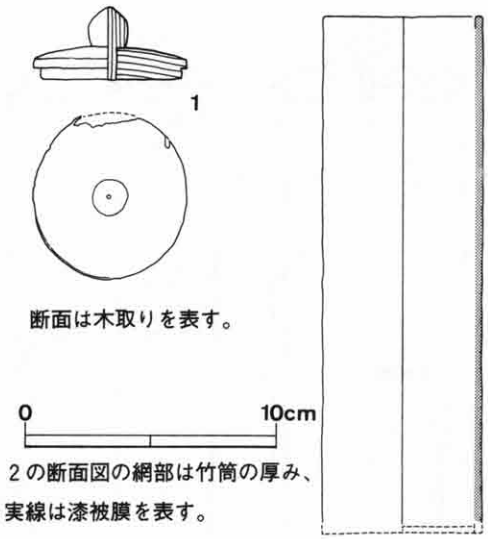
経塚１で検出した２点の経筒外容器内には、経筒に伴う木製の蓋の個体数などから３個体の竹製経筒が納められていたことが確認できた。

以下、各個体の残存部から、法量・形態について復元を行ないたい。なお、木製の蓋については、ほぼ完存に近い状況で出土している個体もあり、法量は実測値である。

1)木製蓋（第５図１）　１は、経筒外容器４から出土したものを中心に実測を行なった資料である。つまみは、最大径1.6cm、蓋の天井部からのつまみ高は1.6cmを測り、宝珠形を呈している。蓋の中央に直径0.6cmの穴を穿ち、つまみを丁寧に装着している。つまみの木取りは縦方向である。一方、蓋は、長径6.6cm・短径6.1cmを測り、楕円形を呈している。なだらかな天井部を有し、口縁部内面は、経筒の口縁部に合うように２段に削り込まれている。蓋の内側の削り込み部の直径は5.6cmを測るが、この数値は、経筒の直径復元の根拠とした。蓋の木取りは、横方向であり、つまみの木目とは直交している。なお、つまみと蓋の外面には、経筒と同じように黒漆が塗布されており、部分的ではあるが、銀箔が残存している。

2)経筒（第５図２）　経筒外容器内に残存する漆被膜の内、外容器２で検出したものは、その大半が短冊状を呈している。そのため、法量・形状を復元できる状況ではなかったが、外容器４の最上位の漆被膜は、経筒の竹が腐食した段階で、ほぼ中央部分で折れ重なったため、全体の残存状況は良好であった。

まず、筒の材質は、漆被膜の内面に残る植物繊維質の痕跡から竹であることが確認できた。また、漆被膜が底部にまで塗布されていたかについては、底板が残存しないため判然としないが、筒部の全面に塗布されていたと考えられる。一方、漆被膜が僅かではあるが口縁部の内側にまで漆が塗布されていることから、口縁部周囲での経筒の厚みは0.3cmと復元できた。なお、外面には、蓋と同じく金・銀箔が部分的に観察できるが、文様構成については、残存状態が不良であるため十分、復元できなかった。



第5図　経筒蓋・経筒復元図(1/3)
1.実測図　　2.漆皮膜からの復元図

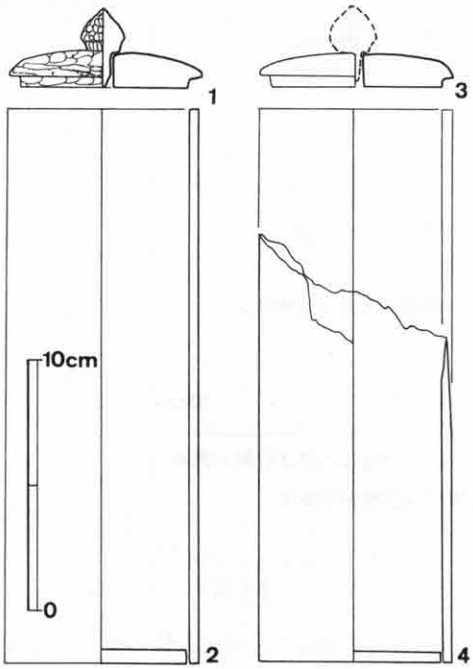
口径は先述した蓋と経筒自体の漆被膜から5.6cmと復元でき、高さは、底部を欠くものの、20.4cmに近似する値に復元し得る。なお、底板については、竹の節をそのまま底として使用したか、あるいは、蓋と同じく木製の円盤を充填したかについては不明である。大道寺経塚の経筒は、竹の表面には漆を塗布していないが、底部には丁寧に木製の円盤を充填している(第6図)。仮に、漆を塗布し、その上に金・銀箔で加飾している本例が、経筒として丁寧に作られていると仮定すれば、底面に木製の円盤を充填していたと考えることも可能である。

5．小結

先述したように、京都府北部において竹製経筒が確認された遺跡は、福知山市に所在する大道寺経塚と高田山経塚1(SX9102)の2例を数えるに過ぎない。出土した土器から、前者が13世紀後半、後者が12世紀後半から13世紀初頭に比定できる。

両資料の出土状況を比較した場合、大道寺経塚例が、円形の土坑内に経筒外容器である中世須恵器・甕を置き、その中に竹製経筒を2個体納入しているのに対して、高田山経塚1は、楕円形の土坑に2個体の筒形容器を埋置し、土坑底部に瓦器・椀と銭貨を納入している。いずれも、埋葬を示唆するような特徴はないが、土坑内に納入された副納品の構成が異なっており、それぞれの遺構群の中での経塚がもつ意義に何らかの相違点が存在する可能性がある。

経筒で最も一般的に知られているのは、銅製であるが、竹製経筒自体が腐食し易いこと



第６図　京都府福知山市大道寺経塚(1/3)
1・3.経筒蓋　　2・4.竹製経筒
(注２文献・図版第57の再トレース)

もあり、あまり類例が知られていないのが現状である。おそらく、竹筒の使用は、竹自体の確保や加工･加飾を行う際に作業を容易に進められる利点があり、一般的に使用されたと考えられる。また、大道寺経塚例のように、外表面に漆を塗布しない竹筒が一般的であったと考えられ、高田山経塚例のように黒漆を塗布する例は、正確な例の把握を行っていないが、限られた結縁の下で営まれた経塚にのみ見られると考えても良い。今後、類例が増加すれば、何らかの指標を設定できるものと考えられる。

最後に、当該遺跡では、墓と経塚が、ほぼ同時期に営まれたことが判明し、追善供養の目的で埋経が行われたことを考古学的に証明できた意義は決して少なくない。そのことと漆を丁寧に塗布した経筒が出土したことがどのような関係があるのか、更に、検討を加える必要がある。

(こいけ・ひろし＝当センター調査第２課調査第２係調査員)

注１　三宅敏之「経塚研究の現状と課題」(『日本歴史』第209号)　1972

注２　松井忠春・竹原一彦・増田孝彦「豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第１冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注３　難波田徹「福知山市大道寺経塚出土紙本経の保存修理とその問題点」(『京都府埋蔵文化財情報』第８号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

注４　小池　寛「高田山古墳群(付　高田山中世墓・経塚群)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1992

注５　小池　寛「高田山経塚出土の中国製青白磁について」(『京都府埋蔵文化財情報』第43号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1992

平成５年度発掘調査略報

19. 黒部製鉄遺跡

所在地　竹野郡弥栄町字黒部小字石熊

調査期間　平成５年11月24日～平成６年２月９日

調査面積　約2,000m²

はじめに　黒部製鉄遺跡は、古墳～奈良時代の製鉄遺跡として著名な遠所遺跡群と竹野川を挟んで対岸に所在する。ここは、従来、鉄滓の散布や地名などから、製鉄遺跡の存在が予測されていたが、平成５年度の京都府教育委員会の試掘によって製鉄炉が確認され、当センターが面的な発掘調査を行った。なお、今回の調査は、丹後国営農地開発事業の黒部団地造成工事に先立って、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。

調査概要　検出した遺構は、製鉄炉２基、炭窯３基である。製鉄炉は、いずれも長方形箱形炉で、良好なものが長さ3.5m・幅0.8mを測る。後世の削平によって下部構造のみが遺存する。これは、丘陵端部を「L」字形にカットして作業面を作り出し、斜面下方側は盛り土で構築している。この盛り土中には炭や鉄滓が含まれており、２基の製鉄炉が継続的に操業されたことがうかがえる。廃滓場からは、流出滓や炉内滓ならびに炉壁を、コンテナ数にして約200箱採取した。また、この最下層から９世紀前半の須恵器(杯)１点が出土し、これらの製鉄炉の時期の１点を押さえることができた。

炭窯は、すべて登り窯状炭窯であり、円あるいは方形の炭窯は検出されなかった。この内、１基は灰原のみの調査である。遺存の良好な１基は、長さ4.2m・幅1.5mを測る小型の登り窯状炭窯で、焚口ならびに煙道部を石で構築する。この炭窯は、改修の痕跡が認められた。他の１基は、焚口部を欠失しているが、長さ4.0m・幅1.4mを測る。

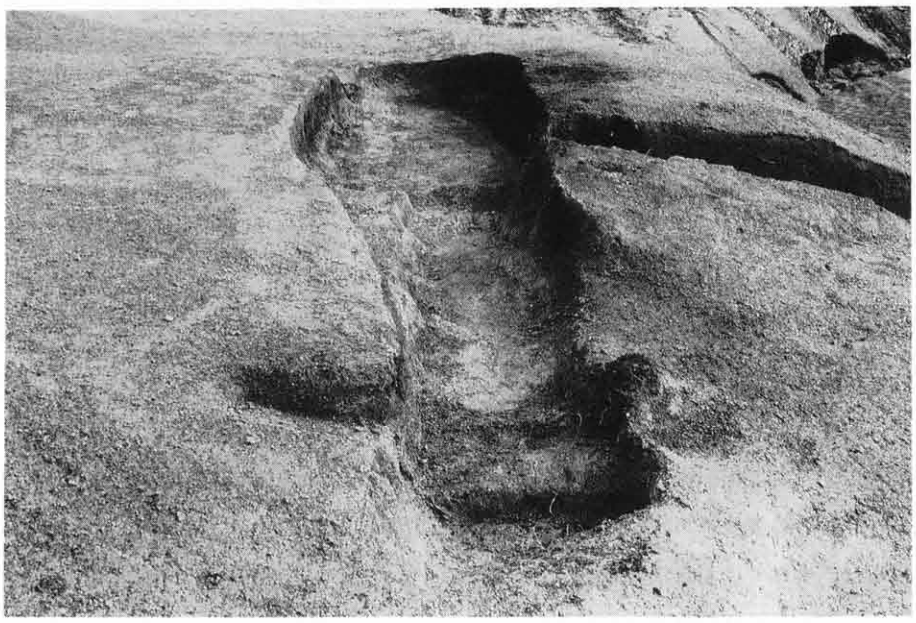
今回の調査成果を既調査の弥栄町内の製鉄遺跡と対比すると以下の特徴が列挙される。

調査地位置図(1/50,000)

(1)平安時代の製鉄遺跡が竹野川右岸で初めて検出され、遠所遺跡群(S・A地区)以後の展開が明らかになった。

(2)黒部製鉄遺跡では円・方形の炭窯が少なく、登り窯状炭窯の比重が高い。これは、竹野川左岸とは異なる特徴で、製鉄の技術系譜が両岸で相違した可能性がある。ただし、黒部製鉄遺跡の発掘調査は緒に着いたばかりで、全容の判明は今年度以降の調査に委ねることにしたい。

(河野一隆)



製鉄炉完掘状況

20. ニ ゴ レ 遺 跡

所 在 地　竹野郡弥栄町鳥取・木橋

調査期間　平成５年４月20日～平成６年２月25日

調査面積　約10,000㎡(一部平成４年度調査地分も含む)

はじめに　この調査は、京都府農林水産部が計画・推進している「丹後あじわいの郷」の造成工事に先立ち、社団法人京都府農業開発公社の依頼を受けて実施した。

「丹後あじわいの郷」造成地内には、製鉄遺跡並びに土器散布地であるニゴレ遺跡をはじめ、鳥取古墳群・入道奥古墳群・桐谷古墳群・鳥取峠古墳群・行者山古墳群・奥ノ院古墳群など、数多くの遺跡が存在する。今年度は、主にニゴレ遺跡の内、造成にかかる範囲の発掘調査と試掘調査を実施した。発掘調査及び試掘調査を行ったところは、京都府竹野郡弥栄町字鳥取・木橋の丘陵・水田部で、製鉄遺跡である遠所遺跡群の東隣りに位置する。

調査概要　昨年度の試掘調査成果をもとに、１・２号製鉄炉とＡ拡張区の発掘調査を行う一方、Ｂ拡張区の発掘調査と、木橋側の丘陵部並びに田畑部の試掘調査を実施した。

Ａ・Ｂ拡張区　Ａ拡張区は、桐谷古墳群北側の丘陵南側斜面で、炭窯17基・住居跡10基・柱穴群などを確認した。Ｂ拡張区は、府道網野岩滝線沿いの丘陵裾部で、住居跡21基を確認した。

炭窯　一辺ないし径が１ｍ前後の小型の炭窯と、1.5ｍ×４ｍ程度(中型の炭窯)の規模の炭窯に分かれる。小型の炭窯については、地面を50cmほど掘り下げ中に薪を入れた後、粘土で覆って操業していたと思われる。中型の炭窯は、等高線に並行して築かれていた。丘陵斜面の比較的ゆるやかな地形のところを「Ｌ」字状に掘削し、６㎡前後の平坦面を造った後、炭窯を築いている。上部構造については不明であるが、西隣りの遠所遺跡群からも同じような遺構が検出されており、おそらくは、床面に数本の丸木を間隔をあけて寝かせ、その上に薪を積み上げ、粘土で覆って操業していたものと思われる。平坦面すべてが

調査地位置図(1/50,000)

窯であったのか、あるいは一部は作業場としていたかについては不明である。

住居跡　その大半は、丘陵斜面の比較的ゆるやかな地形並びに丘陵裾部の平坦面を利用して構築していた。丘陵山側を「L」字状に掘削して平坦部を造り、平坦面の山手に幅約20cmの排水溝をめぐらし、その内側に柱穴を設けている。丘陵斜面の住居跡については、平坦面(生活空間)確保のため、「L」字状に掘削した土をその前面に押し出して盛り土していたようで、調査時には地山を掘削した部分の検出となった。このため、住居跡の規模については、山手側の一辺を確認したにすぎない。住居跡は、A・B拡張区から検出しているが、その数はB拡張区が圧倒的に多く、主に現在の府道網野岩滝線沿いの緩地形を利用して居住していたようである。また、B拡張区のいくつかの住居跡内から鍛冶炉も見つかっている。

1号製鉄炉　舌状に張り出した平坦部に製鉄炉は存在し、谷部に鉄滓を掻きだした状態で確認した。製鉄炉の規模は、全長約2.5m・幅約1m・深さ約50cmを測る箱型炉で、炉跡の両側から谷部にかけて鉄滓や炉壁が多量に捨てられていた。これら鉄滓を掘り下げたところ、炉西側には、5m×3mの長楕円の土坑(排滓坑)を掘っており、そこには掻きだされた鉄滓が溜まった状態で検出できた。さらに、下層からも同じ排滓坑を確認することができ、数回の操業が考えられた。炉東側は、谷側へ大きく「U」字状に掘り込み(排滓溝)、多量の鉄滓が掻きだされた状態で堆積していた。また、製鉄炉付近からは、炭窯も見つかった。堆積状況から製鉄炉操業後に炭窯が築かれたようで、炭窯付近から10世紀前半の土器が出土している。このことから、この製鉄炉は、10世紀前半よりも古い時期に操業していたことが確認できた。

2号製鉄炉　狭小な谷の丘陵斜面を利用して構築されていた。平面形態は1号製鉄炉と異なり、傾斜地をゆるやかにして小型の炉を築き、鉄滓は谷側の一方向に掻きだしていた。小型の炉は、一辺ないし径が70cm程度のもので、炉床から5回の操業が確認できた。1回目の炉操業後これを炉の基底部として再利用し、わずかに山手にずらして2回目の炉が構築されていた。同じ工程で5基の炉が操業していたようで、検出状況は、等高線に直交した形で炉床が階段状になっていた。このような形態の炉は、他に類例が少なく、隣接する遠所遺跡群には見られないことから、今後検討を要するところである。

試掘調査　鳥取の丘陵部並びに木橋の丘陵・水田部の試掘調査を行った。その結果、木橋側の2か所で鉄滓の出土が見られたことから、この付近にも製鉄炉があるものと思われる。その他の遺構としては、古墳2基、炭窯、住居跡などの遺構が、丘陵尾根筋並びに斜面から新たに見つかっているが、これらについては来年度に調査する予定である。

まとめ　今回の調査の結果、遠所遺跡群と同じ製鉄遺跡であったことが判明した。6世

紀後半と８世紀後半に操業していた遠所遺跡群の製鉄炉とほぼ同じ形態を示す１号製鉄炉と、小型の２号製鉄炉の発見は、ある時期に何らかの原因で１号製鉄炉→２号製鉄炉と小型化した可能性が高いことを示す。１号製鉄炉とそれに続くと考えられる２号製鉄炉は、遠所遺跡群の衰退期及びそれ以降に操業していたと考えられる。Ａ・Ｂ拡張区の住居跡内からの鍛冶炉の発見は、遠所遺跡群と同様に、ニゴレ遺跡においても製鉄段階から鍛冶段階までの製鉄が行われていた可能性を示す。このようなことから、奈良時代には遠所遺跡群で製鉄が行われていたが、平安時代になるとニゴレ遺跡で行われていた、と大きく捉えることができるのではなかろうか。また、遠所遺跡群に見られた登り窯形態の炭窯や補助燃焼口(横口)付きの炭窯がニゴレ遺跡には存在せず、中型ないし小型の炭窯に限られていたことは、上記のことを物語っているのではなかろうかと考える。

(岡崎研一)

21. 上野古墳群

所在地　竹野郡丹後町三宅小字上野

調査期間　平成５年７月19日～平成６年２月10日

調査面積　約1,200m²

はじめに　この調査は、京都府丹後土地改良事務所が計画している「府営広域営農団地農道整備事業」に先だち、同事務所の依頼を受け実施したものである。上野古墳群は、竹野川左岸の台地に立地し、弥生時代中期～後期の墳墓として著名な大山墳墓群の立地する丘陵の南側でもある。台地上には、約８基の古墳が点在し、弥生時代～中世にかけての遺物が散布する滝谷遺跡にも該当している。調査対象となったのは、台地の西端に位置する１・２号墳、古墳周辺の平坦地(滝谷遺跡)の試掘調査、中世墓と考えられていた集石遺構である。集石遺構は、調査の結果、中世墓とは認められなかった。

調査概要

１号墳　直径13m、南側に溝を持つ片袖式横穴式石室を内部主体とする古墳で、石室全長7.9m・玄室長4.6m・同幅2.1m・同高2.2m、羨道長3.3m・同幅1.6mを測る。羨道部には、長さ3.8m・幅0.5mの排水溝を設けている。出土遺物は、玄室内を中心に武器類・馬具類・装身具・須恵器・土師器など、総数約300点が出土した。なかでも、トンボ玉１点や馬具飾り金具類が鉄地金銅張りである点が特筆される。築造時期は６世紀後半で、その後７世紀前半にかけて何回か追葬されている。７年前に環頭大刀柄頭・特殊扁壺の出土で話題をまいた高山古墳群の１号墳と形態がよく似ている。

調査地位置図(1/50,000)

２号墳　１号墳の東40m下方に位置する。石垣状の列石で周囲を囲まれた２段築成の長方形墳で、上段が７m×７m、下段が13m×８mの規模を有する。西側には、丘陵と区画する幅2～2.5mの溝が設けられている。列石は、最もよく残存する西側下段で高さ約0.8m、上段は基底石のみ確認した。墳丘東側列石については、開墾によって破壊され残存し

ないが、一部基底石のみ確認できた部分もある。埋葬施設は、無袖式横穴式石室で全長10.5m・奥壁幅1.65mの規模を有する。出土遺物は、武器類・装身具・須恵器・土師器が約50点ほど出土した。築造時期は、７世紀前半に求められるが、追葬の形跡はなかった。

墳丘などの調査の結果、２号墳は築造時からこのような形状をしていたのではなく、もともとあった古墳を改変(増築)したことが明らかとなった。このことは、列石が旧墳丘を削り、盛り土した上で設けられていることや、石室自体が閉塞石付近で石材の積み方が変わり、羨道が継ぎ足されていることも判明した。前身となった古墳は、直径約10m、西側に幅２mほどの溝を持ち、全長約７mの石室を内部主体とする小規模なものである。古墳の改築は、この石室を中心として規則性をもって拡張されていったようである。石垣状列石の設置・墳丘を築造するに当たっては、石垣状列石に区画が認められ、西下段列石では４分割され、区画部分には大きめの石材を置く。各区画内の石材の積み方には差が認められ、規則性に欠ける。区画された石材は、二段目列石や当初の石室との対応関係が認められる。すなわち、下段列石の北端は、旧墳丘の北端をさし、二番目は石室天井石の北端・二段目列石の北辺をさし、三番目は石室の主軸の中心をさす。四番目は二段目列石の南辺及び旧石室の羨門部をさし、南端は改築後の南側石列・羨門部をさしている。北辺下段列石は、完存するのが西側1/2であるが、３区画設けられていたと考えられ、残存する大きめの区画された石材は、石室側壁ラインに相当するものと思われる。区画溝についても、現状では方形にとっているが、もともと円形であったものを方形に拡張しているため、やや不規則な形をしており、継ぎ足された南側ほど北側に比べて、溝幅が狭くなっている。

滝谷遺跡　１号墳の南側の平坦地に、幅約１m×長さ約45mの試掘トレンチを設け掘削を行った。その結果、柱穴状遺構及び焼土などを確認し、出土遺物としては、弥生時代後期、６世紀後半～７世紀前半の須恵器・土師器、中世の陶磁器が出土し、遺構が存在することが確実となったため、平成６年度に道路部分の、全面調査を実施する予定である。

まとめ　今回の調査の結果、１号墳は６世紀後半～７世紀前半に築造・追葬された古墳であることが明らかとなり、２号墳については、二段築成で石垣状の列石を有するという全国的にみても類例の少ない古墳の調査となった。また、円墳を改築して方形墳としたり、改築に伴い石室を継ぎ足すというような特殊性もあり、この地域の墓制を考える上で貴重資料となった。滝谷遺跡については、古墳群と同時期の遺物が出土していることや、弥生時代後期については大山墳墓群との関係など、集落との関わりなど注目される内容があり、今後の調査に期待したい。

(増田孝彦)

22. 七百石遺跡

調査地　綾部市七百石町東中野

調査期間　平成５年８月２日～平成６年３月４日

調査面積　約5,000m²

はじめに　七百石遺跡の調査は、京都縦貫自動車道の建設に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。この遺跡は、由良川支流の八田川上流域にあり、標高95m前後の台地に位置している。『京都府遺跡地図』によれば、古墳時代後期の遺物散布地として記載されているが、内容は不明であった。

調査概要　調査地は、南北にのびる幅約100mの台地と、その北西側の山裾の緩傾斜地の２か所である。前者をＡ地区、後者をＢ地区と呼ぶ。Ａ地区では過去に造成工事がなされているため、試掘調査を行い遺構・遺物の残存状況を確認した。その結果、台地の西側と東側縁辺部で溝や住居跡などを検出したので、本調査を実施した。また、Ｂ地区でも土坑や住居跡などを検出した。以下、Ａ・Ｂ地区ごとに調査の概略を報告する。

Ａ－１地区　台地東側斜面南側のトレンチである。ここからは最大幅約10m・深さ約2.5mの谷を検出した。土層は大きく３層に分層でき、上層から古墳時代後期の遺物が出土した。中層・下層からは遺物が出土しないことから、古墳時代後期頃にはこの谷は埋まっており、やや窪んだ地形になっていたものと考えられる。また、このトレンチの北西部で中世の池状遺構・溝を検出した。

第１図　調査地位置図(1/50,000)

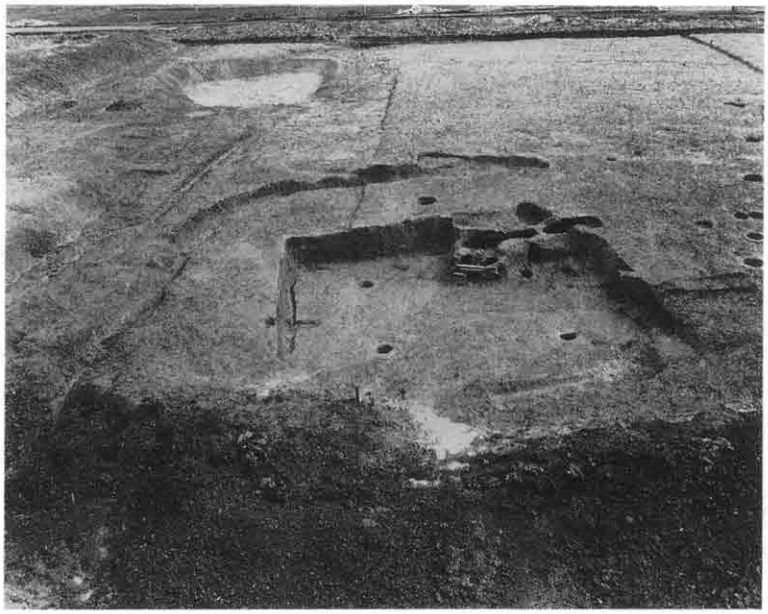
Ａ－２地区　台地東側斜面北側の北トレンチである。ここからは、竪穴式住居跡８基・落とし穴状土坑２基・多数の溝・ピットなどを検出した。竪穴式住居跡の平面形はいずれも方形である。竪穴式住居跡202は、西側中央部に竈を設ける。この竈には地山をトンネル状に掘り抜いた煙道が伴う。８基の竪穴式住居跡の内、４基は住居跡の周囲に「コ」の字形に溝をめぐらしている。地形からみて、雨水などが住居内に

入らないようにするための排水溝と考えられる。これらの住居跡は６世紀後半頃と考えられる。なお、竪穴式住居跡213は、出土した土器から弥生時代後期～古墳時代初め頃のものと考えられる。その他に、２基の落とし穴状土坑を検出した。円形と方形のものがあり、どちらも底にピットがみられることから、落とし穴の可能性もある。時期は不明である。ピットについては建物としてまとまるものはない。

Ａ－３地区　台地西側斜面南側のトレンチである。ここからも溝をめぐらした住居跡を２基検出した。竪穴式住居跡308の平面形は方形である。住居跡の南東隅に地山を掘り残し、そこに煙道と焚口が直交する竈をもつ、いわゆる「青野型」の住居跡である。もう一基については、残存状態が悪く南東部のみを検出した。どちらも６世紀後半頃のものと考えられる。その他に、中世の池状遺構も検出した。

Ｂ地区　ここからは、古墳時代後期頃の竪穴式住居跡１基と弥生時代後期～古墳時代初め頃の円形住居跡の一部、落とし穴状土坑１基などを検出した。竪穴式住居跡Ｂ11の平面形は、方形である。竈を南西隅に設ける、いわゆる「青野型」の住居跡である。落とし穴状土坑は出土遺物がなく、時期は不明である。

まとめ　まわりに溝をめぐらす住居跡は中丹地域では、福知山市広峯遺跡についで２例目となる。広峯遺跡の住居跡は、山上の平坦地に位置し、数基の住居跡の内１基だけが溝をめぐらしており、七百石遺跡のものとは状況が異なる。今回検出した集落跡は、斜面地に営まれた集落の状況を示す一例として重要である。　（尾崎昌之）



第２図　竪穴式住居跡ＳＨ308全景（西から）

23. 池尻遺跡第２次

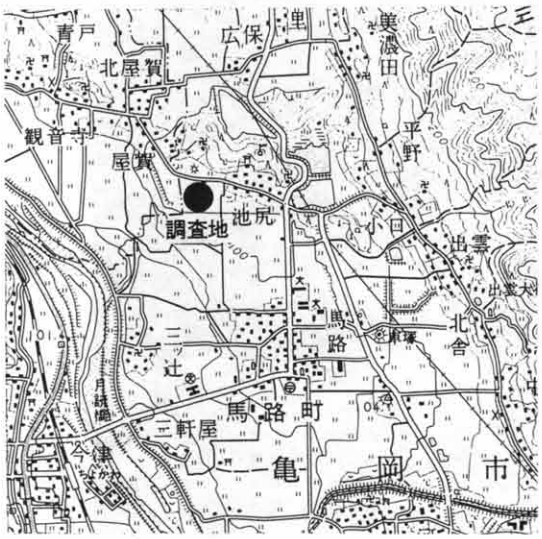
所 在 地　亀岡市馬路町池尻

調査期間　平成５年10月７日～平成６年１月28日

調査面積　約600㎡

はじめに　池尻遺跡は、亀岡市を南東流する大堰川左岸の馬路町池尻に所在し、遺跡の範囲は東西総延長約750ｍを測り、遺跡の西端は船井郡八木町に接している。前回平成３年度の調査では、主に遺跡の東側を中心に行い、弥生時代前期の土坑及び溝跡や、奈良時代の漆工の存在をうかがわせる漆付着土器を含む土坑などを確認している。また、今回の調査の中心となった西側では、格子目タタキの入った平瓦や瓦当に四重弧文の施された軒平瓦などを埋土に含む、南北方向の溝跡などを確認した。今回の調査は、府道亀岡園部線の改良工事に伴う平成３年度の追加調査である。なお、調査は、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査概要　調査は前回調査の22トレンチの面的調査を主目的にした。このトレンチを中心に合計３か所の調査区を設けた。調査区の番号は、東側から第１調査区、第２調査区、第３調査区とした。調査地周辺は、東から西へと比高を増す微高地状を呈しており、奈良時代以前には大堰川の支流である三俣川の氾濫源が及んでいる場所である。東の第１調査区と西の第３調査区の遺構面の比高差は約1.8ｍを測る。今回の調査では調査区の幅が約10ｍと限定されていたため、建物跡の規模及び遺構の性格の判明したものは少ないが、調査範囲内で寺域を区画する東限及び西限の溝跡を確認したことによって、およそ寺域を把握することができた。寺域内では、この区画溝の南北中軸線より東寄りに花崗岩を礎石とした礎石建物跡１



第１図　調査地位置図(1/50,000)

棟、また、この建物跡より約20数m東には何らかの建物跡の基壇と思われる南北方向の石列も確認した。そのほか、これらの遺構に伴うであろう雑舎的な掘立柱建物跡も南北棟及び東西棟のそれぞれ１棟ずつ検出した。今回の遺構の時期を示すと思われる遺物は、東限の溝跡から多数出土した。その遺物の大半は布目瓦であり、その中にわずかに軒丸瓦、軒平瓦が破片で10数点含まれていた。また、この瓦に共伴する遺物に須恵器・土師器がある。

第２図　調査地(上空から)

まとめ　瓦の年代が白鳳から奈良時代初頭(７世紀後半～８世紀初頭)に時期設定できるのに対し、出土した須恵器は８世紀中頃～後半で数十年の開きがある。ただし、前回の調査で、今回調査の東限溝から東へ約200mの場所で検出した土坑出土の須恵器の長頸瓶は、前回分も含めて出土した瓦と時期がほぼ一致することから、今後寺域推定範囲内で同時期の土器資料が出土する可能性はある。

今回の池尻遺跡の調査で大堰川左岸でも、藤原宮式、本薬師寺式の瓦が出土する寺院が存在していたことを示す資料が得られた意義は大きい。

(柴　暁彦)

24. 伏　見　城　跡

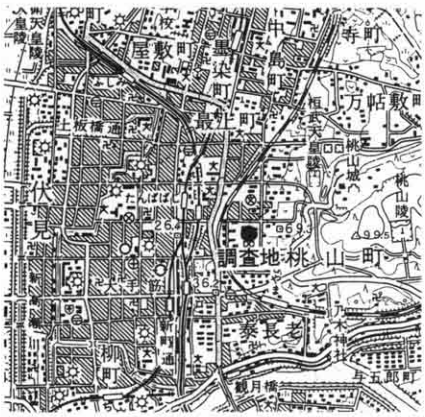
所 在 地　京都市伏見区桃山毛利長門東町８

調査期間　平成５年10月４日～平成６年２月３日

調査面積　約1,220㎡

はじめに　今回の伏見城跡の発掘調査は、京都府立桃山高校の校舎改築に伴って、京都府教育委員会管理課の依頼を受けて実施した。桃山高校は、古地図によると毛利安芸守屋敷地に当たっており、桃山高校敷地内の発掘調査は今回で三回目に当たる。体育館下では瓦溜まり、２号館下では井戸跡、格技場下では南北方向の道路側溝などを確認しているが、これらの調査地は大名屋敷地の縁辺部に位置しているらしく、建物跡などの顕著な遺構は確認されていない。

調査概要　調査は、上層遺構面と下層遺構面で行った。上層遺構面での伏見城関連の遺構は、建物跡４棟、柵列跡１列、土坑１基などがある。建物跡は、調査地中央部で検出した東西９間×南北２間以上のもの、調査地西側で検出した礎石建物は南北２間分×東西５間分がある。後者の柱穴は径１ｍ前後で、検出高は80cm程度を測り、坑内には一辺60～80cmの石を据えていた。調査地西端では、1.0ｍ×1.3ｍ、検出高40cmの土壙を検出した。内部の底面近くでは土師器皿３枚、黒釉陶器猪口、鉄釘、炭化物などが出土した。規模や内容から墓と推測される。その他に、東西方向の柵列や掘立柱建物跡と推定される柱穴列を２か所で検出した。上層遺構面の下面には、調査地中央部から西側一帯に盛り土層があり、西に行くにつれて徐々に厚くなっており、西端部では約２ｍの厚さが認められた。この盛り土層の下面が下層遺構面で、この直上に瓦が廃棄された「瓦層」が確認され、この遺構面にも多くの伏見城関連の遺構が存在するものと予想された。しかし、下層遺構面では予想に反して、建物跡などの顕著な遺構は認められず、柱穴や土坑、溝跡を検出しただけであった。これらの遺構には瓦片が伴っており、伏見城の時期と判断してよいものである。

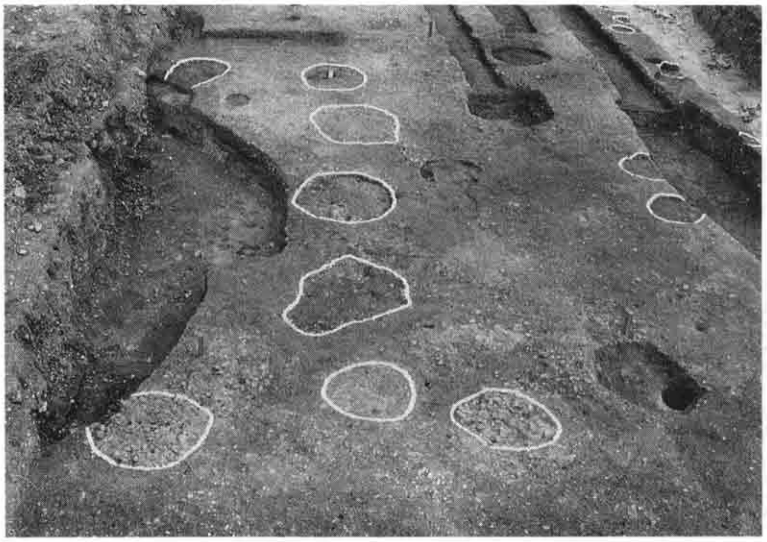


調査地位置図(1/50,000)

まとめ　調査地内で、最大２ｍの整地層を確認し、その上下の面で伏見城期の遺構を検出した。また、上層遺構面では建物跡を検出し、大名屋敷の中心施設の一部と考えられる。しかし、下層遺構面では顕著な遺構は検出されず、丘陵斜面の一部が確認できたのみであった。これらのことから、伏見城下町には大規模な改造が認められ、この改造の前後で二時期が想定される。

（岩松　保）

調査地全景（西から）



建物跡（西から）

25. 内里八丁遺跡

所在地　八幡市内里小字八丁・中島・日向堂

調査期間　平成５年４月23日～平成６年２月７日

調査面積　約1,300㎡

はじめに　今回の調査は、京都南道路建設に伴うもので、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。内里八丁遺跡は、埋没した自然堤防上に営まれた弥生時代後期～中世にかけての複合遺跡である。これまでに弥生時代後期～古墳時代初頭の水田跡を検出したほか、飛鳥・奈良～平安時代の掘立柱建物跡・溝・井戸を多数検出している。内里八丁遺跡の調査は、昭和63年の試掘に始まり、平成５年度はＢ地区で奈良時代遺構面下に存在する下層遺構を調査した。

調査概要　Ｂ地区では、多数の建物跡群を検出した奈良時代遺構面下の海抜10.9～11.6ｍの間で、古墳時代後期（第３遺構面）と弥生時代後期末～古墳時代前期（第４遺構面）の二時期の遺構面を検出した。

第３遺構面　方形の竪穴式住居跡１基を検出した。住居跡は、上層遺構の影響で遺存状態が悪いが、北東側壁面の中央部に竈が存在する。

第４遺構面　調査地中央部以北から竪穴式住居跡１基・埋葬主体部１基を検出するとともに南部で水田跡を検出した。水田跡では、畦畔内から壺・甕・高杯など祭祀色の強い遺物の出土をみている。

調査地位置図（1/50,000）

まとめ　内里八丁遺跡は、調査対象範囲の約５割の調査を終えた段階にあり、今後の調査は北部域が対象となる。内里八丁遺跡は、各時期の中でも弥生時代後期末頃の水田跡と、飛鳥・奈良時代の集落跡が中心的な遺跡である。今後、調査が進むにつれ、内里八丁遺跡の様相がより明らかになるものと期待される。

（竹原一彦）

研究ノート

正L字文を持つ規矩鏡について

原田三壽

京都府竹野郡弥栄町大田南5号墳から出土した青龍3年方格規矩四神鏡は魏の紀年を持つもので、景初3年の卑弥呼の遣使以前に魏と倭の交流を示すものとして注目を集めている。この鏡の特徴のうち、内区図像、銘文等以外の主要な特徴として、1)通常の規矩鏡の逆L字文とは異なった正L字文であること、2)長方形の鈕孔を持つこと、3)鈕孔が方格の対角方向に開口すること、4)外周突線は持たないこと、などがあげられる。方格規矩鏡が中国製かどうかの認定にはL字文の方向がしばしばその理由とされる。本稿はこのL字文を通して青龍3年鏡の性格を考える。語句の使用に際しては、文字どおりのL字を正L、通常の規矩鏡に用いられている逆向きのLを逆Lと呼ぶ。

表1は鏡式をもとにまとめたものである。名称は、四神鏡といっても四神が揃っているかどうかなど検討した結果の名称ではなく、基本的には報告に依拠している。鏡式的には、27面中14面が方格規矩四神鏡、9面が方格規矩鳥文鏡、2面が方格規矩渦文鏡、2面が円圏規矩四神鏡である。

まずはじめに、鏡の年代観であるが、鏡の特徴や報告をもとに後漢末三国時代からはずれるものをあげておく。

甘粛省慶陽県博物館蔵鏡は、鈕座、主文、外区文様、乳、銘文等の単位文様の分析から王莽～後漢初期まで遡るものである。広州漢墓出土鏡は後漢前期と報告する。鏡の年代観と報告書に記載される年代とは検討の必要が感じられる。古鏡聚英掲載の竹内金平氏旧蔵鏡も外区が古いタイプに多い凹帯であるものの、四神等の獣像の表現はないようである。

次に、単位文様の中でも外区に注目しよう。外区は、鋸歯文＋複線波文＋鋸歯文からなるものが最も多く、これだけで全体の半分の13例ある。これに省略形の鋸歯文＋複線波文やその変形の鋸歯文＋鋸歯文＋鋸歯文等を加えると、鋸歯文＋複線波文の組み合わせからなるものだけで20例にもなり全体の約3/4を占める。その他流雲文が5例、唐草文と凹帯が1例ずつあるが、圧倒的に鋸歯文と複線波文の組み合わせのものが多い。

外周をめぐる1条の圏線、すなわち外周突線を持つ鏡については福永伸哉氏の論考があ

り、三角縁神獣鏡との関連が明らかにされている。[注1] ここで詳しくは触れないが、今のところ本稿との関わりでいえば、外周突線を持つ規矩鏡は、正L字文を持つ可能性がきわめて高いことを付け加えておく。

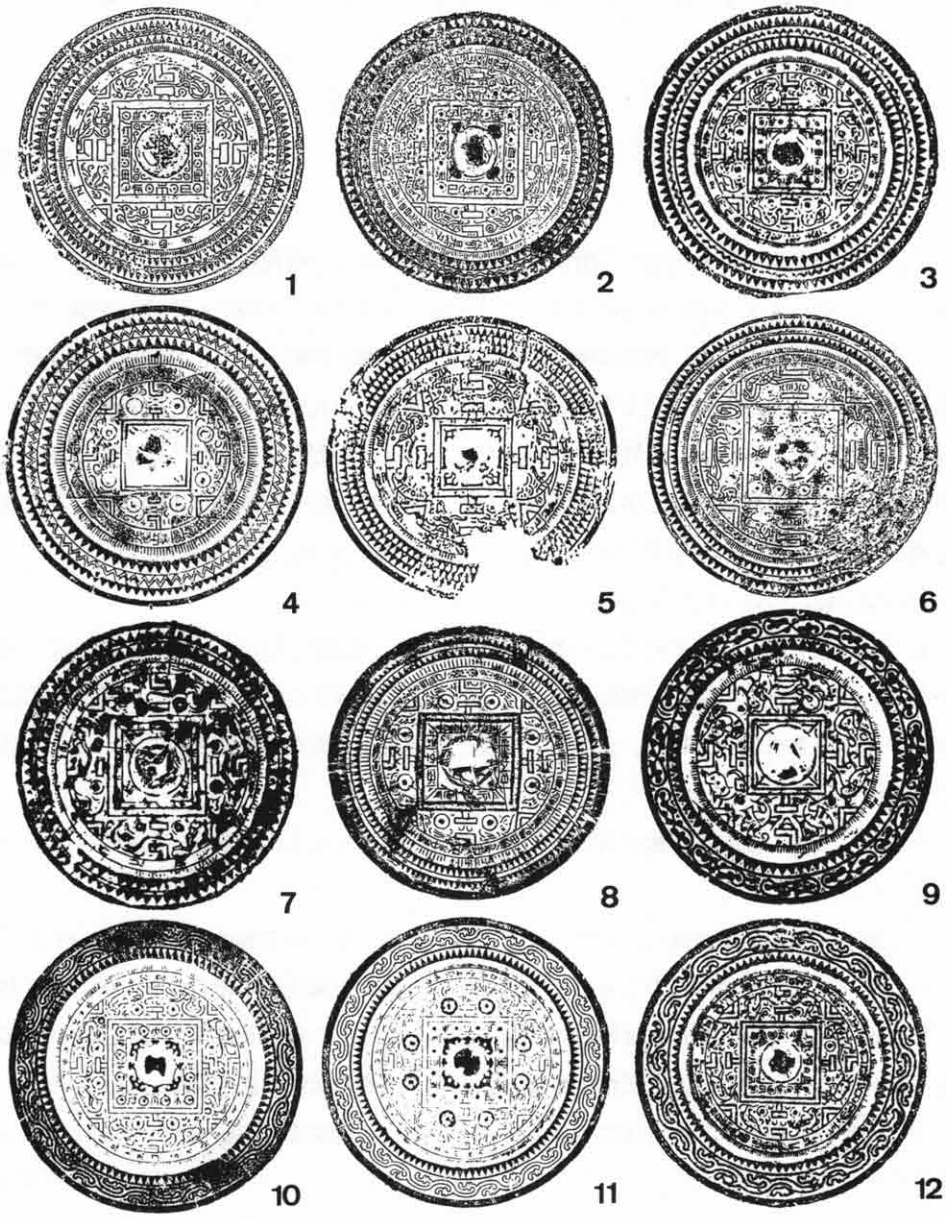


図1　正L字文を持つ方格規矩鏡

1.椿井大塚山古墳(13)　2.簠斎(12)　3.扶風県博物館旧蔵(16)　4.広州4023号漢墓(24)
5.大営村8号晋墓(1)　6.小校(11)　7.江漢考古(6)　8.古鏡図録中16(20)
9.沂水県城関鎮(5)　10.鄂城(8)　11.慶陽博物館(9)　12.扶風県揉谷郷(4)
( ) 内は、表番号

付表　正Ｌ字文を持つ方格規矩鏡出土遺跡一覧表

番号	鏡式	出土地	外区	銘　　文	直径	特徴等	文献
1	方格規矩四神鏡	河北省北京大営村８号晋墓	鋸＋鋸＋鋸＋圏線	青同之竟明且好、□□長生買者□	15.2		文物83-10
2	方格規矩四神鏡	河北省撫寧県留守営鎮馬庄村	鋸＋鋸＋鋸		15.8	鈕孔方向	文物春秋91-2
3	方格規矩四神鏡	吉林省吉林市烏拉街遺址	鋸＋複波		9.5		吉林出土銅鏡18
4	方格規矩四神鏡	陝西省扶風県揉谷郷陵東村	鋸＋流雲	上太山、見老人、食玉央、飲澧泉、馬如龍、東浮游、宜官矜、保子孫、貴富昌、楽未央兮	16.6	鈕孔方向	文博88-4
5	方格規矩四神鏡	山東省沂水県城関鎮后古城	鋸＋変形流雲		11.5		文物91-7
6	方格規矩四神鏡	北京、湖北、河南等のいずれか	鋸＋鋸	尚方乍竟、毋得之有山人去羊兮	15.5		江漢考古93-3
7	方格規矩四神鏡	浙江省嵊県	鋸＋複波＋鋸	尚方乍竟眞大巧、上有山人不知老、渴次玉泉食汎棗	18.0		浙江16
8	方格規矩四神鏡	湖北省鄂城	鋸＋流雲	尚方作竟大毋傷、左龍右虎辟不羊、朱爵玄武順陰陽、子孫備具居中央、長保二親具富昌、如侯王	16.0		銅鏡図典268
9	方格規矩四神鏡	甘粛省慶陽博物館蔵	鋸＋流雲	新有善銅出丹陽、調凍冶竟大毋傷、左龍右虎掌四彭、朱鳥玄武順陰陽、子孫備具居中央、長保二親如侯王、千秋万歳楽未央	21.5	鈕孔方向	文物87-6
10	方格規矩四神鏡		鋸＋流雲	尚方作竟成大□、上有山人不□老□	16.0		巌窟249
11	方格規矩四神鏡		鋸＋鋸	尚方乍竟眞大巧、上有□□□□老、渴次玉泉汎食棗			小校巻15-24
12	方格規矩四神鏡		鋸＋複波＋鋸	□氏作竟□□□、左龍右寅□□□、二親備具子孫昌、□如公三□楽未、□□		鈕孔方向	簠斎上31
13	方格規矩四神鏡	京都府相楽郡山城町椿井大塚山古墳	鋸＋複波＋鋸＋圏線	羊作同竟甚大工、上有山□不知老、服者長生買主壽	18.4	鈕孔方向鈕上に突起	椿井35
14	方格規矩四神鏡	京都府竹野郡弥栄町大田南５号墳	鋸＋複波＋鋸	青龍三年顔氏作竟成文章、左龍右虎辟不詳、朱爵玄武順陰陽、八子九孫治中央、壽如金石宜侯王	17.4	鈕孔方向	
15	方格規矩鳥文鏡	遼寧省遼陽市三道壕１号墓	鋸＋複波＋鋸＋圏線	吾作大鏡眞是好、同出余州青且明兮	16.8	鈕上に突起	文参55-12
16	方格規矩鳥文鏡	陝西省扶風県博物館旧蔵	鋸＋複波＋鋸	王氏作竟眞大好、上有山人不知者、渴次玉泉汎食棗、浮游天下敖四海、壽如金石爲国保	16.0		文博88-4
17	方格規矩鳥文鏡	河北～河南	鋸＋鋸＋鋸	青同之鏡甚大工、上有山人食文	12.8	Ｖ字文欠鈕孔方向	巌窟262
18	方格規矩鳥文鏡	江蘇省南京市栖霞山付近漢墓	鋸＋複波＋鋸				考古59-1

19	方格規矩鳥文鏡		鋸＋複波＋鋸＋圏線	吾造之竟□陽、巧工作成文章、令君高位、宜侯王子孫千人			古鏡図録中27
20	方格規矩鳥文鏡		鋸＋鋸	□氏乍竟毋少有、服者□□□□女王□□宜孫子、楽無已			古鏡図録中16
21	方格規矩鳥文鏡	鳥取県東伯郡羽合町馬ノ山４号墳	鋸＋複波＋鋸＋圏線	吾作大竟好且明、上景未守作意□去不羊子□干□□□長楽天□□	15.2		山陰
22	方格規矩鳥文鏡	福岡県小郡市津古生掛古墳	鋸＋複波＋鋸＋圏線		13.9	鈕孔方向	津古生掛Ⅱ
23	方格規矩鳥文鏡	熊本県宇土市向野田古墳	鋸＋複波＋鋸＋圏線	青同作竟明大好、長生宜子孫	18.4		向野田古墳
24	方格規矩渦文鏡	広東省広州市4023号漢墓	鋸＋複波＋鋸	調治佳竟子孫息、長保二親得天力、傳人后世楽毋極	13.4		廣州漢墓
25	方格規矩渦文鏡	竹内金平氏旧蔵	凹帯		11.4		聚英29-3
26	円圏規矩四神鏡	ロイヤルオンタリオ博物館蔵鏡	鋸＋複波＋鋸＋圏線	長保子宜孫公至位			欧米
27	円圏規矩四神鏡		鋸＋唐草＋圏線	君宜高官保子孫	16.5	鈕上に突起	銅鏡鑑賞
参考	方格規矩四神鏡	山東か	鋸＋複波＋鋸	吾作佳鏡自有尚、工師刻像主文章、上有古守辟非羊、服之壽考宜侯王	15.6	鈕孔方向	巖窟265

ここで、鋸歯文＋複線波文の組み合わせの変形である鋸歯文を三重に重ねるものをとりあげる。鏡式的には四神鏡が２面、鳥文鏡が１面の計３面ある。内区図像では、大営村出土鏡は、亀の甲羅と足の表現、蛇は亀にからみつくものの亀の頭部は欠落していることなどから、玄武像にくずれが見られる。同じ四神鏡どうし比較すれば、型式的前後関係を把握することができるかも知れないが、撫寧県出土鏡は図版不鮮明のためそうした検討ができないのが残念である。重要な資料であるので、より詳細な報告と鮮明な図版が期待される。この２面の出土地はともに河北省であり、もう１面の巖窟262鏡は河北～河南という。巖窟蔵鏡には出土地不明なものが多いが、どちらかといえばこの鏡の出土地は関連鏡を勘案して河南省よりは河北省の方が可能性が高かろう。

河北撫寧県出土鏡は銘文がないが、銘文を持つ大営村出土鏡と巖窟262鏡は、冒頭の語句がともに「青同之竟」と同じで、「之」を使用する。この２面以外にも古鏡図録27鏡が「吾造之竟」と之を用いている。この之であるが、之を使わずとも「作」で通常の銘文同様文意が通じるにもかかわらず、あえて「之」を使用しているところに注意する必要がある。大営村鏡と古鏡図録27鏡はともに外周突線を持つことからも、その関連は明らかだが、

それ以外では銘文的にもともに之を使用していることが重要である。之の使用といえば、景初4年鏡の「景初四年五月丙午之日」が思い出される。ただ、景初4年鏡は四六駢儷体で文を整えるため之を挿入していると考えられるので、大営村鏡等で用いるような之の使用方法とは異なっており、単純に同一のものと捉えることはできない。

出土地の分布を見ると、ほぼ中国全土からまんべんなく出土しているように見える。ただし内容を吟味すると、そのうちの外周突線を持つものや鋸歯文を三重にかさねる河北、遼寧出土鏡は、先述したように相互の関連性が明らかで、1つのグループとして把握することができる。それ以外で中原以南の各省から1例ずつ出土しているものは、その他共通する特徴等認められず、数量も1面のみであることから規矩鏡中の単発的な特殊事例のようである。したがって河北省を中心に分布するものとは、区別して考える必要がある。

以上のことから、正L字文を持つ鏡は中国東北部と日本列島(なかでも西日本)に分布の特徴があることがわかる。それとあわせて、楽浪郡等の朝鮮半島からの出土がないことも注意が必要である。後漢末三国初頭は中国東北部には公孫氏が勢力を広げており、いわば四国時代ともいうべき状況にあった。公孫淵が司馬懿に滅ぼされるのは景初2年だが、青龍3年鏡の製作背景を明らかにする上でも、今後関連鏡のより緻密な資料の検討がなされねばならない。

その他の特徴として、鈕孔方向のずれと鈕上の突起に注目したい。

鈕孔方向は、普通方格規矩鏡では子午の方向に開口する。それが鈕孔方向のずれるものは、椿井鏡では寅申の方向、青龍3年鏡では辰戌の方向に開口し、子午の方向から約45度近く振れている。方格の対角方向に開口するものは、資料ごとにわずかな角度の違いはあるものの合計9面ある。方格規矩鏡で、このような鈕孔方向を振るものは参考として加えた巌窟265鏡以外はいずれも正L字文である。巌窟265鏡は262鏡とはL字の方向が異なるが、作者の梁上椿もその類似に注目し、同時期の同種類の作品であろうとした資料である。確かに作行等かなり262鏡と近いものがあるが、この2面は梁氏の記述していない鈕孔の開口方向という共通点を指摘することができよう。

鈕上に見られる突起は椿井鏡をはじめとして4例に残る。これは鏡を製作する際、ブンマワシで円を描くが、その痕がついたままで削り取られず残っているものであろう。つまり完成に際し鈕上部が未処理であるということができる。これは珍しいことで、普通はセンやヤスリで削り取って平坦に処理されている。表からも明らかなように、こうした突起の残る資料に限り、外周突線を合わせ持つことから、関連鏡のより一層の深い結びつきが裏付けられよう。

内区の図像では、文様の構成、配置等の問題があるが、ここでは紙幅の関係から四神を

はじめとした鳥獣の方向にだけ触れる。

福永氏は外周突線とともに玄武の方向にも注目している(注2)。それによれば、方格規矩鏡のほとんどの玄武像が右向き(つまり左回り)になるという。ここでも玄武を中心に禽獣の方向を確認しておくと、正L字文にも関わらず浙江16と小校は時計と逆方向の左回りになっている。この2例以外は玄武像が時計回りの方向、つまり玄武像自身は左向きである。原則から逸脱したL字文と玄武の向きといった文様配置の関連性は、工人問題をも踏まえた製作体制へ踏み込んでいく資料となりえよう。

本稿は、青龍3年鏡の正L字文の特徴に注目し、その特徴を持つ資料を検討し関連性を探ることを主眼においた。作業的には主たる鏡の報告書を中心に調べたが、時間的な制約もありまだまだ準備不足で、漏れた資料もあるに違いない。関連資料についてご教示いただければ幸いである。

(はらだ・みつひさ＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

注1　福永伸哉　1991　「三角縁神獣鏡の系譜と性格」(『考古学研究』149　考古学研究会)
　　1992　「規矩鏡における特異な一群－三角縁神獣鏡との関連をめぐって－」(『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集　15周年記念論文集編集委員会)
注2　福永伸哉　1992　254頁
なお、書物の略号及び出典は次のとおりである。

1　黄秀純、朱志剛　1983　「北京市順義県大営村西晋墓発掘簡報」(『文物』1983年10期)
2　趙大海　1991　「河北撫寧出土的四件古代銅鏡」(『文物春秋』1991年2期)
3　張英　1990　『吉林出土銅鏡』　文物出版社
4、16　王倉西　1988　「扶風博物館蔵歴代銅鏡介紹」(『文博』1988年4期)
5　孔繁剛　1991　「山東沂水県征集的古代銅鏡」(『文物』1991年7期)
6　楊唐深　1993　「武漢大学歴史系収蔵的一批銅鏡」(『江漢考古』1993年3期)
7　王士倫編　1987　『浙江出土銅鏡』(文物出版社)
8　孔祥星　1992　『中国銅鏡図典』(文物出版社)
9　許俊臣、劉得禎　1987　「慶陽博物館蔵漢代四神規矩鏡」(『文物』1987年6期　文物出版社)
10、17　梁上椿　1940～1942　『巖窟蔵鏡』(田中　琢、岡村秀典訳　1989　同朋舎)
11　劉体智　1935　『小校経閣金文』
12　陳介祺　1925　『簠斎蔵鏡』
13　京都大学考古学研究室編　1989　『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部
14　弥栄町教育委員会、峰山町教育委員会　1994　「大田南5号墳ほか説明資料」
15　東北博物館　1955　「遼陽三道壕両座壁画墓的清理工作簡報」(『文物参考資料』1955年12期)
18　葛家瑾　1959　「南京栖霞山及其附近漢墓清理簡報」(『考古』1959年1期)
19、20　羅振玉　1916　『古鏡図録』
21　大村俊夫　1978　『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ』(山陰考古学研究所記録第2)
22　宮田浩之編　1988　『津古生掛遺跡Ⅱ』(小郡市文化財調査報告書第27集)
23　富樫卯三郎　1978　『向野田古墳』(宇戸市埋蔵文化財調査報告書第2集)
24　中国社会科学院考古研究所、広州市文物管理委員会、広州市博物館　1981　『廣州漢墓』(中国田野考古報告集　考古学専刊　丁種第21号　文物出版社)
25　後藤守一　1942　『古鏡聚英　上篇　秦鏡と漢六朝鏡』
26　梅原末治　1933　『欧米蒐儲支那古銅精華　鑑鏡部』
27　程長新、程瑞秀　1989　『銅鏡鑑賞』(北京燕山出版社)

資料紹介

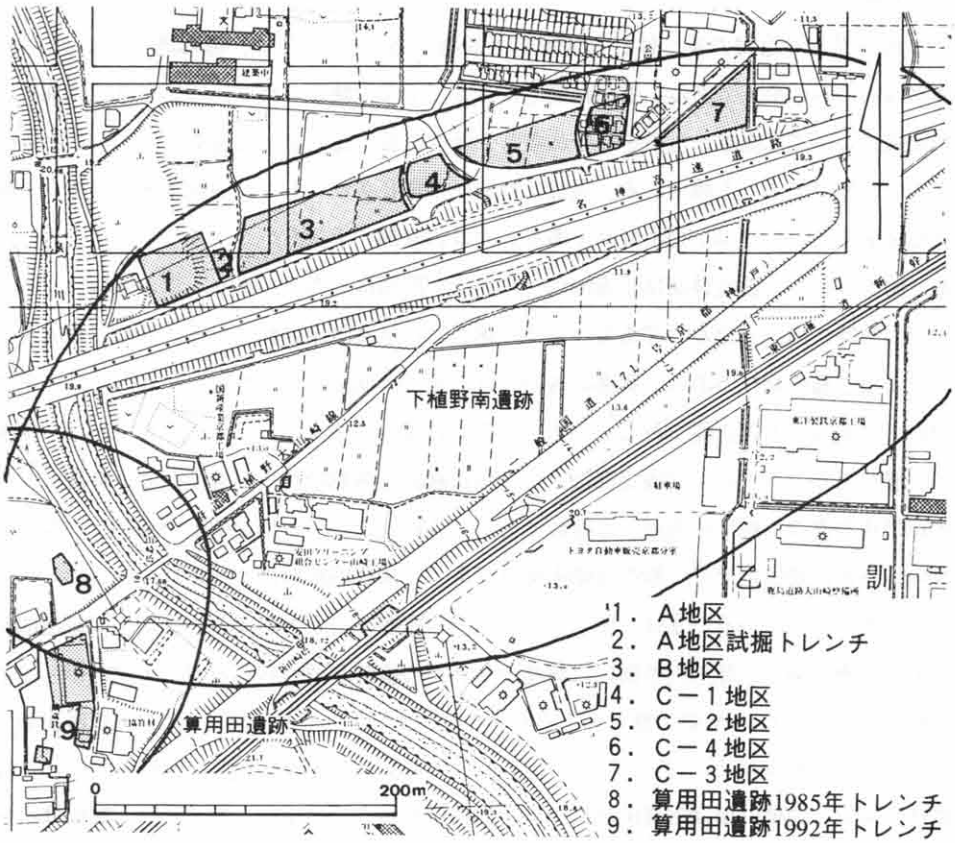
大山崎町下植野南遺跡出土の遺物

中川和哉

1．はじめに

今回紹介する遺物は、昭和63年度から当センターが実施している中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)の拡幅工事に伴う発掘調査のうち、下植野南遺跡[注1]で出土した遺物及び近接する算用田遺跡[注2]出土遺物である。

下植野南遺跡は、京都府と大阪府の府境に位置する京都府乙訓郡大山崎町を北から南に



第1図　調査トレンチ位置図

流れる天井川である小泉川に近接し、その東側に広がる。遺跡は、海抜13m前後に位置している。下植野南遺跡は、縄文時代から近世に至るまでの複合遺跡であるが、古墳時代と奈良・平安時代に最も遺構・遺物が増加する。各時代を通して、天井川である小泉川が原因であると想定できる洪水跡や、短期間で埋まった自然流路跡が北から南の方向に多く認められる。

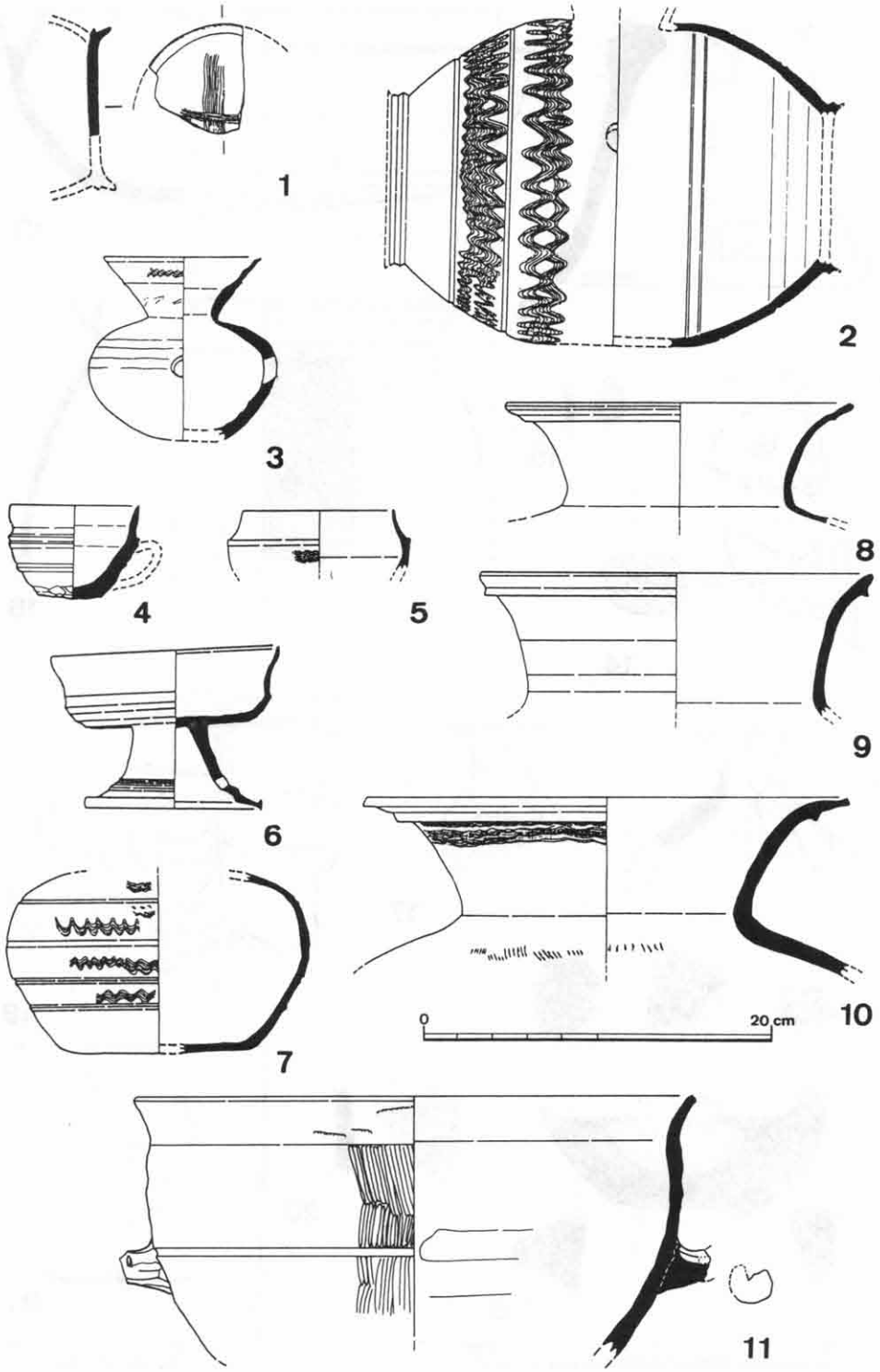
古墳時代の遺物の中には、古墳以外では検出されることが希な遺物、またそのもの自身の出土例が稀有なものが認められる。これまで概報ごとに分散して掲載された資料や未発表の資料を特記して、この遺跡の特殊性を明らかにしていきたい。

2．出土遺物(第２・３図)

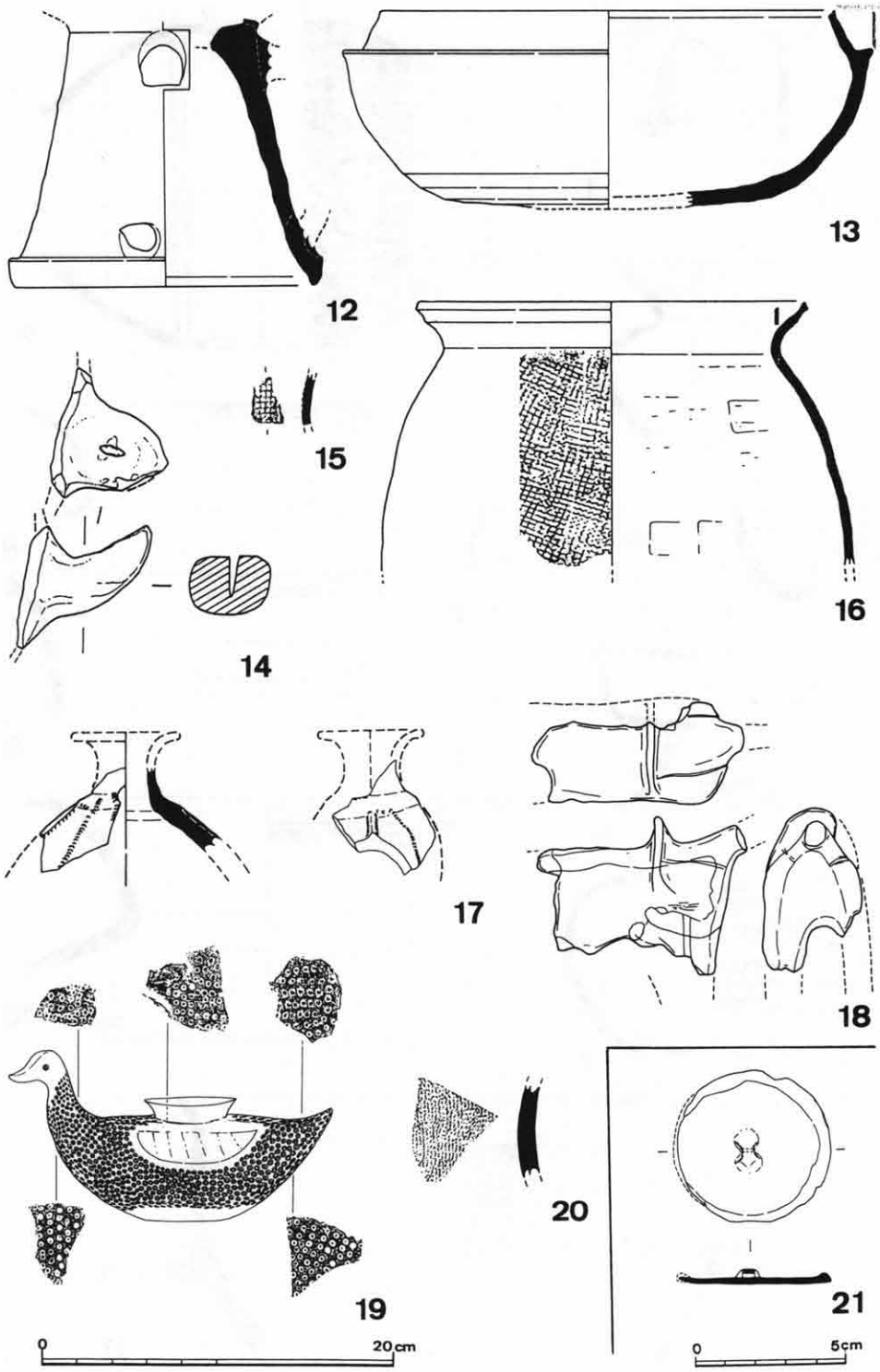
中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)の拡幅工事に伴う発掘調査のうち、下植野南遺跡にかかる発掘調査区は、第１図に示したようにＡ～Ｅまでの地区に分け、トレンチによっては枝番号を付けて呼称している。

①Ａ地区

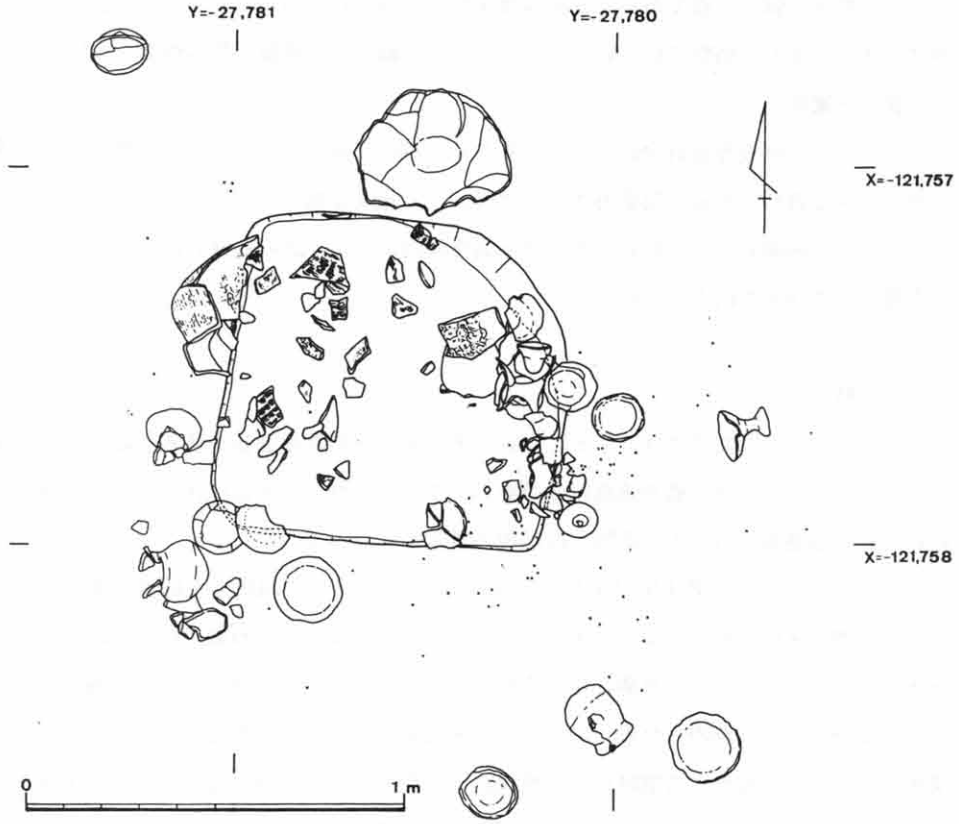
Ａ地区出土の遺物の多くは、包含層出土遺物である。１・２は、樽形甕である。１は、体部端部のみの出土である。外面は刷毛によって十字に施文されている。２は、体部外面が沈線によって区画された中を、それぞれ２単位の波状文によって施文されている。３は、完形の状態で出土した甕である。底部は外面から穿孔されている。外面は赤みを帯びた暗灰色を呈する。４・５は、把手付鉢である。４は、底部に手持ちヘラケズリの跡が認められる。胎土は粗く、器壁外面は暗青灰色を呈するが断面は赤褐色である。この個体は、Ａ地区の試掘時に出土したものである。５は、体部に波状文が施されている。６は、青灰色を呈する須恵器の高杯である。脚部の透かしは円形で外側から穿孔されている。７は、平底の壺と考えられる須恵器である。沈線と波状文によって施文されている。８～10は、須恵器の甕である。いずれも口縁端部近くの外面に断面三角形の突帯をもつ。この特徴は、ＴＫ73型式の甕の口縁部に共通する特徴である。８は、比較的小形で胎土が細かく、器壁が薄い。外面は暗灰色を呈し断面は暗赤褐色である。体部内外面は、残存している部分では丁寧にナデられている。９は、胎土が粗く他の須恵器の胎土と異なる。10は、口縁端部が面をもつ甕である。体部内外面には調整のタタキの痕跡が認められるが、ナデによって消されている。11は、須恵器の甑と考えられる土器である。把手部分には、縦方向に溝が刻まれている。口縁部は１/３程残存しているが、ひずみが大きいため器壁の傾きが変わる可能性も高い。器壁外面は暗青灰色を呈し、内面は外面に比べやや白味を帯び、断面は赤褐色である。外面は縦方向の並行タタキの跡が認められ、タタキの後に沈線が施されている。



第２図　遺物実測図(1)



第３図　遺物実測図(2)



第4図　SX36822遺物出土状況

内面は横方向のナデが認められるが、把手の裏面は強い横方向のナデが施されている。

12は、大型の須恵器の脚部である。上部には接合痕が認められる。脚部外面には上下に1か所ずつ接合痕が認められることから、装飾付須恵器であった可能性が高い。13は、口径が約26cmの杯身である。底部には回転ヘラケズリが認められる。12･13は、MT15と考えられる須恵器と共に出土している。

14は、土師質の把手部分である。上面には縦長の刺突が認められる。15は、土師質の格子目タタキを外面にもつ土器の体部である。いわゆる韓式土器と考えられる。

②B地区

17は、革袋形の須恵器である。体部外面には半裁竹管による施文状の紋様が施されている。18は、古墳時代の包含層から出土した土製の馬形である。手ずくねによって造られており胴部は中空である。21は、古墳時代の竪穴式住居址の埋土からの出土ではあるが、青銅製の素文鏡が出土している。鈕は中央部にあり穿孔が施されている。

③C-4地区

16は、軟質の韓式土器である。器形は甕を呈し、外面には格子目のタタキが施され、内面はケズリによって調整されている。胎土はきめが細かく土師器に比べ焼成もよい。

④算用田遺跡

19は、大山崎町教育委員会によって実施された1985年調査時に出土した須恵質の鳥形𨱗と想定できる資料である。器壁外面には竹管による施文が施されている。また、当センターによって発掘調査された1992年度の発掘調査区内からは、20の器壁外面に縄蓆文をもつ、須恵質の土器体部が出土している。

3．小結

以上に提示してきた遺物は、ＴＫ73型式と考えられる初期須恵器や韓式土器、通常墳墓に埋納されることが多い𨱗や装飾付き須恵器である。これらの土器は住居址等の一般に認められる生活遺構からの出土遺物とは器種の構成が異なっている。

Ｂ地区においては、第４図で示したＳＸ36822ように完形の須恵器土師器の土器群が埋置した状態で検出されている。図上に黒い点で示しているのは滑石製の臼玉で、130点(現在洗い出し中で、増加する可能性が大きい)出土している。ＳＸ36822のような遺構は、Ｂ地区では他に３か所認められる。いずれもＴＫ10前後の時期に位置付けられる。これらの遺構は北から南に流れる古墳時代の自然流路に近接しており、同じ調査区から検出された21の素文鏡や馬形の存在からも水辺の祭祀跡と想定される。

ここで示したＡ地区や小泉川の下流部に位置する算用田遺跡の遺物の多くがＳＸ36822よりも古い時期のものであるが、これらの特殊な遺物の存在から下植野南遺跡周辺の水辺の祭祀が５世紀代に遡ることが想定できる。

（なかがわ・かずや＝当センター調査第２課調査第４係調査員）

注１　戸原和人・竹井治雄・石尾政信他「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992、戸原和人・竹井治雄・石尾政信・岩松　保・中川和哉・鍋田　勇他「名神高速道路関係遺跡平成４年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第57冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

注２　林　　亨『算用田遺跡－右京192次発掘調査概報－』(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第９集　大山崎町教育委員会)　1991、中川和哉「算用田遺跡発掘調査概要(ＩＫ-16)」(『京都府遺跡調査概報』第53冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

府内遺跡紹介

62. 法住寺殿跡

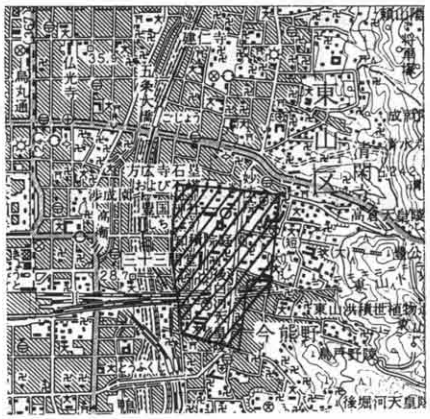
法住寺殿は、後白河法皇の居所として著名で、木曾義仲が平安時代の末に襲撃して後白河法皇方を打ち破った場所としても名高いところである。

この法住寺殿という地名は、元来がこの地域にあった法住寺の名前にちなんでいる。法住寺は、当時の右大臣であった藤原為光が永延2(988)年3月に建立した寺院で、『栄花物語』にも記載されている。それによれば、当時の円融上皇以下多くの公卿も供養には参加しており、相当の大きな寺院であったことがわかる。この法住寺の場所は、『阿娑婆抄』や『拾芥抄』によれば、「法性寺北」とあることから、杉山信三氏は七条の末から八条坊門末の間にあって、しかも山手側と推定されている。

この法住寺は、創建者の藤原為光が正暦3(992)年6月に太政大臣で一条殿で薨去すると、弟で僧侶であった尋光が管理するところとなった。この尋光が法住寺の管理をしている間に、藤原道長の息子である長家の妻の法要が営まれたりしている。藤原長家の妻の法要は、法住寺の創建者である為光の孫に当たることによっているとみられる。

このように、摂関期に建立された法住寺ではあるが、長元5(1032)年12月8日に藤原頼宗の九条第から出火した火事の類焼のため、焼亡することになった。その後の寺院としての歩みについては、史料がなく、全くわからない。

この法住寺の跡地が後白河上皇の院御所として史上に姿をみせるのが、永暦2(1161)年であり、法住寺焼亡から約130年が経過している。その間、法住寺では近衛天皇の四十九日の法要が営まれたりするなど、寺院としては一応存続していたことがうかがわれる。後白河上皇が法住寺殿へ移るのは、『続群書類従』所引の『法住寺殿御移徒部類』によれば、永暦2(1161)年4月13日の夜のことである。そこには、「今夜、上皇東山御所移徒也」とあって、新たに建設された法住寺殿は、「東山御所」とも呼ばれたことがわかる。同書に



遺跡所在地(1/50,000)

は、元来、法住寺殿の建立は、法住寺の地であると同時に、藤原信西の屋敷地であったことが見えている。その地は、前年の平治の乱の時に焼失したため、平治の乱の首謀者で死亡した藤原信頼の中御門西洞院の雑屋を移築して建立したのである。

こうして法住寺殿の建設が始まり、翌永暦２年には上皇が院御所と定めてからは、次第に御所の内部が拡張され始めた。これは、後白河院政が軌道に乗って権力の中枢になったことだけでなく、建春門院や高倉天皇が立太子するときまで同居したことなども、拡充の要因としてあげられよう。法住寺殿は、朧谷　寿氏の考証によれば、北殿と南殿に分かれ、史料上では、「七条御所」「七条上御所」と呼ばれる「法住寺北殿」が先に建立されたようである。建春門院は、この北殿を御座所として、東宮の行啓を受けている。

その後、仁安２(1167)年正月19日に新造の御所として法住寺南殿へ上皇が移っている。この法住寺南殿は、史料では「南殿」とか、単に「法住寺殿」と呼ばれて出てくる。『兵範記』の同日条によれば、「今夜、法住寺新造御所、上皇渡御、移徒儀、豫去四日勘日時、被定雑事」とあり、この月の四日に移る日を決定していたのであるから、殿舎の建築はそれよりも前に完成していたことがうかがわれる。しかも、続く20日条には、「法住寺殿、件御所、従三位俊盛卿去年奉院宣募讃岐周防両国功」とあり、前年の仁安元年から造営があったことを示している。このことは、北殿が造営されてわずか５年後にすぎない。

その後しばらくは、この法住寺南殿での事業がかなり多くなる。後白河上皇が今様に精進したことはよく知られているが、15日間毎夜連続して今様が催されたのもこの南殿である。また、上皇の出家も南殿の御懺悔堂で行われている。その構造も、太田静六氏が承安４(1174)年の高倉天皇の朝覲行幸や七番相撲御覧のときの記事をもとに詳細に復原されている。それによれば、寝殿(正殿)を中心に北・東・西に対屋を設け、南に大きな庭を空閑地として設け、さらにその南に南池を設けるといった、典型的な寝殿造りであった。

承安４(1174)年８月になると、後白河法皇と建春門院は、七条殿へ移っている。この時の渡御は、『吉記』の承安４年８月10日条によれば、「今夜兩院七條殿御移渡也、本舎屋雖無指破損、偏以破却、今被入東西郭、所被新造也、爲院沙汰、西光一向造營也、御移徒事、泰經朝臣奉行之、毎事略儀云々。(下略)」とあり、それほどの破損はなかったが、新たに東西郭を法皇の沙汰で西光法師が造営したことが記されている。これ以後、法皇夫妻はしばらく北殿ですごしており、安元２(1176)年の建春門院の崩御に伴う仏事も七条殿、すなわち法住寺北殿で行われている。

ところが、鹿ヶ谷の変を経て、治承３(1179)年11月になると、平清盛は後白河法皇を鳥羽殿へ幽閉したため、しばらく法皇はここを御在所として使うことはなかった。しかし、清盛の死後わずか１か月足らずで、治承５(1181)年閏２月25日に法皇は再び法住寺殿へと

移っているのである。さらにその年の12月になると、南殿の北西のごく近いところに新造の御所を建てて、妹の八条院とともに移っている。

ところが、寿永2(1183)年7月になると、平氏は安徳天皇を奉じて都落ちし、東国からは木曾義仲と源行家の源氏軍が入京してきた。はじめは、良好であった法皇と義仲は、源頼朝の使者としてやってきた義経の入京を拒否して、鎌倉と対立関係にはいった。すると、急速に法皇と義仲の対立も激しくなり、11月にはいると、対立は決定的になった。11月18日には後鳥羽天皇も法住寺殿へ行幸し、法住寺殿は防備を固めた。木曾義仲は、翌19日に法住寺殿を急襲した。『玉葉』などによれば、義仲は法住寺殿を2時間ほどの間に落としてしまい、法皇は松殿基房の五条東洞院邸に移されることになった。

このようにして、法住寺殿は炎上して灰燼に帰してしまった。その後、再建されるのは、平氏や奥州藤原氏が滅んでからのことで、建久2(1191)年春に源頼朝の命令で法住寺殿の再建が開始された。後白河法皇は、いったんこの再建された法住寺殿へ入ったが、まもなく、六条殿へ戻り、翌3年に崩御する。

鎌倉時代以降の法住寺殿は、再び法住寺という寺院として登場することの方が多くなる。特に、山科家の祖先である丹後局が後白河法皇の寵愛をえて権力を振るったことから、山科家の管理のもとに入った。この法住寺を始め、法住寺の付属施設としての蓮華王院や最勝光院が存続することになった。そのうち、最勝光院は正安3(1301)年に火事で延焼してしまい、今は蓮華王院の中の三十三間堂が残っているにすぎない。

この法住寺殿跡は、1965年、1975年、1978年に大きな調査が実施された。その中でも、七条通りの南側で、七条通りと東大路通りの交差点付近で鎧や弓矢など数体分が見つかった土坑が検出されている。この鎧などと伴出した土師器の年代が12世紀であることから、鎧や弓矢が木曾義仲の法住寺殿襲撃と関係のある武将か、もしくは院方の武将のものである可能性が強く指摘されている。

(土橋　誠)

<参考文献>

太田静六「後白河上皇の『法住寺殿』に就いて」『考古学雑誌』34-2　1944

大石良材「法住寺殿跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1966)』　京都府教育委員会)　1966

寺島孝一「法住寺跡出土の鬼瓦」『古代文化』31-1　1979.1

佐々木英夫「法住寺跡出土の常滑壺」『古代文化』31-3　1979.3

杉山信三『院家建築の研究』　吉川弘文館　1981

寺島孝一・飯島武次・朧谷　寿ほか『法住寺殿跡』(平安京跡研究調査報告第13輯　(財)古代學協會)　1984

長岡京跡調査だより・49

平成６年２月23日・３月23日・４月28日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮内３件、左京域23件、右京域14件、京外その他４件の計44件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1994年４月末現在)

番号	次　数	調　査　地	調査機関	調査期間
1	宮内第284次	向日市上植野町南開54-1	(財)向日市埋文	2/21～3/9
2	宮内第285次	向日市森本町藪路27	(財)向日市埋文	4/11～5/17
3	宮内第286次	向日市寺戸町南垣内61	(財)向日市埋文	4/18～5/20
4	左京第286次	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	4/7～3/4
5	左京第303次	京都市南区久世東土川	(財)京都府埋文	4/7～8/2
6	左京第304次	京都市南区久世東土川長丸	(財)京都府埋文	6/22～3/4
7	左京第306次	京都市伏見区淀橋爪町	(財)京都市埋文	4/1～3/31
8	左京第313次	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	7/26～
9	左京第315次	京都市伏見区久我西出	(財)京都府埋文	9/6～2/25
10	左京第317次	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	10/25～2/25
11	左京第320次	向日市鶏冠井町十相他	(財)向日市埋文	1/18～1/26
12	左京第321次	京都市伏見区羽束師古川町	(財)京都市埋文	1/18～3/14
13	左京第322次	向日市上植野町角前10-1	(財)向日市埋文	2/1～3/14
14	左京第323次	向日市鶏冠井町十相4	(財)向日市埋文	1/31～3/4
15	左京第324次	向日市鶏冠井町沢の東5	(財)向日市埋文	2/7～2/25
16	左京第325次	長岡京市東神足二丁目119他	(財)長岡京市埋文	3/23～3/31
17	左京第326次	長岡京市神足麦生4-7･5-5	(財)長岡京市埋文	3/14～4/12
18	左京第327次	向日市森本町石田12・13	(財)向日市埋文	4/4～6/24
19	左京第328次	向日市鶏冠井町上古	(財)向日市埋文	4/1～6/30
20	左京第329次	京都市南区東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/11～
21	左京第330次	京都市南区東土川町正登	(財)京都府埋文	4/11～
22	左京第331次	京都市南区東土川町正登	(財)京都府埋文	4/11～
23	左京第332次	向日市鶏冠井町清水	(財)京都府埋文	4/11～
24	左京第338次	長岡京市神足ミドロ14-1	(財)長岡京市埋文	4/18～
25	左京第339次	京都市伏見区淀橋爪町地内	(財)京都市埋文	4/1～
26	左京第340次	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文	4/4～
27	右京第428次	大山崎町下植野寺門･五条本	(財)京都府埋文	4/7～3/4
28	右京第453次	長岡京市友岡二丁目113-5	(財)長岡京市埋文	1/10～3/14
29	右京第454次	大山崎町円明寺仏生田5	大山崎町教委	12/20～2/22
30	右京第455次	長岡京市長岡一丁目323	(財)長岡京市埋文	1/20～2/17
31	右京第457次	長岡京市久貝一丁目551-4	(財)長岡京市埋文	2/2～2/10
32	右京第458次	長岡京市久貝二丁目215-3	(財)長岡京市埋文	2/3～2/19

33	右京第459次	長岡京市長法寺清水ヶ瀬2-3	(財)長岡京市埋文	2/16～3/4
34	右京第460次	長岡京市天神一丁目414-1	(財)長岡京市埋文	2/28～4/15
35	右京第461次	大山崎町円明寺西法寺34-1	大山崎町教委	2/24～3/31
36	右京第462次	大山崎町円明寺西法寺1-30	大山崎町教委	2/24～3/4
37	右京第463次	大山崎町円明寺西法寺40-5	大山崎町教委	2/24～3/31
38	右京第464次	長岡京市神足三丁目213-1	(財)長岡京市埋文	4/1～4/20
39	右京第465次	長岡京市馬場民家浦40-4・5	(財)長岡京市埋文	4/12～5/11
40	右京第467次	大山崎町下植野宮脇91・92	大山崎町教委	4/8～4/22
41	西ノ岡遺跡第３次	向日市物集女町吉田1	(財)向日市埋文	2/14～4/13
42	中海道遺跡第24次	向日市物集女町クズ子7	(財)向日市埋文	3/9～3/11
43	中海道遺跡第25次	向日市物集女町御所海道3-2	(財)向日市埋文	1/6～2/7
44	中海道遺跡第26次	向日市物集女町御所海道1-1	(財)向日市埋文	2/8～3/11

宮内第284次（１）

（財）向日市埋蔵文化財センター

朝堂院南方官衙地域の調査。従前より確認されている南北棟の礎石建物跡（ＳＢ20100）の南東部分を調査した。建物規模は、２間×７間（以上）で、東西両面に廂を持ち、柱間は、梁間３ｍ（10尺）・桁行3.9ｍ（13尺）に復原される。今回、東側柱心から東2.1ｍの部分で凝灰岩地覆石の痕跡を検出した。この建物跡は、朝堂院の東西両朝堂と規模・構造とも等しく、西朝集殿に相当する可能性が大きい。

左京第326次（17）

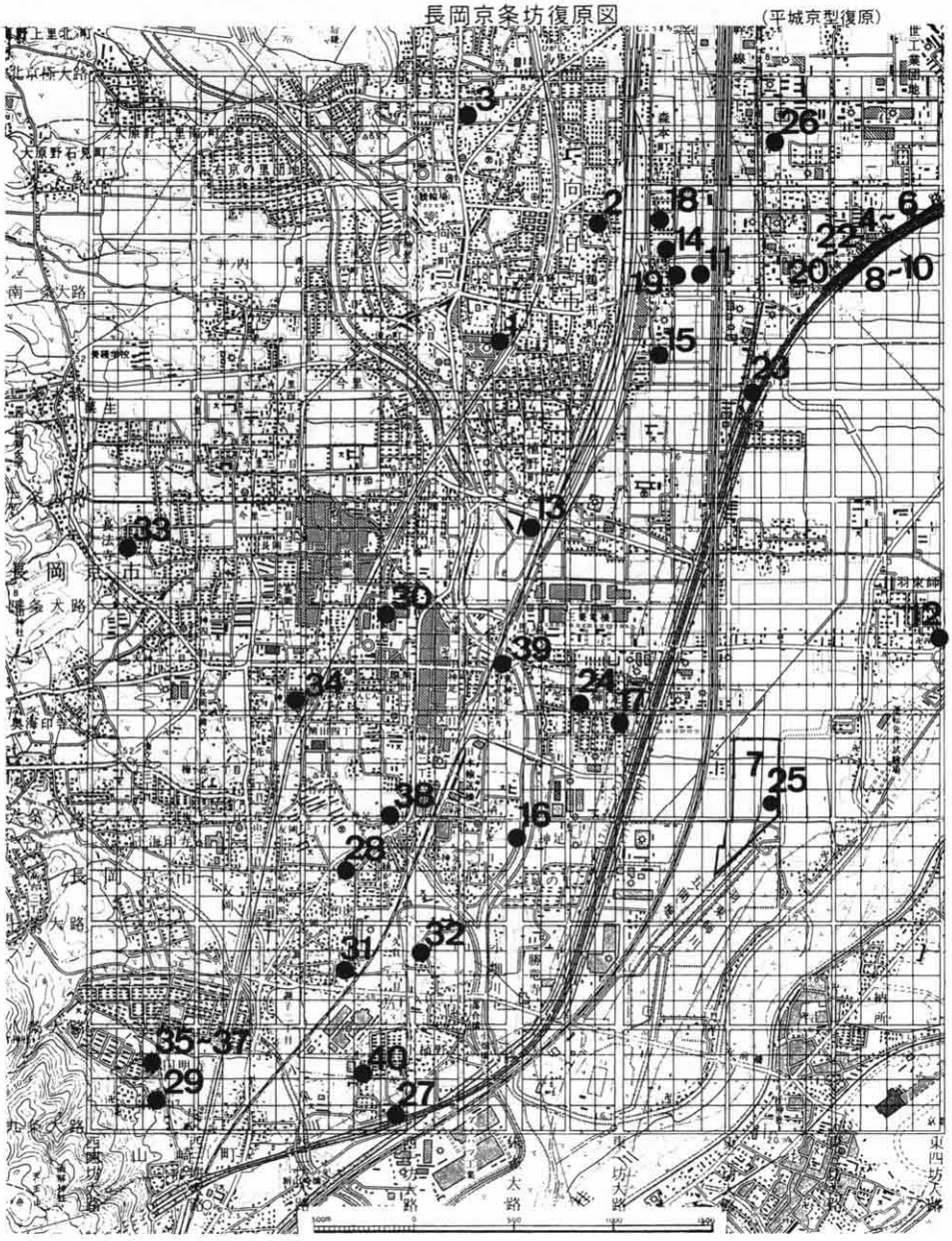
（財）長岡京市埋蔵文化財センター

東一坊大路東側溝及び、六条条間小路南側溝を確認。同大路の溝内の２か所から、石塊と板材を組み合わせた橋状の遺構を検出した。溝内からは、長岡京期の土器類を中心に、二彩陶器、製塩土器、線刻・墨書土器、漆付着土器、土馬、木簡、木製品（櫛・糸巻）、鉄釘、皇朝銭（和同開珎・神功開寶）、碁石、獣骨、種子など、多種の遺物が出土した。

その他

出土遺物のトピックスでは、左京第304次（６）の調査で、墨で手綱や鞍を描いた土馬１点、左京第338次（24）では、烏帽子か撲頭と思われる漆塗布製品と漆紙文書、左京第339次（25）では、古墳時代の木製輪鐙（完形品）１点、右京第454次では、後期旧石器の石核と尖頭器が各１点ずつ出土した。

（辻本和美）

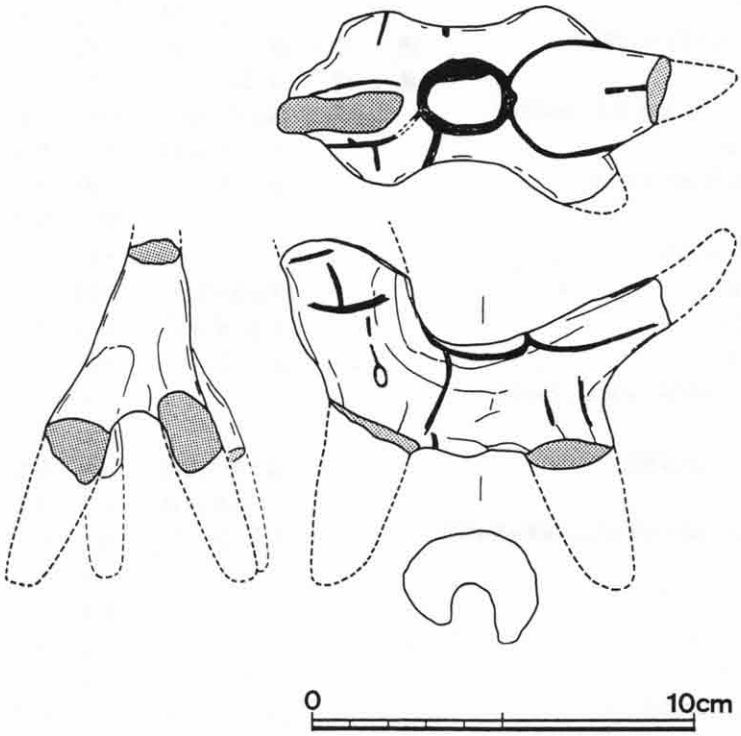


▽番号は一覧表・本文（）内と対応

調査地位置図

長岡京連絡協議会では、現地調査の報告と合わせて、調査担当者がより長岡京への理解を深めるため資料報告を行っている。以下、昨年度の資料報告について発表者と題目を掲げておく。

月	日	所　属	発表者	発表内容
4	27	長岡京市埋文	木村泰彦	古代の鉸具について
5	26	京都府埋文	竹井治雄	掘立柱建物の基礎構造について
6	23	大山崎町教委	古閑正浩	便所(トイレ)考古学の諸問題
7	28	向日市埋文	松崎俊郎	二条大路の周辺
8	25	長岡京市埋文	中島皆夫	長岡京跡左京第295次調査出土の銅製錘(分銅)について
9	22	京都府埋文	中川和哉	長岡京域における歴史地理学的研究の問題点(予察)
10	27	京都市埋文研	吉崎　伸	長岡京期の小溝群について
11	24	向日市埋文	國下多美樹	都城における土器供給体制の一側面
12	22	長岡京市埋文	原　秀樹	長岡京廃都直後の土地利用
1	26	京都府埋文	鍋田　勇	乙訓地域出土の韓式系土器・甑について
2	23	向日市資料館	玉城玲子	鶏冠井興隆寺について
3	23	向日市埋文	山中　章	初期平安京の造営と構造



長岡京跡左京第304次出土墨書土馬

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

（平成６年６月１日現在）

理事長
福山　敏男
（京都大学名誉教授）

副理事長
樋口　隆康
（京都府文化財保護審議会会長・京都大学名誉教授）

常務理事
城戸　秀夫

理　事
中澤　圭二
（京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授）
川上　　貢
（京都府文化財保護審議会会長職務代理・京都大学名誉教授）
上田　正昭
（京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授）
藤井　　学
（京都府立大学文学部教授）
足利　健亮
（京都大学大学院人間・環境学研究科長）
佐原　　眞
（国立歴史民俗博物館副館長）
都出比呂志
（大阪大学文学部教授）
藤田　价浩
（西芳寺貫主）
高橋　正典
（京都府総合府民部次長兼文化芸術室長）
武田　　暹
（京都府教育庁指導部長）
堤　圭三郎
（京都府教育庁指導部理事・文化財保護課長事務取扱）

監　事
吉田三枝子
（京都府出納局長）
加藤　裕之
（京都府監査委員事務局長）

事務局長	城戸　秀夫	
次　長	佐伯　拓郎	
総務課	課長	佐伯　拓郎（兼）
	課長補佐	安田　正人
	総務係長	安田　正人（兼）
	主事	藤原　寛志　杉江　昌乃
		今村　正寿　鍋田　幸世
		松尾　幸枝
	調査員	橋本　清一
調査第1課	課長	高橋美久二
	課長補佐	小山　雅人
	企画係長	水谷　壽克
	主任調査員	村田　照久
	嘱託	田中　敦義
	資料係長	小山　雅人（兼）
	主任調査員	松井　忠春　土橋　誠
	調査員	田中　彰
調査第2課	課長	安藤　信策
	課長補佐	平良　泰久
	調査第1係長	伊野　近富
	主任調査員	増田　孝彦
	調査員	岡崎　研一　田代　弘
		柴　暁彦　石崎　善久
		河野　一隆　筒井　崇史
	調査第2係長	奥村清一郎
	主任調査員	引原　茂治
	調査員	黒坪　一樹　小池　寛
		尾崎　昌之　野島　永
		大岩　洋一　野々口陽子
	調査第3係長	辻本　和美
	主任調査員	石井　清司
	調査員	森正　哲次　竹原　一彦
		伊賀　高弘　森島　康雄
		有井　広幸　岸岡　貴英
	調査第4係長	平良　泰久（兼）
	主任調査員	戸原　和人
	調査員	竹井　治雄　石尾　政信
		岩松　　保　中川　和哉

センターの動向（6.2.1～4.30）

1．できごと

2．1　長岡京跡第400次(長岡京市、乙訓土木)関係者説明会

3～4　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於:滋賀県)城戸局長、今村主事出席

3　伏見城跡発掘調査終了(10.4～)

4　長岡京跡左京第303次(京都市・名神ＰＡ工区Ｂ－１ａ地区)発掘調査終了(5.6～)

9　城戸局長、市坂瓦窯跡(木津町)現地視察

黒部製鉄遺跡(弥栄町)発掘調査終了(11.24～)

奈具岡遺跡(弥栄町)発掘調査終了(12.1～)

10　上野古墳群(丹後町)発掘調査終了(7.20～)

大島東遺跡(綾部市)関係者説明会

長岡京跡左京第286･317次(京都市・名神京都工区Ｃ－２・Ｅ－１地区)関係者説明会

内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査終了(5.20～)

14　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於:元興寺文化財研究所)中谷次長、伊野係長出席

15　左坂古墳群Ｂ・Ｇ支群(大宮町)発掘調査終了(5.27～)

17　七百石遺跡(綾部市)現地説明会

18　長岡京跡左京第317次(名神京都工区Ｅ-3地区)発掘調査終了(1.24～)

20　センター職員採用試験

21　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック・コンピュータ委員会(於：大阪市文化財協会)土橋主任調査員、今村主事出席

23　長岡京連絡協議会

24　黒部製鉄遺跡関係者説明会

ニゴレ遺跡(弥栄町)現地説明会

25　城戸局長、ニゴレ遺跡現地視察

ニゴレ遺跡発掘調査終了(4.20～)

七百石遺跡発掘調査終了(8.2～)

大島東遺跡発掘調査終了(10.18～)

長岡京跡左京第317次(京都市・名神京都工区Ｅ－１、Ｅ－２地区)発掘調査終了(10.25及び12.10～)

長岡京跡左京第303次(京都市・名神ＰＡ工区Ｂ－１ｂ地区)発掘調査終了(11.22～)

長岡京跡左京第315次(京都市･名神ＰＡ工区Ｂ－２ａ地区)発掘調査終了(9.6～)

26　第70回埋蔵文化財セミナー(研修会)開催(別掲)

27　「スライドでみるおとくにの発掘」(於:長岡京市)講師参加(竹井調査員)

3．1　長岡京跡左京第304次(京都市･名

神京都工区Ａ-2地区)関係者説明会

4　長岡京跡右京第428次(大山崎町・名神大山崎工区Ｃ-5ｂ地区)関係者説明会、発掘調査終了(12.6～)

長岡京跡左京第304次(京都市・名神京都工区Ａ-2地区)発掘調査終了(11.4～)

瓦谷遺跡(木津町)発掘調査終了(8.5～)

市坂瓦窯跡発掘調査終了(11.10～)

上人ヶ平埴輪窯跡(木津町)発掘調査終了(9.2～)

燈籠寺遺跡(木津町)発掘調査終了(12.2～)

16　職員研修－科学分析と考古学－講師、天理大学附属天理参考館金原正明学芸員

17～19　作業主任者技能講習－地山支保工－(於:京都市)野島調査員出席

23　長岡京連絡協議会

26　第39回役員会・理事会(於:ルビノ京都堀川)福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、城戸秀夫常務理事、中澤圭二、川上　貢、上田正昭、藤井　学、武田　暹、堤　圭三郎の各理事及び加藤裕之監事出席

31　退職職員辞令交付(別掲)

4．1　新規採用職員辞令交付(別掲)

人事異動(別掲)

11　長岡京跡左京第329次(京都市・名神ＰＡ工区Ａ-2地区)発掘調査開始

長岡京跡左京第330次(京都市・名神ＰＡ工区Ａ-3地区)発掘調査開始

長岡京跡左京第332次(向日市・名神向日工区)発掘調査開始

梅谷瓦窯跡(木津町)発掘調査開始

市坂瓦窯跡(木津町)発掘調査開始

18　黒部製鉄遺跡(弥栄町)発掘調査開始

ニゴレ遺跡(弥栄町)発掘調査開始

山尾古墳(綾部市)発掘調査開始

西飼神社遺跡(舞鶴市)発掘調査開始

弓田遺跡(木津町)発掘調査開始

燈籠寺遺跡(木津町)発掘調査開始

20　洞中古墳(舞鶴市)発掘調査開始

25　北谷古墳群(久美浜町)発掘調査開始

27　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿地区ＯＡ委員会(於:和泉大津市)土橋主任調査員出席

28　長岡京連絡協議会

2．普及啓発事業

2.26　第70回埋蔵文化財セミナー｛研修会｝開催(於:宮津市・府立丹後郷土資料館)－丹後の古墳－石崎善久「大宮町左坂古墳群の調査について」、河野一隆「丹後町上野古墳群の調査について」、佐藤晃一「丹後の古墳時代について」

3．人事異動

3.31　三好博喜調査員退職(綾部市教育委員会へ)

八木政明調査員退職(久御山中学校へ)

4．1　大岩洋一調査員採用(京都府教育庁から派遣)

野々口陽子調査員新規採用

(安藤信策)

受贈図書一覧（6.2.1～4.30）

(財)北海道埋蔵文化財センター	調査年報5 平成4年度
苫小牧市埋蔵文化財調査センター	苫小牧市 美沢東遺跡群発掘調査概要報告書 ～道道静川美沢線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査～、苫小牧市 柏原5遺跡発掘調査(第3次)概要報告書 ～一般国道235号日高自動車道苫東道路第3工区改良工事に伴う発掘調査～、苫小牧市 ニナルカ遺跡発掘調査概要報告書 ～一般国道235号日高自動車道苫東道路第3工区改良工事に伴う発掘調査～
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書第290集 東北横断自動車道遺跡調査報告19、同第292集 東北横断自動車道遺跡調査報告21、同第293集 東北横断自動車道遺跡調査報告22 作田B遺跡 糀内遺跡、同第294集 東北横断自動車道遺跡調査報告23、同第295集 東北横断自動車道遺跡調査報告24 本飯豊遺跡、同第297集 原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅳ
(財)福島市振興公社文化財調査室	福島市埋蔵文化財報告書第38集 台畑遺跡 確認調査 第1・2次発掘調査報告、同第47集 国道114号線国道改良工事関連埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 岩崎町遺跡、同第48集 平成3年度遺跡詳細分布調査報告書、同第49集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告1 赤沢口遺跡・清水遺跡、同第50集 摺上川ダム埋蔵文化財調査概要Ⅰ、同第51集 飯坂南部土地区画整理事業関連遺跡調査報告Ⅱ 月崎A遺跡(第5次調査)、同第52集 敷ヶ森遺跡 －縄文時代集落跡の調査－、同第53集 一般国道13号福島西道路関連遺跡発掘調査報告 鎧塚遺跡、同第54集 摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告2 前原遺跡・中島城館・吹込遺跡・下ノ平A遺跡、同第55集 摺上川ダム埋蔵文化財調査概要Ⅱ、同第56集 五郎兵衛館跡、同第57集 舘ノ山地区上水道配水池築造関係埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 大鳥城跡
(財)鹿島町文化スポーツ振興事業団	鹿島中世回廊 －古文書にたどる頼朝から家康への時代－
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団年報12
(財)市原市文化財センター	市原市文化財センター研究紀要Ⅱ、(財)市原市文化財センター調査報告書第46集 －千葉県市原市－草刈尾梨遺跡、同第49集 市原市椎津茶ノ木遺跡、第8回市原市文化財センター遺跡発表会要旨
神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター年報12、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告27 池子遺跡群Ⅰ、同28 平台貝塚
(財)山梨文化財研究所	宮ノ前遺跡 －韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書－
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書15 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12－東筑摩郡坂北村・麻績村内－
(財)石川県埋蔵文化財保存協会	小松市林遺跡 一般国道8号小松バイパス改築工事に係る発掘調査報告書

三重県埋蔵文化財センター	三重県埋蔵文化財調査報告87-16　近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊 10－、三重県の中世墓
(財)滋賀県文化財保護協会	一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ　正伝寺南遺跡、同Ⅴ　針江川北(Ⅱ)遺跡・吉武城遺跡、一般国道161号線(湖北バイパス)工事関連今津町内埋蔵文化財調査報告書　妙見山遺跡(妙見山古墳群)、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＸ－２　観音寺城下町遺跡　－蒲生郡安土町石寺所在－、欲賀西遺跡発掘調査報告書　－滋賀県住宅供給公社宅地造成事業に伴う－
(財)大阪文化財センター	第29回大阪府下埋蔵文化財研究会資料
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告37　Ⅰ東弓削遺跡＜第４次調査＞Ⅱ・Ⅲ久宝寺遺跡＜第１・６次調査＞　Ⅳ～Ⅵ萱振遺跡＜第４・５・８次調査＞、同38　高安古墳群　芝塚古墳、同39　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告
奈良国立文化財研究所	埋蔵文化財ニュース77　1989年度刊行埋蔵文化財発掘調査報告書に関する情報調査、文部省科学研究費補助金重点領域研究『遺跡探査』　第２回研究成果検討会議論文集
(財)桜井市文化財協会	平成５年度　春季特別展「埋文センター５年のあゆみ」
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第109集　寺家城遺跡・近信遺跡、同第115集　山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅸ)、研究輯録Ⅲ、ひろしまの遺跡－合冊(第１～50号)－
(財)広島市歴史科学教育事業団	(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書　第８集　広島市佐伯区五日市町所在　有井城跡発掘調査報告、同第９集　広島市中区西白島町所在　広島城外堀跡西白島交差点地点、同第10集　広島市佐伯区五日市町所在　今市城跡発掘調査報告、第16回文化財展　「大陸の風とともに～銅鐸交響曲～」、平成５年度　第１回考古学教室感想文集
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第２集　四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２、徳島県埋蔵文化財センター研究紀要　真朱　第２号
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十二冊　郡家一里屋遺跡、同第十三冊　郡家原遺跡、高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二冊　林・坊城遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市文化財調査報告書第37集　道後城北遺跡群Ⅱ
仙台市教育委員会	仙台市文化財パンフレット第33集　よみがえる氷河期の富沢、仙台市文化財調査報告書第160集　富沢遺跡　－第30次調査報告書Ⅱ(旧石器時代編)－
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第129集　栃木県埋蔵文化財保護行政年報[平成３年度]、同第130集　下野国分寺跡ⅠＸ　平成３年度発掘調査概報、同第131集　広表窯跡　付　欠ノ下遺跡　国庫補助中小河川改修事業利根川水系一級河川田川横山工区事業に伴う発掘調査、同

	第132集 砂田Ａ遺跡 一般県道宇都宮環状線に伴う埋蔵文化財発掘調査、同第133集 向田西遺跡 主要地方道路宇都宮・向田線改良工事に伴う発掘調査、同第135集 金山遺跡Ⅰ 一般国道４号(新４号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査、同第136集 大境遺跡 一般国道４号(新４号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター年報 第３号
坂戸市教育委員会	若葉台遺跡 －若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅱ－
鳩山町教育委員会	鳩山町埋蔵文化財調査報告 第16集 埋蔵文化財の調査(２)
千葉市教育委員会	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 －平成５年度－
市原市教育委員会	平成５年度 市原市内遺跡発掘調査報告
東金市教育委員会	平成５年度 東金市内遺跡発掘調査報告書
富津市教育委員会	千葉県 富津市内遺跡発掘調査報告書 飯野陣屋三の丸跡・内裏塚南方遺跡・横峰遺跡
木更津市教育委員会	千葉県木更津市 請西遺跡群発掘調査報告Ⅴ －山伏作遺跡－、千葉県木更津市 大畑台遺跡群遺跡発掘事前総合調査報告書 銭賦遺跡 小谷遺跡、千葉県木更津市 東谷遺跡群確認調査報告書、千葉県 木更津市内遺跡発掘調査報告書 伊豆山台遺跡
山武町教育委員会	平成５年度 山武町内遺跡発掘調査報告書
日野市教育委員会	日野市埋蔵文化財発掘調査報告14 京王百草園の発掘調査 ＝幻の真慈悲寺を探る＝、同15 日野ＳＳビル建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(南広間地遺跡第10次調査)、同16 (仮称)浅川公会堂建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書
佐久市教育委員会	佐久市埋蔵文化財調査報告書第３集 石附窯址群Ⅲ 長野県佐久市根岸石附窯址群第３次発掘調査報告書、同第４集 大ふけ遺跡発掘調査報告書、同第５集 立科Ｆ遺跡 ナイフ形石器文化成立期の集落研究、同第６集 上曽根遺跡発掘調査報告書、同第７集 三貫畑、同第９集 国道141号線関係遺跡、同第10集 聖原遺跡Ⅱ 長野県佐久市長土呂聖原遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第11集 赤座垣外遺跡発掘調査報告書、同第12集 周防畑遺跡群 若宮遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第15集 蛇塚Ｂ遺跡群 野馬久保遺跡 長野県佐久市新子田蛇塚Ｂ遺跡群野馬久保遺跡発掘調査報告書、同第16集 石並城跡、同第17集 市内遺跡発掘調査報告書1991(１月～３月)、同第18集 西曽根遺跡 長野県佐久市岩村田西曽根遺跡発掘調査報告書、同第19集 上芝宮遺跡 長野県佐久市長土呂上芝宮遺跡発掘調査報告書、同第20集 長土呂遺跡群 下聖端遺跡Ⅲ 長野県佐久市長土呂下聖端遺跡Ⅲ発掘調査報告書、同第21集 金井城跡Ⅲ 長野県佐久市小田井金井城跡第３次発掘調査報告書、同第22集 市内遺跡発掘調査報告書1991、同第23集 芝宮遺跡群・南上中原・南下中原遺跡 長野県佐久市長土呂南上中原・南下中原遺跡発掘調査報告書、同第25集 枇杷坂遺跡群 上久保田向Ⅳ発掘調査報告書
婦中町教育委員会	史跡 安田城跡 環境整備事業報告書(史跡等活用特別事業「ふるさと歴史の広場」)、富山県婦中町 友坂遺跡 発掘調査報告Ⅱ

大山町教育委員会	富山県大山町　一ノ瀬遺跡発掘調査報告　－ゴルフ場建設に伴う発掘調査－
小松市教育委員会	銭畑遺跡Ⅱ　レストラン建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
富来町教育委員会	山王丸山遺跡
岐阜市教育委員会	西野々遺跡発掘調査報告書、寺田遺跡第３次発掘調査概要報告書
美濃市教育委員会	塚穴古墳群発掘調査報告書
大垣市教育委員会	大垣市埋蔵文化財調査報告書第３集　長塚遺跡　－範囲確認調査報告書－、大垣市埋蔵文化財調査概要　平成３年度、岐阜県大垣市遺跡詳細分布調査概要報告書(Ⅱ) 平成２年度
袋井市教育委員会	遠江久野城　～その歴史と構造～、平成４年度補助金関係発掘調査報告書　－西楽寺・長者平遺跡・不入斗Ⅰ遺跡－、大畑遺跡Ⅶ　－平成４年度緊急発掘調査報告書－、袋井市考古資料集第１集　袋井の前方後円墳　－袋井の首長墓を考える－、川田・藤蔵渕遺跡、土橋遺跡Ⅵ　－平成４年度緊急発掘調査報告書－、鶴松遺跡Ⅵ　(主)浜北袋井線特定交通安全施設１種工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
野洲町教育委員会	野洲町文化財資料集　1993-1　平成４年度　野洲町内遺跡発掘調査概要、滋賀県野洲郡野洲町　宮山一号墳調査報告書、野洲川左岸遺跡発掘調査報告－４、野洲町埋蔵文化財調査集報－２
茨木市教育委員会	倍賀遺跡発掘調査概要報告書　－平成４年度発掘調査概報－
枚方市教育委員会	枚方市文化財調査報告第27集　枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1992
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財報告書12　大阪狭山市内遺跡群　発掘調査概要報告書４
八鹿町教育委員会	八鹿町ふるさとシリーズ第６集　史跡八木城跡
中町教育委員会	中町文化財報告６　鍛冶屋・下川遺跡、同７　円満寺遺跡
和歌山県庁　知事室文化振興課	和歌山県史　原始・古代
和歌山市教育委員会	木ノ本Ⅲ遺跡第３次発掘調査報告書、車駕之古址古墳発掘調査概報
総社市教育委員会	総社市　埋蔵文化財調査年報３(平成４年度)
広島県教育委員会	広島県埋蔵文化財保護行政資料４　「広島県の埋蔵文化財」－平成３年度事業の概要－、冠遺跡群Ⅱ　－1992年度の調査－
庄原市教育委員会	庄原市文化財調査報告書２　農村基盤総合整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　堂迫尻遺跡・守屋谷遺跡、庄原市文化財調査報告書１　則清1・２号遺跡
宗像市教育委員会	中世の海人と東アジア　宗像シンポジウム２
遠賀町教育委員会	遠賀町文化財調査報告書　第３集　鬼津・菜畑遺跡Ⅰ　福岡県遠賀郡遠賀町所在遺跡の調査、同第４集　尾崎・天神遺跡Ⅱ、同第５集　遺跡詳細分布調査報告書、同第６集　島津・塚の元古墳群
水巻町教育委員会	水巻町遺跡等詳細分布調査報告書　水巻町文化財調査報告書　第２集
伊万里市教育委員会	伊万里市文化財調査報告書第27集　瓶屋窯跡・瓶屋遺跡・餅田窯跡、同第31集　川内野遺跡　平山遺跡
大分県教育委員会	一般国道10号線　宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(１)、中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(３)、大分県内遺跡発掘調査概要　１、一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調

	査概要Ⅲ　手崎遺跡　大部遺跡、同Ⅳ　上野第１遺跡(東原・野間・平原地区)、成田尾遺跡・今村遺跡・馬場尾遺跡　大分空港道路建設に伴う発掘調査報告書Ⅱ、上ノ原横穴墓群Ⅰ　一般国道10号線バイパス発掘調査報告書(Ⅱ)、上ノ原横穴墓群Ⅱ　一般国道10号線バイパス発掘調査報告書(Ⅱ)、上ノ原横穴墓群 写真図版編
都城市教育委員会	都城市文化財調査報告書第26集　上大五郎遺跡・前畑遺跡、同第27集 上ノ園第２遺跡
佐土原町教育委員会	佐土原町文化財調査報告書第８集 隠山遺跡概要報告書
川南町教育委員会	平成４年度諸開発に伴う町内遺跡発掘調査報告書
鹿児島市教育委員会	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(18) 川上城跡
東北歴史資料館	東北歴史資料館 研究紀要 第16・17巻、同第18巻、高森遺跡Ⅱ
浦和市立郷土博物館	浦和市立郷土博物館研究調査報告書 第21集
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究年報１(1991・1992年度)、土偶シンポジウム２秋田大会　東北・北海道の土偶１(土偶の出現から遮光器土偶の成立期まで)、土偶シンポジウム２秋田大会　東北・北海道の土偶１　シンポジウム発表要旨、国立歴史民俗博物館研究報告　第55集、国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書５　日本出土の貿易陶磁 東日本編
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報16
千葉県立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第21号７
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館	平成５年度 芝山町内遺跡発掘調査報告書
出光美術館	出光美術館 館報第85号
大田区立郷土博物館	特別展「武蔵国造の乱」図録
富山市考古資料館	富山市考古資料館紀要 第13号
氷見市立博物館	特別展 近世の氷見町と庶民のくらし
三方町立郷土資料館	特別展 三方集落の歴史展
土岐市美濃陶磁歴史館	特別展「続・桃山の華 大坂出土の桃山陶磁」
静岡市立登呂博物館	開館20周年記念特別展 登呂の時代 －むらびとたちのくらしぶり－、静岡市立登呂博物館20年のあゆみ －21世紀への展開をめざして－
浜松市博物館	神ケⅠ・Ⅱ遺跡
名古屋市博物館	特別展 発掘された東海の古代 －律令制下の国々－
名古屋市見晴台考古資料館	見晴台'93　－見晴台遺跡第32次発掘調査市民参加の記録－、特別展 名古屋の縄文時代 解説書、特別展 名古屋の縄文時代 資料集、見晴台遺跡発掘調査報告書　－遺構編－、見晴台遺跡第31次発掘調査の記録、名古屋市見晴台考古資料館　年報10　1992年度事業報告書、旧紫川遺跡 第６次発掘調査報告書
常滑市民俗資料館	常滑市民俗資料館報 研究紀要Ⅵ
滋賀県立安土城考古学博物館	春季特別展 弥生の祈り人 ～よみがえる農耕祭祀～
大阪府立弥生文化博物館	シンポジウム資料集３　弥生から古墳へ　－日本の古代はこうして始まった－

岸和田市立郷土資料館	丹波篠山藩窯 王地山焼展
播磨町郷土資料館	1993 播磨町郷土資料館 館報 平成５年度 Vol. 5
佐賀県立博物館 佐賀県立美術館	佐賀県立博物館 佐賀県立美術館 年報 第23号
熊本市立熊本博物館	熊本市自然・文化資料集成Ⅴ［完結編］
東北学院大学学術研究室	東北学院大学論集 －歴史学・地理学－ 第26号
山形史学会	山形大学史学論集 第14号
立正大学熊谷校地遺跡調査室	遺跡調査室年報Ⅴ、同Ⅵ
法政大学文学部考古学研究室	高津尾遺跡17区発掘調査報告書 福岡県北九州市小倉南区所在遺跡の調査
立教大学学芸員課程研究室	Mouseion 39
東京大学構内雨水調整池遺跡調査会	本郷追分 東京大学農学部構内および隣接区道における下水道工事に伴う発掘調査報告書
日本大学史学会	史叢 第51号
祭祀考古学会	情報 祭祀考古学 創刊号
東海大学史学会	東海史學 第28号
愛知学院大学文学会	愛知学院大学論叢 文学部 第23号
大阪大学文学部	待兼山論叢 第27号
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第27号
奈良大学図書館	奈良大学紀要 第22号
山武考古学研究所	山武考古学研究所年報 No.11
(株)名著出版	歴史手帖 第22巻３号～５号
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第45号
国立国会図書館	日本全国書誌 1994-14 No.1960 JP94-18482～19931
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集 第４集
雄山閣出版(株)	季刊 考古学 第47号
(株)講談社	日本の美術全集 第１巻 原始の造形 縄文・弥生・古墳時代の美術
久保田遺跡調査会	西原遺跡 東京都板橋区西原遺跡発掘調査報告書
玉川文化財研究所	神奈川県高座郡寒川町 岡田遺跡範囲確認調査報告書、東京都 六間台遺跡発掘調査報告書Ⅰ、神奈川県藤沢市 渡内遺跡発掘調査報告書
鎌倉考古学研究所	鎌倉市 平成４年度鎌倉市内復旧治山事業(公共)に伴う発掘調査報告書 鎌倉城遺跡、鎌倉市 平成４年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 佐助ヶ谷遺跡内やぐら、史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書・Ⅷ、神奈川県・鎌倉市 玉縄城跡発掘調査報告書 －植木字相模陣374番他地点－
(財)古代學協會	古代文化 第46巻第２号～４号
古代を考える會	古代を考える55 古代家族・集落・村落の検討
姫路市立城郭研究室	姫路市立城郭研究室年報 Vol. 3 1993、日女道かがみ 昭和の大修理30周年記念誌
朝鮮学会	朝鮮学報 第150輯

宮内庁正倉院事務所	正倉院年報 第16号
奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所年報 平成３年度、橿原考古学研究所紀要 考古學論攷 第17冊、鴨神遺跡 奈良県文化財調査報告書第66集、松林苑跡Ⅱ 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第64冊、三陵墓東古墳－範囲確認調査概報－、奈良県第三浄化センター 箸尾遺跡を掘る、奈良県遺跡調査概報1988年度、同1989年度(第２分冊)、生駒郡 三郷町所在遺跡 発掘調査報告
帝塚山考古学研究所	考古学における計量分析 －計量考古学への道(Ⅲ)－、古代の水田を考える、第７回考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状
津山弥生の里文化センター	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集 別所谷遺跡 －津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告６－、同第50集 美作国府跡、同第51集 津山市大開古墳群・大開遺跡、同第52集 井口車塚古墳、同第53集 緑山北遺跡、年報 津山弥生の里 第１号(平成２～４年度)
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu通巻45号
(財)向日市埋蔵文化財センター	向日市埋蔵文化財調査報告書 第35集 長岡京木簡二 解説、同第37集、(財)向日市埋蔵文化財センター 年報 都城５
宇治市教育委員会	平等院 庭園発掘調査概要報告Ⅱ、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第22集 平等院旧境内遺跡発掘調査概報、平安建都1200年記念 第９回宇治市発掘調査報告会 世界と日本の考古学
大山崎町教育委員会	大山崎町の発掘 大山崎町埋蔵文化財調査報告書第11集
岩滝町教育委員会	京都府岩滝町文化財調査報告書 第12集 解谷古墳群
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館報 第11号(1993)
宇治市歴史資料館	平成４年度 宇治市歴史資料館年報、宇治文庫５ 宇治橋 －歴史と地理のかけはし－
花園大学考古学研究室	花園大学構内調査報告Ⅳ
京都工芸繊維大学	京都工芸繊維大学構内遺跡発掘調査報告書 京都大学西部構内遺跡
図書出版 文理閣	まちと暮らしの京都史
(財)泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第十巻、貨幣
口丹波史談会	口丹波史談 平成５－特集号
精華町の自然と歴史を学ぶ会	波布理曽能 第11号
伊野近富	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－(平成５年６月30日)抜刷
小高幸男	多知波奈考古 創刊号
丹羽 茂・柳澤和明	第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料
引原茂治	梨花女子大學校博物館圖録(21) 朝鮮白磁窯址發掘調査報告展
松井忠春	季刊 明日香風 第49号
森 浩一・中村潤子	馬の文化叢書 第１巻「古代－埋もれた馬文化」

編集後記

6月になり、じめじめと蒸し暑い日が続きますが、ようやく情報52号が完成しましたのでお届けします。

本号は、年度当初の号ということで、前年度の調査成果のまとめと、今年度の当調査研究センターの調査予定及び普及啓発事業の予定を掲載しました。また、研究面では、職員の調査・研究の成果だけでなく、方格規矩鏡に関する投稿原稿もありましたので、研究ノートとして掲載いたしました。よろしく御味読ください。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第52号

平成6年6月27日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷　中西印刷株式会社
〒602　京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)